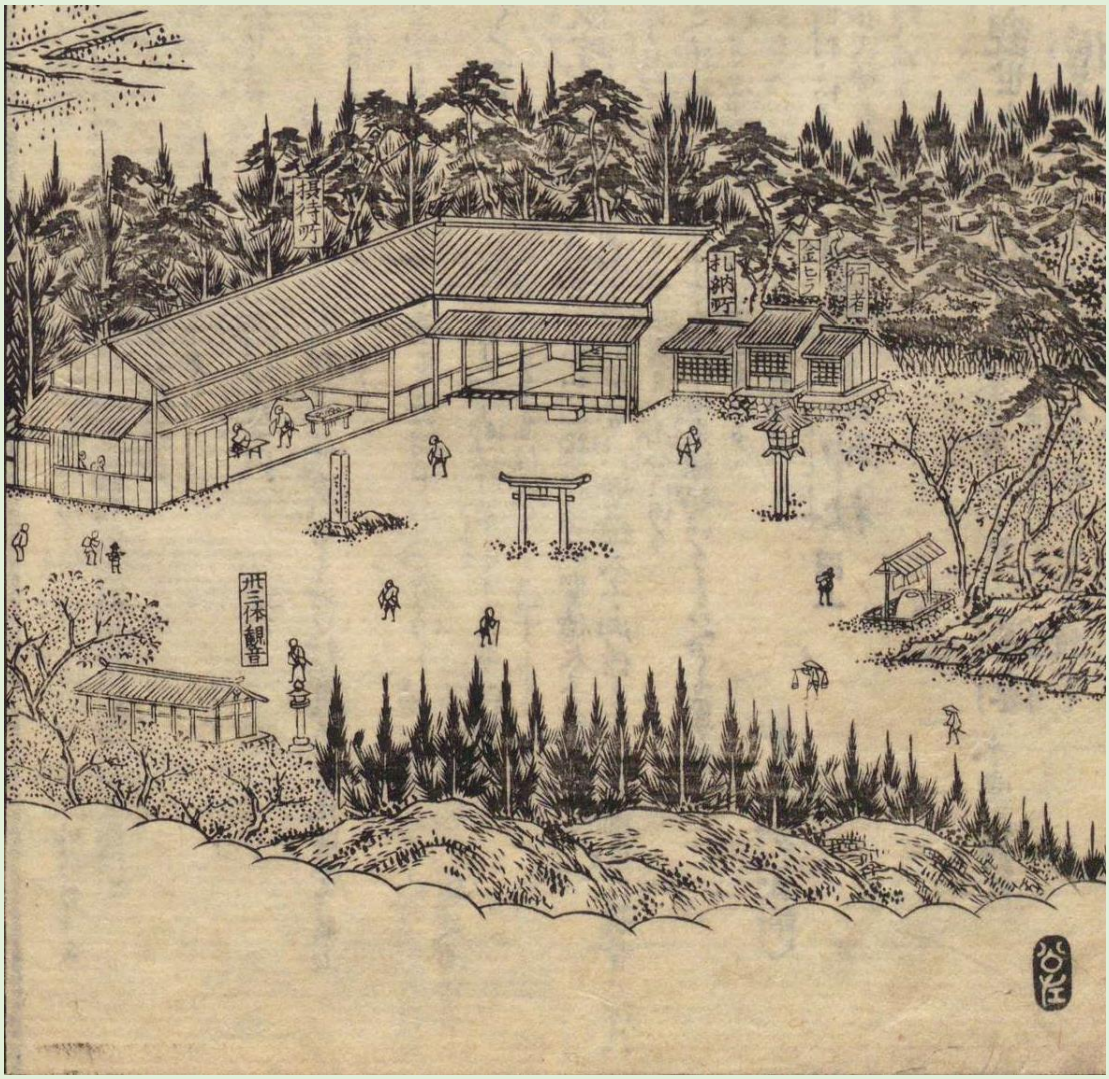
熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅰ

（伊勢市～大紀町）



令和６（2024）年３月

三重県教育委員会

例　　言

１．本書は、熊野参詣道伊勢路の学術調査報告書である。
２．熊野参詣道にかかる調査報告はこれまでに、三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ－熊野街道－』1981 年、三重県教育委員会『伊勢街道・朝熊岳道・二見道・磯部道・青峰道・鳥羽道－歴史の道調査報告書―』1986 年を刊行している。本書はこれらの成果に加え、令和５年度に実施した調査成果を追加した。
３．調査は下記の体制で実施した。
調査主体：三重県教育委員会　社会教育・文化財保護課
熊野参詣道伊勢路調査報告書検討委員会：小澤毅（三重大学教授：考古学）、板井正斉（皇學館大学教授：宗教社会学）、谷戸佑紀（皇學館大学准教授：歴史学）
調査・執筆担当：中井英幸（第１章）、水谷侃司（第２章、第３章１～４・９節）
宮原佑治（第３章５・６節）伊藤裕偉（第３章７・８節）
４．調査にあたり下記の方々からご指導・ご協力を得た。（敬称略・順不同）
慶雲寺（大紀町）、奥山武司（大紀町）、鈴木眞理（大紀町）、前納俊郎（大紀町）、小林秀、瀧川和也、神宮文庫、伊勢市、玉城町教育委員会、多気町教育委員会、大台町教育委員会、大紀町教育委員会、三重県環境生活部

凡　　例

１．地図は、2017 三重県共有デジタル地図（数値地形図 2500（平成 29 年度撮影））三重県市町総合事務組合を用いた。
２．下記の資料については、著作権の保護期間が満了したものである。
『西国三十三所名所図会』『伊勢参宮名所図会』（国立国会図書館デジタルコレクション）、『西国三十三ヶ所めぐり絵図』（奈良県立図書情報館まほろばデジタルライブラリー）CC ライセンス。
３．写真はすべて社会教育・文化財保護課職員が撮影したものを使用した。
４．文中に記載した金石文等は、以下の記号で示した。
「／」‥‥改行
「〈　〉」‥‥割注または２行取りの文字
「文字」‥‥読みが不確定な文字
「□」‥‥判読不能文字（１文字）
「〔以下不明〕」‥‥判読不能文字（字数不明）
５．本書では、熊野参詣道に相当する道については「熊野道」と表記した。熊野参詣道以外の「街道」と重複する部分については、必要に応じ「街道」と表記した。
６．挿図上での熊野道の表記は、現存部分（アスファルト舗装部分を含む）は実線、遺存していない部分や想定部分については破線で示した。巻末の地図については、煩雑となるため、全て実線で示した。
７．原則として常用漢字を用いたが、必要に応じて常用外漢字を用いた。

目　　　次

例言　凡例
第１章　はじめに……………………………………1
第２章　熊野参詣道伊勢路の概要……………………2
第３章　熊野参詣道伊勢路（伊勢市・玉城町・多気町・大台町・大紀町）…5
　1　内宮から田丸……………………………………5
　2　田丸から原……………………………………13
　3　石仏庵（原の大辻観音）………………………17
　4　野中から千代……………………………………27
　5　柳原から栃原……………………………………35
　6　神瀬から上楠……………………………………47
　7　粟生から下三瀬…………………………………53
　8　三瀬川から阿曽…………………………………61
　9　柏野から梅ヶ谷…………………………………73
広域図……………………………………………………77

挿図目次

図１　熊野参詣道伊勢路と熊野三山位置………………2
図２　『西国三十三ヶ所めぐり絵図』…………………4
図３　宇治法楽舎跡………………………………………5
図４　赤福本舗……………………………………………5
図５　内宮から外宮への道………………………………6
図６　旧慶光院……………………………………………7
図７　猿田彦神社…………………………………………7
図８　宇治惣門跡…………………………………………7
図９　古市中之地蔵町遺跡………………………………7
図 10　間の山（『西国三十三所名所図会』）…………8
図 11　麻吉旅館……………………………………………9
図 12　小田橋（『伊勢参宮名所図会』）………………9
図 13　小田橋の道標………………………………………9
図 14　旧豊宮崎文庫………………………………………9
図 15　外宮（『西国三十三所名所図会』）……………10
図 16　小西万金丹本舗……………………………………10
図 17　八日市場の道標……………………………………10
図 18　筋向橋………………………………………………11
図 19　筋向橋擬宝珠銘……………………………………11
図 20　筋向橋（『伊勢参宮春の賑』）…………………11
図 21　柳の渡し……………………………………………12
図 22　柳の渡し（『西国三十三所名所図会』）………12
図 23　田丸城下（『西国三十三所名所図会』）………13
図 24　田丸城下町の道……………………………………13
図 25　田丸の道標（北西から）…………………………14
図 26　田丸の道標（正面・右面・裏面）………………14
図 27　勝田町の庚申堂……………………………………15
図 28　庚申堂の青面金剛立像……………………………15
図 29　廣泰寺道標…………………………………………15
図 30　田宮寺道標…………………………………………15
図 31　廣泰寺・田宮寺・幸神社の位置…………………15
図 32　蚊野の道標（『西国三十三所名所図会』）……16
図 33　石仏庵建物配置図…………………………………17
図 34　原大辻観音庵（『西国三十三所名所図会』）…18
図 35　石仏庵観音堂………………………………………19
図 36　石仏庵三十三観音像………………………………19
図 37　石仏庵三十三観音像配置…………………………19
図 38　弘化４（1847）年銘手水鉢………………………20
図 39　享保５（1720）年銘灯籠…………………………20
図 40　「順礼道引観世音」標柱…………………………20
図 41　三十三観音像（1～18）…………………………22
図 42　三十三観音像（19～33）、青面金剛立像………23
図 43　原の道標（自然石）………………………………27
図 44　原の道標（北西面・南東面）……………………27
図 45　原から野中の道……………………………………27
図 46　野中の道標（北から）……………………………28
図 47　野中の道標（左面・正面・右面・裏面）………28
図 48　野中国束道道標（北から）………………………28
図 49　栃ヶ池湿地植物群落………………………………28
図 50　女鬼峠道……………………………………………30
図 51　道路（Ａ区間）……………………………………32
図 52　道路（Ｂ区間）……………………………………32
図 53　②地点（左.江戸道、右.明治道）………………32
図 54　③地点の近世暗渠（西から）……………………32
図 55　明治道切通（南から）……………………………32
図 56　③地点の近代陶製暗渠（東から）………………32
図 57　道路（Ｄ区間）……………………………………33
図 58　Ｄ区間南端（左.江戸道、右.明治道）…………33
図 59　観音堂と名号碑……………………………………33
図 60　如意輪観音坐像……………………………………33
図 61　如意輪観音坐像基礎右面…………………………33
図 62　相鹿瀬の道標１……………………………………34
図 63　相鹿瀬の道標２……………………………………34
図 64　柳原側からみた未舗装道路………………………35
図 65　千福寺の入口………………………………………35
図 66　柳原の道……………………………………………35
図 67　無量山千福寺（『西国三十三所名所図会』）…36

図 68　享保 13 年銘の石灯籠……36
図 69　千福寺にある鳥居の記号……36
図 70　千福寺の建物配置図……37
図 71　千福寺本堂……37
図 72　千福寺納札堂・手水舎……37
図 73　千福寺鐘楼……38
図 74　当山柳原観世音霊顕記……38
図 75　順礼手引観世音の標石……38
図 76　新田・栃原の道１……39
図 77　濁川の分岐点……39
図 78　田口の渡船場周辺……40
図 79　阿弥陀寺観音堂……40
図 80　新田の道標があった理髪店前……40
図 81　新田の道標……40
図 82　八幡神社を示す鳥居の記号……40
図 83　大台町佐原に移設された道標……40
図 84　岡島屋（左）……41
図 85　濁川……41
図 86　谷へと下りる未舗装道……41
図 87　正清寺……41
図 88　新田・栃原の道２……42
図 89　下大谷へと下りる道……42
図 90　下大谷の小川を渡る道……43
図 91　濁川の渡河地点（推定）……43
図 92　濁川沿いを上る道……43
図 93　国道 42 号との合流点……43
図 94　住宅の合間に残る熊野道……43
図 95　栃原茶屋方面に続く道……43
図 96　道標地蔵……44
図 97　不動谷の道……44
図 98　尾根を越える道……44
図 99　馬鹿曲橋……44
図 100　不動谷の道……45
図 101　「字一里塚」の記載と大回りしない道……45
図 102　「バカ曲がり」が示された図……45
図 103　庚申・天王祠……47
図 104　眼鏡橋（神瀬橋）と河内谷川……47
図 105　河内谷へと下りる道……47
図 106　河内谷から上がる道……47
図 107　神瀬の道……48
図 108　殿様井戸に隣接する鳥居の記号……49
図 109　楠ヶ野谷に下りる道……49
図 110　殿様井戸から延びる流路……49
図 111　楠ヶ野谷から上がる道……49
図 112　下楠の道標……50
図 113　七保大橋からみた渡船場周辺……50
図 114　下楠の道……50
図 115　阿波屋……51
図 116　六字名号碑と常夜燈……51
図 117　上楠の道……51
図 118　字界にある庚申・天王祠……51
図 119　字界にある時期不明の道標……52
図 120　粟生の道（高瀬道）……53
図 121　樋口橋付近の道標地蔵……53
図 122　粟生から高奈の道……54
図 123　坂瀬谷山論絵図……55
図 124　伊勢国多気郡下三瀬村全図……56
図 125　定峠付近の道……56
図 126　天保９年銘地蔵菩薩坐像……57
図 127　天保９年銘地蔵菩薩坐像台座……57
図 128　天保 11 年銘地蔵菩薩立像……57
図 129　観音堂跡（下三瀬）……57
図 130　慶雲寺観音堂の三十三所観音……57
図 131　下三瀬の道……58
図 132　旧角金旅館隅の道標……59
図 133　霊符山大陽寺……59
図 134　大陽寺の供養塔……59
図 135　三瀬の渡し付近の石畳……60
図 136　三瀬川（『西国三十三所名所図会』）……60
図 137　三瀬の渡し（三瀬川側）……61
図 138　三瀬の渡し（『文政十二年摂末社巡回記』）…61
図 139　三瀬坂峠道……63
図 140　三瀬坂峠（『文政十二年摂末社巡回記』）……64
図 141　三瀬坂峠（『西国三十三所名所図会』）……64
図 142　滝原野後里地区の道……65
図 143　坂本一里塚跡伝承地……65
図 144　神宮寺と瀧原宮一の鳥居（『西国三十三所名所図会』）66
図 145　瀧原宮（『西国三十三所名所図会』）……67
図 146　瀧原宮周辺と滝原頓登の道……67
図 147　滝原長者野から阿曽勝瀬の道……68
図 148　長者野の峠道南側（石積み３）……69
図 149　天明６年銘巡礼供養塔……69
図 150　阿曽観音堂……69
図 151　阿曽の道……70
図 152　阿曽観音堂境内の供養塔群……71
図 153　阿曽藤ヶ野・小広瀬の道……71
図 154　滝辺の石造地蔵菩薩坐像……72
図 155　柏野の道……73
図 156　大内山川右岸の道……73
図 157　大皇神社の道標……73
図 158　坂津越えの道……74
図 159　駒の道……74
図 160　芦谷・間弓の道……75
図 161　大内山の一里塚……75
図 162　一里塚の地蔵菩薩立像……75
図 163　芦谷の道……76
図 164　中組の常夜燈……76
図 165　中組の道標……76

表目次

表１　道中案内等に見える伊勢山田～熊野新宮間の地名３
表２　店舗年間の田丸城下町旅籠屋一覧……14
表３　石仏庵年表……17
表４　石仏庵観音像の法量等一覧……24
表５　石仏庵観音像銘文一覧……25
表６　石仏庵石柵・石階耳石・石柱銘文一覧……26

史料目次

史料１　筋向橋擬宝珠　銘文……11

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

三重県内に所在する熊野参詣道（伊勢路）が、平成 16（2004）年 7 月 7 日に「紀伊山地の霊場と参詣道」を構成する資産として世界文化遺産に登録されて以降、令和６年度で登録 20 周年を迎えることになる。三重県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする。）では、世界遺産登録後も、関係市町・地元関係者・学識経験者等との連携のもと、登録地域内外の道標や石仏、道の石段・石畳等、熊野参詣道伊勢路に関連する資産の調査を継続して実施するとともに、伊勢路においてまだ解明されていない道の区間や隣接する資産等の把握・情報収集等に努めてきた。

およそ 20 年間のこうした取組の中、当時の状態が保存された新たな古道の存在が現地調査によって発見されたり、歴史的・学術的評価が不明であった資産に関する新たな情報が寄せられたりするなどの成果が得られた。これらの新たな資産（世界遺産未登録）の存在は地元の人々の間でも広く認められ、保存会等の方々による保全活動も熱心に行われるようになった。新型コロナウイルス感染症の影響で訪問者が一時的に減少した時期があったものの、状態よく保全された古道への来訪者は年々増加している。そして、地元を中心に、これらの新たな資産の歴史的・学術的価値を明らかにし、文化財指定および世界遺産追加登録による保護措置を要望する声が次第に大きくなってきた。

これまで、熊野参詣道伊勢路については、「熊野街道」として昭和 55（1980）年度に県教育委員会が「歴史の道」の調査を実施し、その成果を公表しているものの、調査から 40 年以上が経ち、研究の進展によって新たな学術的価値が見いだされたり、内容修正が必要な箇所が生じたりしている実情もあった。

そこで、県教育委員会では、本年度（令和 5 年度）より熊野参詣道伊勢路の参詣道としての歴史的・学術的価値を再評価するため、伊勢路の全域を改めて調査することとした。

２　調査報告書の位置づけ

今回実施する調査は、伊勢市から紀宝町に至る熊野参詣道伊勢路に関連する資産について、伊勢市からの巡礼路の順に実施し、３年間（令和５～７年度）に分けて調査報告書によって成果を報告するものとしている。そして、4 年目（令和８年度）以降の調査報告書においては、補足する資料等を示すとともに、総論的な視点でとらえた歴史的・学術的価値を評価するものとしている。

この調査報告書で示す歴史的・文化財的価値の評価は、新たな資産の文化財指定に供するとともに、既知の文化財の新たな価値づけに資するものと考えている。

第２章　熊野参詣伊勢路の概要

１　概要

熊野参詣道は、紀伊半島の南端にある熊野三山（本宮、新宮、那智）へと向かう巡礼の道である。この巡礼道は複数のルートがあり、紀伊半島の東部を経て伊勢から熊野へ至る伊勢路、紀伊半島の西部を経て京・大坂方面から熊野へ至る紀伊路・大辺路・中辺路、高野山と熊野三山を結ぶ小辺路、吉野と熊野三山を結ぶ大峯奥駆道がある。これらの参詣道は、古代末期から近世・近代に至るまで、貴賤を問わず多くの人々が熊野三山への信仰と憧憬によって歩んだ道であり、我が国の歴史・社会・文化を考える上で欠くことのできない交通遺跡であるため平成 14（2002）年に国史跡に指定されている[1]。また、「史跡熊野参詣道」は熊野三山、高野山、吉野・大峯の霊場とともに平成 16（2004）年 7 月 7 日に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。

伊勢路は平安時代中期の日記[2]や紀行文[3]から 10 世紀ごろには利用されていたものと考えられるが、現在、古代末から中世に遡る道の存在は確認されておらず、世界遺産に登録されている道は、すべて近世以降に用いられた道である。なお、熊野参詣道の中で、10 世紀以降継続的に利用されていたのは中辺路のみであり、大辺路、小辺路も利用の盛期は近世以降となる。

江戸時代中期以降には、伊勢神宮への参詣が盛んとなり、伊勢神宮参詣後、西国三十三所巡礼に向かう者もあった。伊勢路はこのような西国巡礼者が通った道として評価されている[4]。巡礼者が通った経路については、当時の絵図（図１）や道中案内記[5]（表１）に見られるように、伊勢山田（伊勢市）を発出し、田丸（度会郡玉城町）で伊勢本街道から分岐して熊野へと至る道であったことがわかる。参詣道としては紀伊路・大辺路・中辺路が熊野三山と京・大坂間の、小辺路が熊野三山と高野山間の双方向の道であったのに対し、伊勢から熊野への一方通行であったことは伊勢路の特徴といえる。なお、巡礼者が通った道は紀州藩により整

図１　熊野参詣道伊勢路と熊野三山の位置

表１　道中案内等に見える伊勢山田～熊野新宮間の地名（6）

西国三十三所道しるへ	順礼案内記	西国巡礼細見記	順礼道中指南車	西国巡礼道中細見増補指南車	新増補細見指南車	天保新増西国順礼道中細見大全	国土地理院発行地図
元禄３年	享保13年	安永５年	天明２年	文化３年	文政12年	天保11年	平成10年
1690	1728	1755	1782	1806	1829	1840	1998
宇治橋	伊勢山田	山田	山田	山田	山田	山田	伊勢市
		やなぎ	やなぎ	柳	柳／河端	川端　柳	川端町
					ばんと村	ばんど村	坂東
					上地村	上地村	上地町
		（ゆた野）	ゆだの	いたの	いた野	ゆた野	湯田野
			のしば	のしば	しば		
					田丸新町	田丸新町	
たまる	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸
						野篠村	野篠
池辺						蚊野村	蚊野
	原	原	はら	原	原	原	原
あふか						野中村	野中
					鳴川村	鳴川村	成川
さな	あふかせ	あふかせ	大かせ	おおかせ	大がせ	相鹿瀬	相鹿瀬
						千代村	千代
					柳原村	柳原村	柳原
北とち原	とち原	とぢ原	とちが原	とちが原	栃原村 橡原	栃原	栃原
						神瀬村	神瀬
					下楠	下楠	下楠
あお	あを	あほ	あを	あを	粟生	粟生	粟生
三瀬村	ミせ	みせ	三せ	みせ	三瀬	三瀬	下三瀬
野尻	のじり	野じり	のじり	のじり	野尻	野尻	滝原
あそふ	あそ	あそ	あそ	あそ	阿曽	阿曽	阿曽
柏野	かしハの	柏野	かしわの	かしわの	柏野	柏野	柏野
山崎	さき	さき	さき	さき	崎	崎村	崎
こま	こま	こま	こま	こま	駒	駒村	駒
まゆミ	まゆミ	まゆみ	まゆみ	まゆミ	間弓	間弓	間弓
		大津村	大津村	大津村	大つ	大津	大津
梅が谷		梅が谷村	梅が谷村	梅が谷	梅ヶ谷	梅ヶ谷	梅ヶ谷
					片上村	片上村	片上
にがう		から村	にがう村	ニがう村	かう村	かう村	東長島
長嶋	長嶋	長島	ながしま	長嶋	長嶋	長嶋	長島
古里		ふる里村	ふる里村	ふるさと村	古里村	古里村	古里
たう瀬		どうぜ村	どうぜ村		同瀬村	同瀬村	道瀬
三浦	ミうら	三うら	三うら	三浦	三浦	三浦	三浦
馬瀬	むまぜ	馬瀬	むまぜ	馬ぜ	馬瀬	馬瀬	馬瀬
鳥井村			とりい村	とりゐ村	鳥井村		
上里村		上里村	上ミ里村	上さと村	上里村	上里村	上里
中里村		中里村	中里村	中里村	中里村	中里村	中里
下里村		下里村	下里村	下里村			
						船津新田	新田
							中新田
舟津		船津村				船津村	船津
香の本	この本	香の本	こうのもと	香の元	香本	木本	相賀
原びんの村		ひんの村	びんの村	びんの村	びんの村	びんの村	便ノ山
			まごせ村				鷲下
おわし	おハし	おわし	おわし	尾わし	尾鷲	尾鷲	尾鷲市
					八之濱村	八之濱村	矢浜
三鬼	ミき	三鬼	みき	三鬼	三鬼	三木	三木里町
かた					加田	加田村	賀田町
曽根	そね	そね	そ禰	そね	曽祢	曽祢	曽根町
二鬼嶋	にきしま	にぎ島	にぎじま	二鬼嶋	二鬼嶋	二木嶋	二木島町
あたしか	あたしか	あたじか	あたしか	あたしか	新鹿	新鹿	新鹿町
はたす	はだす	はだす	はだす	はだす	波田須	波田須	波田須町
大泊	大とまり	大とまり	大とまり	大泊	大泊	大泊	大泊町
木之本	木の本	木の本	木の元	木の本 木の元	木本	木本	木本町
有馬	ありま	有馬	ありま	ありま	有馬	有馬	有馬町
			一木村	一木村		市木村	下市木
あたわ	あたハ	あたわ	あたわ	あたわ	阿田和	阿田和	阿田和
伊田		伊田村	井田村	井田村	井田村	井田	井田
うハ野					宇和埜村	宇和野村	上野
なる川		なる川	なる河村	なる川村	鳴川村	鳴川村	成川
新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮市

備された街道でもあり、巡礼者以外の者は双方向に利用していたことには留意が必要である。

２　調査対象

本書で記述する参詣道は、現在の伊勢市・玉城町・多気町・大台町・大紀町を通り、近世以前に利用された道を対象とする。ちなみに、伊勢から熊野へ至る道は、時期による変遷、大水時の渡河不可による迂回路、寺社参詣のための寄り道等、様々な理由により複数存在する。本書では、道中案内記、絵図等の史資料、現地の踏査により確認された遺構・石造物等から、近世に最も多くの巡礼者によって用いられたと想定される道を中心に記述し、他の道は必要に応じ補足的に記述する[7]。

▲いせ　山田　半リ
（みや川）
▲やなぎ　田丸　一リ
▲はら　一リ半
▲あハがせ　一リ半
▲とちハら　一リ半
▲あほ　一リ
▲ミせ
（みや川）
▲のじり　一リ
此間ニせきが原
太神宮道
▲あそ　一リ
川有、左リへ廻る
大水ニハ
▲かしわの　半リ
川二ツ有
大水ニハ左へまハる
▲さき　半リ
川有、大水ニハ
右へまハる
▲こま　半リ
川有大水ニハ左リへまハる
▲まゆミ　一リ
（以下略）
大つ村、次ニ宮のまえ・小川・梅が谷

図２　『西国三十三ヶ所めぐり絵図』文化９（1812）年より一部抜粋（奈良県立図書情報館所蔵）

註

（１）　平成 14 年 11 月 15 日　文化審議会答申。
（２）　『いほぬし』(『群書類従』巻第 327)。
（３）　『権記』(『増補資料大成』)。
（４）　『世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」保存管理計画』2015 年、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会。
（５）　『順礼案内記』享保 13（1728）年のほか、『西国三十三所みしるへ』元禄３（1690）年、『西国巡礼細見記』安永５（1775）年、『順礼道中指南車』天明２（1782）年、『西国巡礼道中細見増補指南車』文化３（1806）年、『新増補細見指南車』文政 12（1829）年、『天保新増西国順礼道中細見大全』天保 11（1840）年等が刊行された。
（６）　伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究～熊野参詣道伊勢路を事例に～」2018 年。
（７）　巡礼者が本書で記述する道以外の道を用いて熊野へ至った可能性を否定するものではない。

第３章　熊野参詣道伊勢路（伊勢市・玉城町・多気町・大台町・大紀町）

１　内宮から田丸

○ 宇治

館町から浦田への道　伊勢神宮は、豊受大御神を祀る豊受大神宮（外宮）と天照大御神を祀る皇大神宮（内宮）を中心に、大小多くの社からなる聖地である。18 世紀には庶民のお伊勢参りが盛んとなり、享保 13（1728）年に刊行された西国巡礼の案内記である『順礼案内記』には、「伊勢の国は、天照太神宮のまします所にて西国巡礼の志ある人はおほよそ先づ太神宮へ参りて八鬼山越を越すなり。（中略）山田町には御師の家、商人、はたご（旅籠）やおほし、此処にて順礼の道具札おいづる（笈摺）めし入のこりまでもとむべし」(1) とあるように、外宮・内宮を参ったあとに西国巡礼へと向かう人々がいたことがわかる。このことを踏まえ、本書では便宜上、熊野参詣道について宇治橋より記述することとする。

内宮は五十鈴川の右岸に鎮座し、参拝を済ませた者は五十鈴川にかかる宇治橋を渡り北西へと進む。宇治橋は社殿と同様、20 年ごとの式年遷宮時に架け替えられるが、欄干の擬宝珠には、「天照皇太神宮　御裳濯川　御橋　元和五（1619）己未年三月」や「奉行　山口丹波守源直信　嘉永六（1853）癸丑年六月吉祥日　御鋳物師　蛸路住　常保河内作」などの銘があり、江戸時代の調度品の一部は引き続き使われている。

江戸時代に五十鈴川の右岸は下館町・中館町と呼ばれ御師の屋敷が並んでいたが、明治 20（1887）年から始まる神苑整備により姿を消した。宇治橋を渡り、大鳥居をくぐると北側に宇治（今在家・中ノ切町・浦田）の町並みが広がる。宇治は内宮の鳥居前町として栄え、街道沿いには「おはらい町」と呼ばれる繁華街がある。近世には街道の両側に参宮客をもてなした御師の館が通りに軒を連ねた。高度経済成長期に町並みは近代的な建物群へと変貌したが、平成元（1989）年に伊勢市は「伊勢市まちなみ保全条例」を制定し、電線の地中化、切妻妻入の伝統的な伊勢地域の建物群を整備するなどの修景に努めた。おはらい町の南端から 200mほど北上すると西側の路地に宇治法楽舎跡（うじほうらくしゃあと）を示す石柱がある。明治時代の廃仏毀釈の影響で現在の宇治の町に寺院は見られないが、それ以前には 57 ヶ寺あったという(2)。宇治法楽舎は建治元（1275）年、後宇田天皇が蒙古撃退を祈願するために建立した(3)。

図３　宇治法楽舎跡

図４　赤福本舗

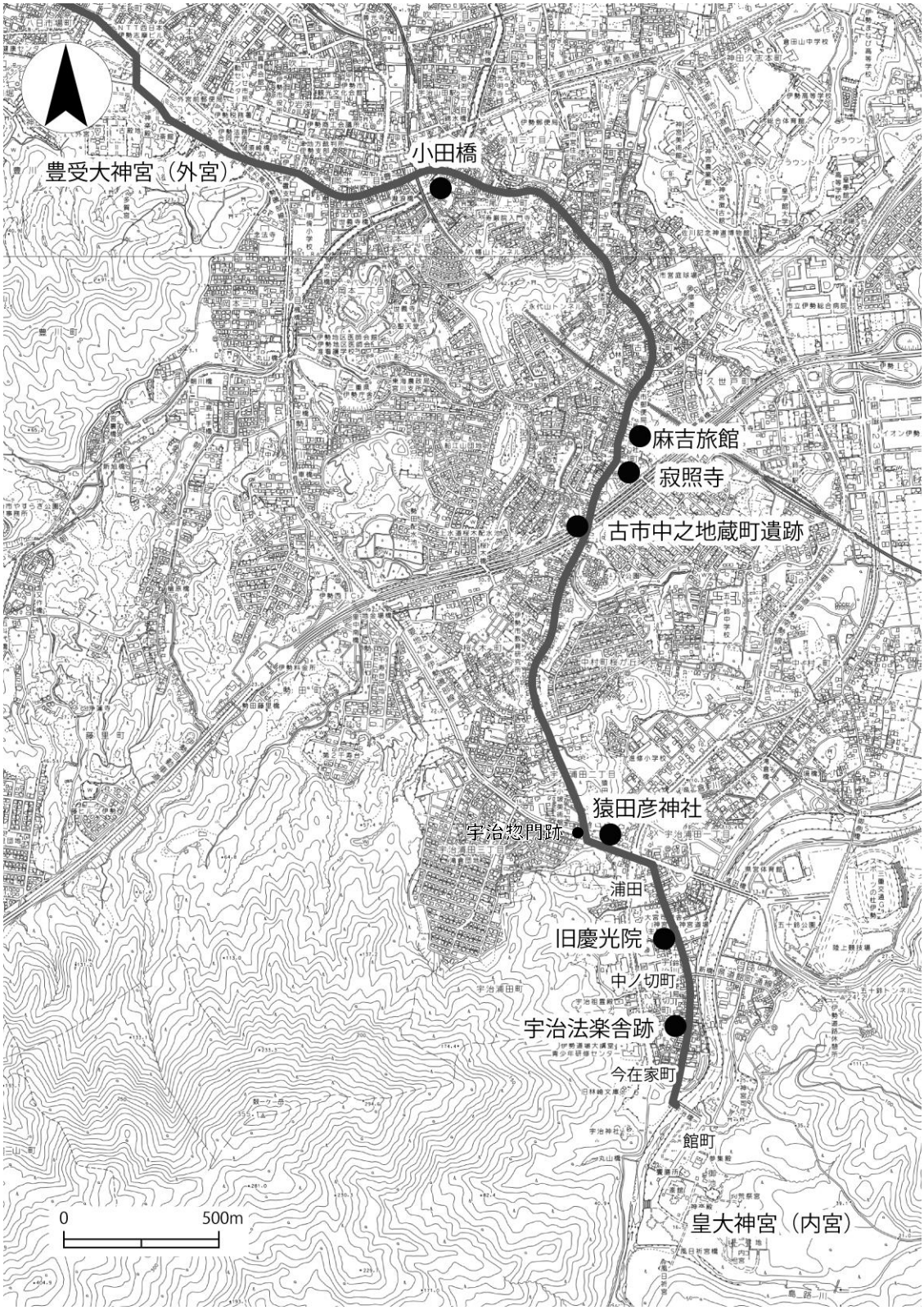


図５　内宮から外宮への道（1/20,000）

図６　旧慶光院

図７　猿田彦神社

図８　宇治惣門跡

図９　古市中之地蔵町遺跡

そこから 150mほど北へ進むと、東側に宝永４（1707）年創業の赤福本舗が所在する。赤福本舗は寛政９（1797）年に刊行された『伊勢参宮名所図会』にその姿が描かれている。

赤福本舗を過ぎると、西側に神宮祭主滞在のための施設である神宮祭主職舎（旧慶光院客殿）がある。

【慶光院】室町時代後半の混乱期に神宮の式年遷宮が中断した時、その再興に尽くし、慶安２(1649)年までの正遷宮を江戸幕府の朱印状を得て取り仕切った。明治２(1869)年に慶光院が廃寺となって以降、神宮の所管となり、神宮司庁舎・祭主職舎として利用されている。神宮祭主職舎本館（旧慶光院客殿）は国の重要文化財に、勝手所、表門は三重県の有形文化財に指定されている。

神宮祭主職舎を過ぎ直進すると、県道伊勢・磯部（いそべ）線に合流する。合流後、西へと進路を変え、宇治浦田町の交差点で国道 23 号を横切ると、北側に猿田彦神社が所在する。「みちひらき」の神として知られる猿田彦大神を祀る。創建年代は不明で、延宝５（1677）年に山田岡本町から現在地へと移転した。慶応３（1867）年に火災で焼失したが、明治 26（1893）年に再建された。

宇治浦田西の交差点を北へと進むと、かつて宇治の入り口とされた宇治惣門跡に至る。宇治惣門は「黒門（くろもん）」の俗称があり、傍らの滝倉（たきくら）川に架かる橋には「黒門橋」の名前が残る。宇治惣門跡から北側は、牛谷（うしたに）坂（浦田坂）と呼ばれる上り坂になっている。牛谷という名前は付近の牛鬼伝説に由来するとされている。延宝２（1674）年、内宮長官藤波氏富が山田奉行桑山貞政の許可を受け、数百両の私財を投じて改修したことで牛谷坂の利用者が増加したという。その後も改修は続けられ、元禄 10（1697）年、山田奉行久永重高の命で改修工事が

図 10　間の山（『西国三十三所名所図会』）

行われ、文化２（1805）年、古市の妓楼千束屋の主人が千両あまりの私財を投じて改修工事を行った。牛谷坂には以前は大きな常夜燈が立ち並んでいたとされるが、現在は撤去され、大正３（1914）年銘の２基の巨大な常夜燈が残るのみである。

古市（間の山）の道　坂を上りきると古市の町に至る。古市は現在の古市町に加え、常明寺門前町（倭町）、下中之地蔵町（中之町）、上中之地蔵町（桜木町）を含むいわゆる長峰一帯をさす地名である。江戸時代には参宮を済ませた人々の精進落としの場として賑わい、天明年間（1781～1789）には妓楼 70 余軒、遊女千数百人に及び、江戸吉原・京島原と並ぶ三大遊郭のひとつに数えられるようになった。この古市を含む内宮・外宮の間の丘陵地帯は「間の山」と呼ばれ、「お杉・お玉」をはじめとした多くの芸人がいた（図 10）。伊勢自動車道の陸橋を渡ると東側に伊勢古市参宮資料館がある。陸橋部分は古市中之地蔵町遺跡にあたる。平成２～４（1990～1992）年度に近畿自動車道建設工事に伴う事前発掘調査が行われた。その結果、江戸時代の町屋区画が確認され、多くの陶磁器が出土するなど、当時の古市の賑わいを考察する上での貴重な資料となっている（図９）[4]。

さらに 120mほど進むと、東側に寂照寺がある。寂照寺は延宝５（1677）年、徳川家康の孫千姫の菩提を弔うため、知恩院第 37 代寂照知鑑上人により創建されたが、境内に 16 世紀代の板碑があり、前身寺院の存在が想定される。無檀那寺であったため、経済的に困窮するが、安永３（1774）年に画僧の月僊が来訪し、寺の再興に尽力したことで知られる。明治 14（1881）年に火災に遭うが、焼失を免れた金毘羅堂、観音堂、山門は国登録有形文化財となっている。

寂照寺の北東には、麻吉旅館が所在する。看板には嘉永４（1851）年創業とあるが、天明

図 11　麻吉旅館

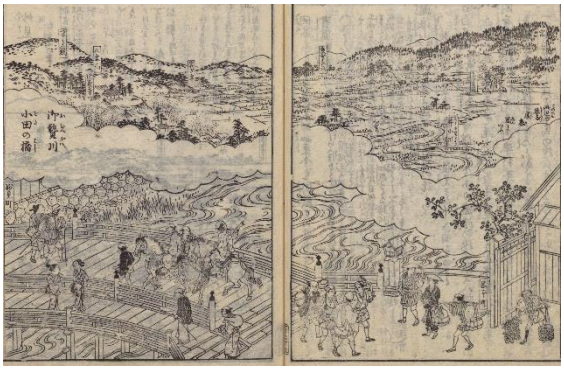


図 12　小田橋（『伊勢参宮名所図会』）

図 13　小田橋の道標（東面・南面・西面・北面）

図 14 旧豊宮崎文庫

年間（1781～1789 年）の地図や、文化３（1806）年に刊行された『東海道中膝栗毛』「五編追加」にも「麻吉」の名が見られることから、創業年代はさらにさかのぼる可能性がある。現存する建物は江戸時代末頃のもので、本館・聚遠楼（じゅえんろう）・土蔵が国登録有形文化財となっている。

街道を北へ進むと、東側に長峰神社（俗称うずめさん）があり、近鉄鳥羽線の陸橋を越えると、西側に歌舞伎『伊勢音頭恋寝刃（いせおんどこいのねたば）』で名高い遊郭油屋の跡地、その奥に大林寺がある。油屋の跡地を過ぎると下り坂となり、道路は大きく左へと曲がっていく。街道の西側には妓楼備前屋の跡地がある。降り坂の途中にはかつて野間万金丹薬舗の支店があったが面影はない。

○山田

小田橋から外宮への道　坂を下りきると、勢田川に架かる小田橋に至る。小田橋は室町時代に関所が置かれる交通の要衝であった。江戸時代に小田橋の下流側に小橋（簀子橋）が架かっていたことが『伊勢参宮名所図会』に見える（図 12）。橋のたもとには、道標（27×27×108cm）（図 13）があり、東面「すぐ二見＜川崎神やしろ／左リ宮川＞道」、北面「＜弘化四丁未年／九月吉日丑建＞」、西面「すぐ御さんぐう道　妙見町」、南面「右　御さんぐう＜妙見道／古市＞道」と刻まれている。小田橋を渡り、道が西に進路を変えると、旧豊宮崎文庫（きゅうとよみやざきぶんこ）（図 14）がある。

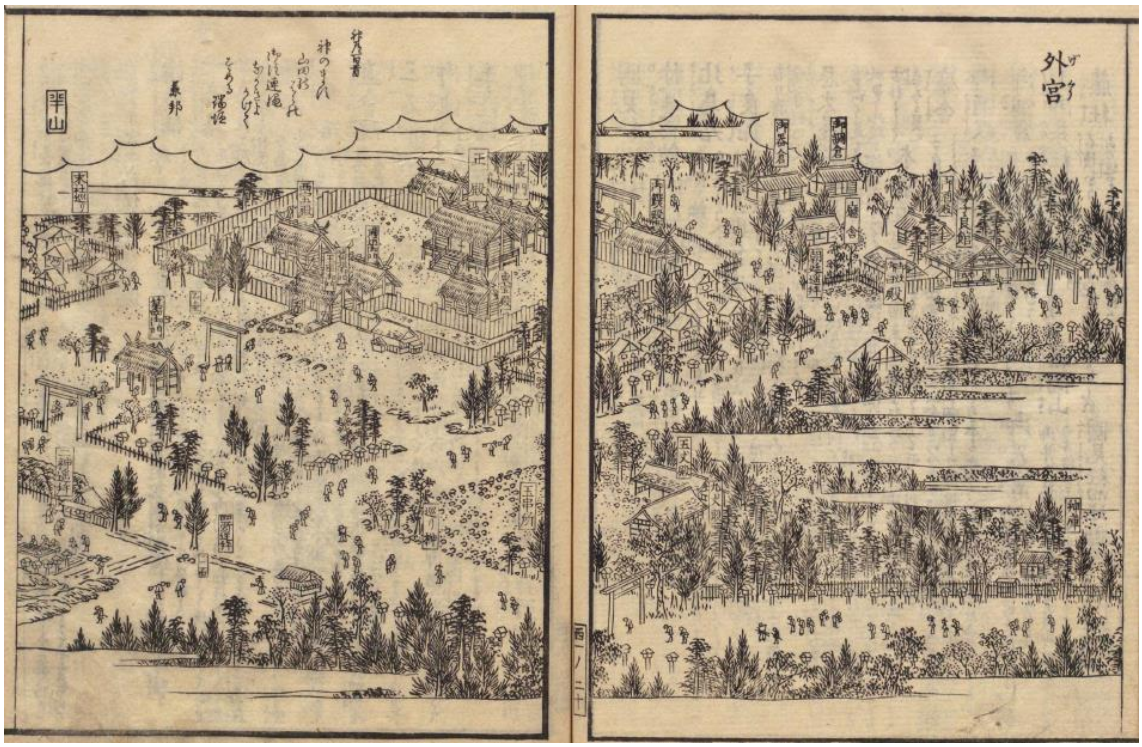


図 15　外宮（『西国三十三所名所図会』）

【旧豊宮崎文庫】外宮祠官の学問所。慶安元（1648）年に外宮の権禰宜で国文学者の出口延佳により創建された。豊受宮の社殿屋根に生えた桜が移植された「おやねサクラ」が多く植えられ、桜の園としても有名であった。明治 11（1878）年の火災で講堂が焼失したが、蔵書は被災を逃れ、神宮文庫に収蔵された。現在は敷地内の孝経碑、門、築地塀が残る。国指定史跡。

外宮外苑は近代以降に整備がなされ、かつての街道の痕跡はほとんど見られない。旧豊宮崎文庫を過ぎた外宮外苑勾玉池のほとりに、かつての街道があったと考えられる。

外宮から筋向橋への道　街道は豊受大神宮（外宮）の北側を西へと伸び、北御門の前を過ぎてＮＴＴ西日本伊勢志摩支店敷地内を通っていたと想定される。

このあたりは、江戸時代以前から定期的に市が開かれるようになり、「八日市場」という地名となっている。街道北側には、延宝４（1676）年から続く老舗の小西万金丹本舗が所在

図 16　小西万金丹本舗

図 17　八日市場の道標（南面・西面）

している。現在の建物は明治時代に改築されたものの、切妻造妻入で伊勢町家の代表的な様式を示す大型商家建物で、店舗兼主屋・外蔵が国登録有形文化財となっている（図 16）。小西万金丹本舗から 100m程西に進んだ交差点には、道標が建てられていたが、現在は坂社境内に移されている（図 17）。道標（25×29×190cm）には、「南＜京／江戸／大坂＞ならはせ＜大和めぐり／紀州くまの＞道」「西すぐ＜右さんぐう／左ふた見＞道」と陰刻されている。八日市場の道標がかつてあった交差点から 500m西に進むと筋向橋（すじかいばし）がある（図 18）。橋の名前は清川（きよかわ）をまたいで筋向に架けられていたことに由来するが、現在は暗渠となり、その面影はない。現在はコンクリート製の橋であるが明治頃に描かれた『伊勢参宮春の賑』(5)には、木製の本橋と脇に小橋が描かれている（図 20）。欄干にある青銅製の擬宝珠は嘉永２（1849）年のもので、寄進者と製作者の名前、製作年等が刻まれている（図 19、史料１）。この筋向橋で伊勢本街道と紀州街道・熊野街道が分岐する。

図 18　筋向橋

図 19　筋向橋擬宝珠銘

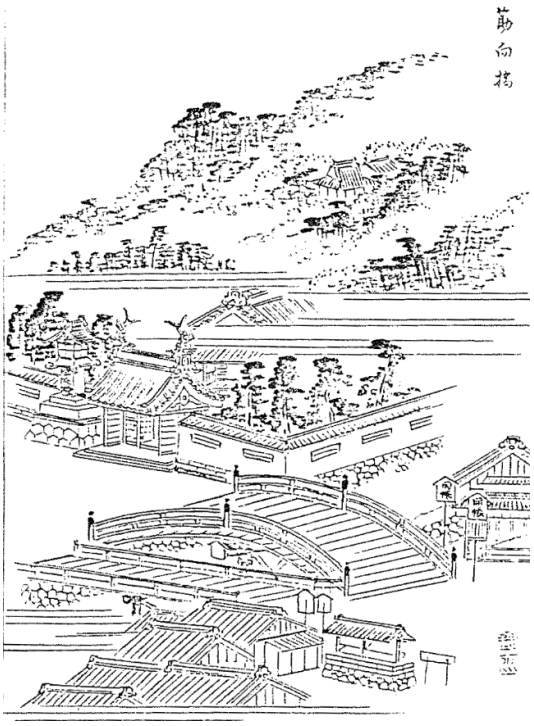


図 20　筋向橋（『伊勢参宮春の賑』）

当国
御鋳物師
阿保丹波守
藤原顯孝
鋳造
嘉永二己酉年八月
山田筋向橋
式年造替擬寶珠
寄進
廣辻勘解由光昶
小林美濃延孝
山木監物安貞
千賀加賀宜徳
松室右京忠成
山川八兵衛清美
古川新右ェ門正利
中北榮助榮定
高尾善右ェ門忠通
守貝正藏政雄
内海長太夫清李
町代
谷村榮造元孝
田中屋善兵衛延孝
藤井源右ェ門繁雄
岩渕町
小林摂津光徳

史料１　筋向橋擬宝珠　銘文

柳の渡しから田丸への道　筋向橋から西に１㎞ほど進むと宮川へと至る。近世の宮川には二つの渡し場があり、山田中島と川端間を「柳の渡し」(上の渡し)、山田中河原と小俣間を「桜の渡し」（下の渡し）と呼称した。柳の渡しには 17 世紀ころから柳の木の間に掛茶屋が並んで柳茶屋と呼ばれ、やがて周囲には旅籠屋も軒を連ねた。明治 44（1911）年、約 50ｍ下流に度会橋ができると渡し場は次第にさびれていった。

図 21　柳の渡し

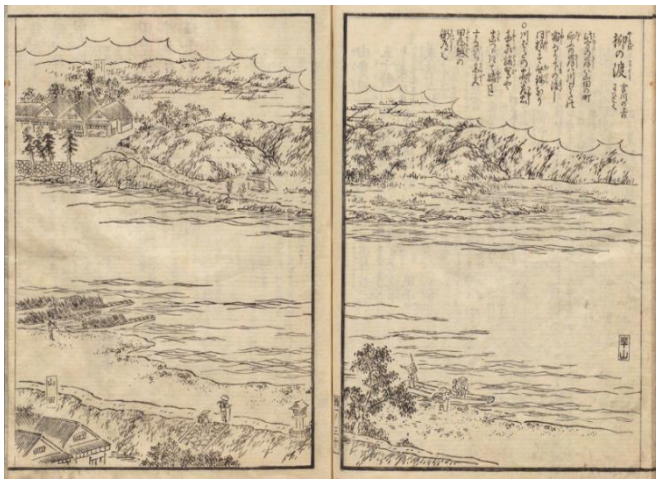


図 22　柳の渡し（『西国三十三所名所図会』）

柳の渡しを越えた伊勢市川端町から同市上地町までの約 850ｍは、宮川の旧流路にあたる沖積地が広がっており、宮川が氾濫するたびに大きな被害に遭っている。特に明治 18（1885）年７月の大洪水では、街道の町家は浸水し、19 名が濁流に呑まれるという被害が発生した。汁谷川を越えると地形は河岸段丘へと移る。汁谷川を越えてすぐ、街道北側には、コンクリートブロックで囲われた庚申祠と山の神が祀られている。1.6 ㎞進むと伊勢市と玉城町の境界に至る。ここはかつての外城田川本流の旧流路跡で、現在は小川となっている。このあたりはかつて茶店が１軒あり、玉城町佐田の新田町地区の方へと松並木が 50ｍ程続いていたが、太平洋戦争中に船材として伐採され姿を消した。ここから外城田橋までの 800ｍの間は、江戸時代初頃に佐田村出郷新田であったが、熊野道の往来増加とともに町家が並び、天保 10（1839）年には新田町として独立した（現在は佐田の小字）。延宝２（1674）年に勧請された浅間神社境内は旅人の憩いの場として使われていた。また、新田町には文政２（1819）年から明治時代まで遊女屋が７、８軒あった。外城田（ときた）川を渡ると田丸に至る。

註

（１）　『順礼案内記』1728 年。
（２）　宇治山田市役所編『宇治山田市史』下巻、965 頁、1929 年。
（３）　「大神宮参詣記」『神宮参詣記・服記』神宮古典籍影印叢刊７、1984 年。
（４）　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道(勢和～多気)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』5-22 頁、1992 年。
（５）　伊勢神宮の権禰宜であった横地長重（1849-1902）により描かれた。三重県教育員会編『伊勢街道・朝熊岳道・二見道・磯部道・青峰道・鳥羽道』1986 年より引用。

２　田丸から原

○　田丸

田丸城下町の道　田丸（たまる）は伊勢本街道、熊野街道、熊野脇街道等多くの道の結節点であり、軍事的・経済的に重要な交通の要衝であった。延元元（1336）年、外宮禰宜度会（わたらい）家行ら南朝に与する勢力が田丸山に城を築き、その後、北畠氏が拠点としたのが田丸城の始まりである。元和５（1619）年に紀州藩領となり、久野宗成が城代として赴任し、以後久野家が政務を執った。城下町は東西 700ｍ、南北 800ｍの街道沿いの町家が佐田村から独立させられ、田丸町として町奉行の支配に組み込まれた。戸数は江戸時代を通じて約 270 戸で、参宮・西国巡礼の旅人向けの旅籠・土産物屋が軒を連ね、宿場町として賑わった（図 23）。このように、田丸は宿場町、城下町双方の性格を有する町と言える。

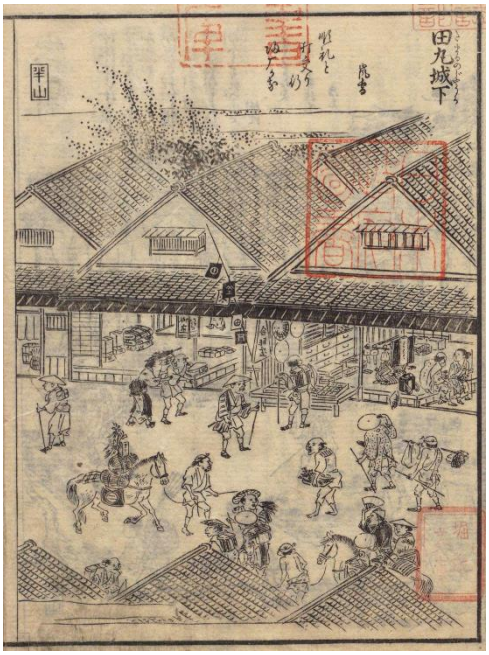


図 23　田丸城下（『西国三十三所名所図会』）

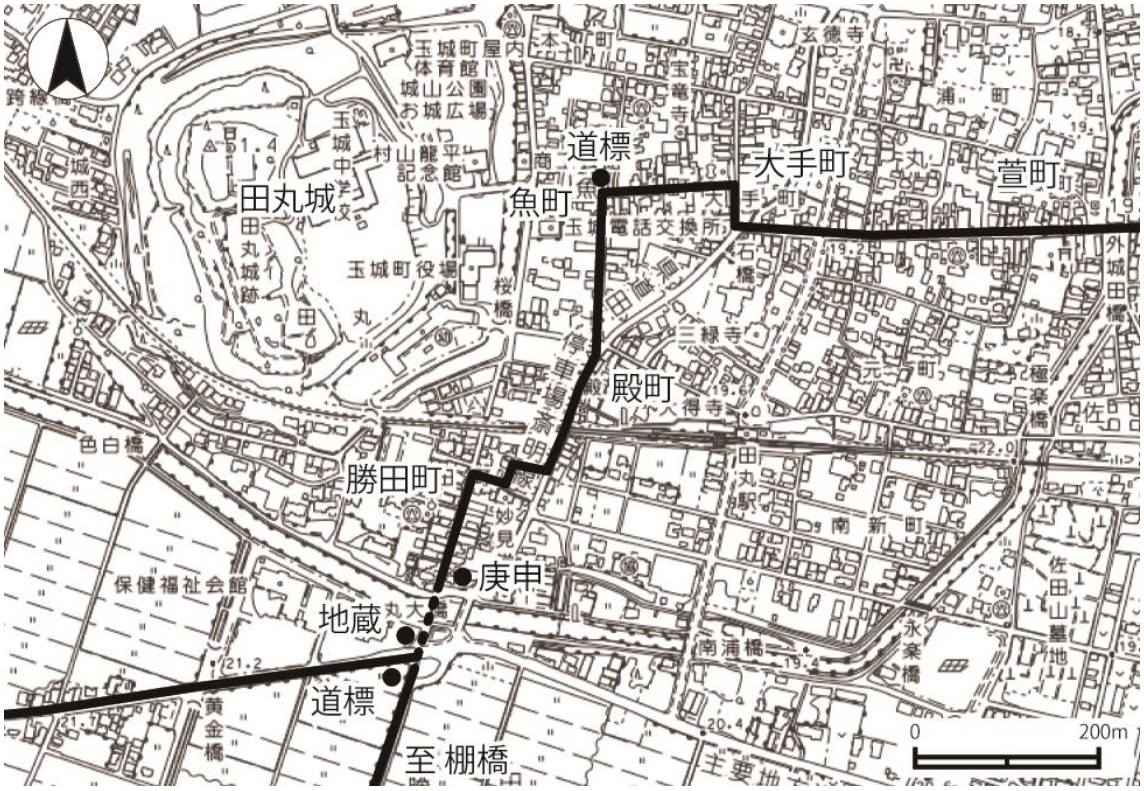


図 24　田丸城下町の道（1/8,000）

表２　天保年間の田丸城下町旅籠屋一覧（註（１）より作成）

町名	旅籠屋	軒数
萱町	泉屋・森屋・山形屋・森田屋・扇屋	5
板屋町	橋本屋・巴屋	2
大手町	角屋・鶴屋・京屋・松葉屋・藤屋	5
魚町	種屋	1

外城田川の西側にある萱町には旅籠が集まり、街道の南側に泉屋・森屋、北側に山形屋・森田屋・扇屋等が軒を連ねた。特に扇屋は西国巡礼の旅装を整える宿として有名であった。扇屋の向いには相六（あいろく）という店舗があり、油紙合羽や紙製刻み煙草入れの製造販売を行っていた。萱町の西側には板屋町があり、鍛冶屋・車屋・米屋・豆腐屋・うどん屋・棒屋・呉服屋等の商店が並んだ。旅籠は橋本屋・巴屋の２軒があった。板屋町の西端には善兵衛川が流れており、磁石橋という石橋が架けられている。磁石橋の左岸たもとは、高札場があり、明治以後は警察駐在所や火見櫓があったが、現在はなく、大正時代に設置された田丸村の道路元標のみが残されている。道は北側へと続き、すぐに大手町の辻と呼ばれる三差路に至る。

大手町には、角屋・鶴屋・京屋・松葉屋・藤屋などの旅籠があった。大手町の辻から約 150 m西に進むと、伊勢本街道と熊野街道の分岐となる交差点がある。交差点の南東隅には高さ 164 ㎝、幅 31 ㎝の道標が立っており、正面「左　＜よしの/くま乃＞みち」、右面「(右指差し）紀州街道」、裏面「右　さんくう道」とある（図 25・26)。この道標は昭和 36（1961）年に玉城中学校の校庭へ移設されたが、平成 23（2011）年に現在地に再設置された。

道標の交差点を南進すると魚町があり、県道田丸停車場斎明線との五差路の交差点には、江戸時代に木戸が設けられていた。交差点の東側は殿町である。江戸時代は紀州藩御鳥見役の屋敷が３軒あったのみで足軽町とよばれていたが明治 26（1893）年に久野家の菩提寺大得寺の裏手にあったことから、殿町と改称された。ＪＲ参宮線の線路を越えると東側に栄亭という宿がある。令和５（2023）年現在、田丸の城下町で唯一の宿である。このあたりは道路東側に幅約 1.8m、高さ約 1.8m程度の土塁（土堤）があり、天端には松の木が植えられていたが、大正時代には撤去された。道路西側には茶店が九軒並んでおり、片原町と呼ばれていた。栄亭前の交差点を西に曲がると、勝田町に入る。道なりにクランクを進むと、突き当たりで南北方向の道路に合流する。このあたりは、明治以降に遊郭が置かれて栄えた。

町の南はずれには庚申堂がある（図 27・28)。安置されている高さ 86cm の青面金剛立像

図 25　田丸の道標（北西から）

図 26　田丸の道標（正面・右面・裏面）

図 27　勝田町の庚申堂

図 28　庚申堂の青面金剛立像（左面・正面・右面）

図 29　廣泰寺道標（左面・正面・右面・裏面）

図 30　田宮寺道標（左面・正面・右面・裏面）

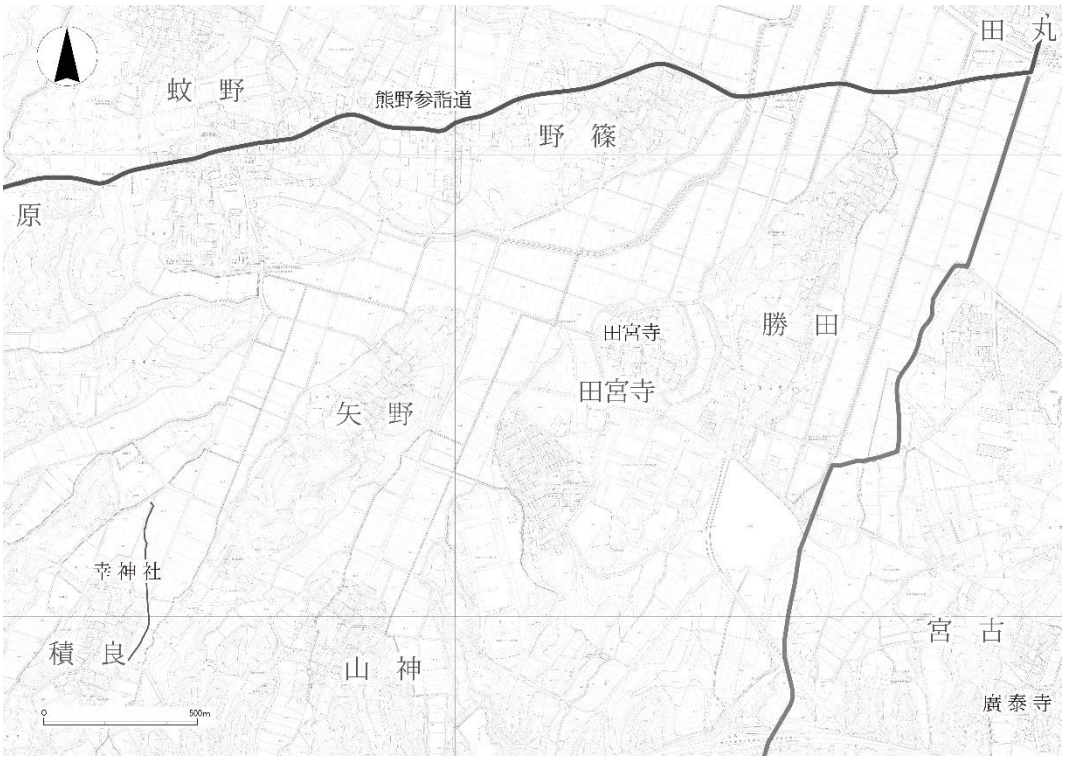


図 31　廣泰寺・田宮寺・幸神社の位置（1/25,000）

には、右面「天明(1782)二壬寅三月工替／勝田町世話人中」、左面「左廣泰寺道」、裏面「享保(1719)四年己亥五月日」の銘がある。天明２（1782）年に再建された際には、露地に置かれ道標として役目を果たしていた。庚申堂の前には外城田川が東西に流れており、かつては大橋と呼ばれる板橋が架かっていたが、現在は下流に田丸大橋が架けられている。

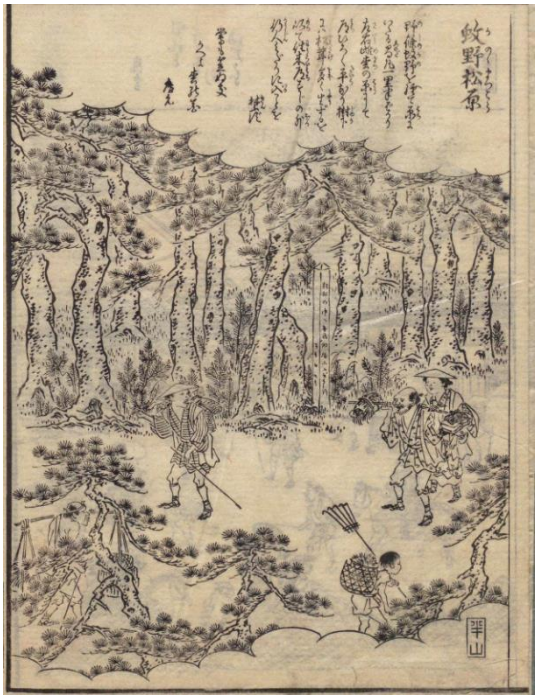
外城田川の南側には地蔵堂があり、万治３（1660）年銘の地蔵菩薩坐像と嘉永７（1854）年銘の六十六部廻国供養塔がある。この地蔵堂と六十六部廻国供養塔は元々、県道田丸停車場斎明線の南側の道標付近にあったが、道路拡幅に際して現在地に移設された。

○勝田・野篠・蚊野

勝田の道　県道田丸停車場斎明線の南側には、高さ 270 ㎝、幅 31.5 ㎝の道標がある（図 29）。正面「＜右くまのかうやよし乃／左たなばし　しまかた＞道」、右面「神照山廣泰寺＜是より／十五丁＞」左面「文政七年甲申夏」、裏面「左さんぐうミち」とある。文政７（1824）年に設置された道標で、西国巡礼者を廣泰寺へと向かわせる目的で設置された。神照山廣泰寺は、玉城町宮古に所在する寺院で、文明 18（1486）年に創建された曹洞宗中本山である。

熊野道は現在の県道田丸停車場斎明線と重複し、約 750m 西進した勝田西の交差点南東角に道標がある（図 30）。高さ 234 ㎝、幅 33.5 ㎝で正面「すぐさんくうミち」、右面「文政七年甲申夏」、左面「冨向山田宮寺＜是より／十丁＞」、裏面「＜右くまのかうや／左さい乃かみ　くつか＞道」とある。先述の廣泰寺の道標と同じく、田宮寺へと向かわせることを目的とした道標である。冨向山田宮寺は玉城町田宮寺にあり、平安時代後期には内宮禰宜荒木田氏の氏寺であった。ここで祀られている２躯の十一面観音立像は平安時代後期の作で重要文化財となっている。これらの道標をはじめ、熊野参詣道の沿線には西国巡礼所縁の寺社と表して、参拝を促すことを目的とした道標が多くある。寺社には西国巡礼者が立ち寄ることで信仰の拡大や経済的利益があったと推察される。一方、巡礼者も「一度きりの旅なので、この際見て回ろう」という意識が働いたのかもしれない。

野篠・蚊野の道　熊野道は西へと続き、三郷川を越えた先の三差路を北西方向へ坂道を上る。ここはかつて約３㎞にわたり続いたとされる蚊野松原の跡地である。蚊野松原は『西国三十三所名所図会』にも描かれた、松並木の名所である。縁結びの松といわれた雌雄の老松、境界松、鍋取松、待場の松、天狗松などの松があり、街道沿いには多くの茶屋があったとされる。江戸時代に里山景観を形成した松原は、戦前から戦後にかけての開発により姿を消した。蚊野の集落を西に進むと原の集落に至る。



第 32 図　蚊野の松原（『西国三十三所名所図会』）

註

（１）　池山始三『田丸郷土史』三重県郷土資料刊行会、1977 年。

３　石仏庵（原大辻観音庵）

現状　田丸方面より熊野道を西進すると、原の集落の入り口にて三差路となる。北側の道が熊野道で、その両側にあるのが石仏庵（いしぶつあん）である。石仏庵は原の集落北東、標高約 48ｍの台地上に位置し（図 33）、かつては曹洞宗の寺院で円通山石仏庵と称していた。『西国三十三所名所図会』では、原大辻観音庵（はらのおおつじかんのんあん）とされている（図 34）。『西国三十三所名所図会』では、参詣道の北側に庵室、接待所、札納所、行者堂、金毘羅堂、鳥居、標石、燈籠、手水鉢があり、南側に観音堂、燈籠が配置されていた。現在は、庵室があった場所に原小集会所があり、接待所があった場所に日清戦争戦没者供養碑が建てられている。金毘羅堂は道路の南側に移設され、観音堂の南側に秋葉堂が建てられている。

歴史　『玉城町史』によると、石仏庵は文政８（1825）年、三河国篠束村（愛知県豊川市）謂信寺の宜然（ぎぜん）大和尚の隠居寺として創建されたとされる[1]。しかし、後述する観音像 No.16 台座の銘文から謂信寺は上衣文邑（愛知県岡崎市）の寺院であり、観音像 No.7 台座の銘文から発願主の名前は宜黙（ぎもく）であることが分かる。宜黙については三河国の僧であることは分かっているが、元々いた寺院や村の名前は不明である。だが、篠束村の隣村である平井村（愛知県豊川市）に曹洞宗安松山円通寺という寺院があり、かつては観音寺と呼ばれていた[2]。円通山石仏庵と名称が類似することから、宜黙は平井村の円通寺に所縁にある僧ではないかと推察する。

石仏庵にある石造物には、観音堂への階段東側にある石燈籠に享保５（1720）年銘があり、次いで「順礼道引観世音」標石に文化２（1805）年銘、観音堂への階段耳石に文化５（1808）年銘、役行者椅像の底部に文政３（1820）年銘がある。このことから 19 世紀初め頃から西国巡礼ゆかりの地として整備されたと考えられる。

明治 23(1890)年、庵室があった場所に玉城町庄出の善哉寺の本堂を移して再建されたが、昭和 23(1948)年に廃寺となり、本尊の聖観世音菩薩坐像と延命子安地蔵は石仏庵から約 850ｍ南にある光徳寺へと預けられた[3]。

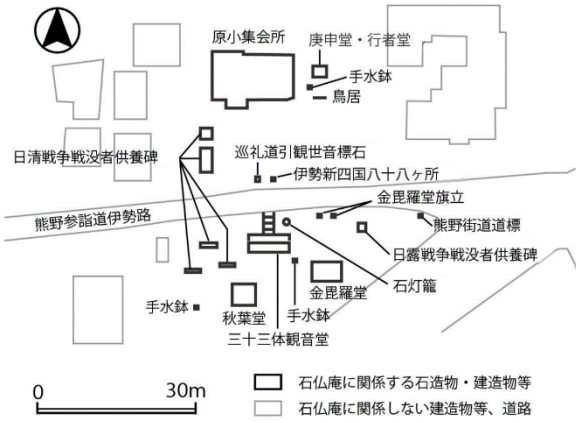
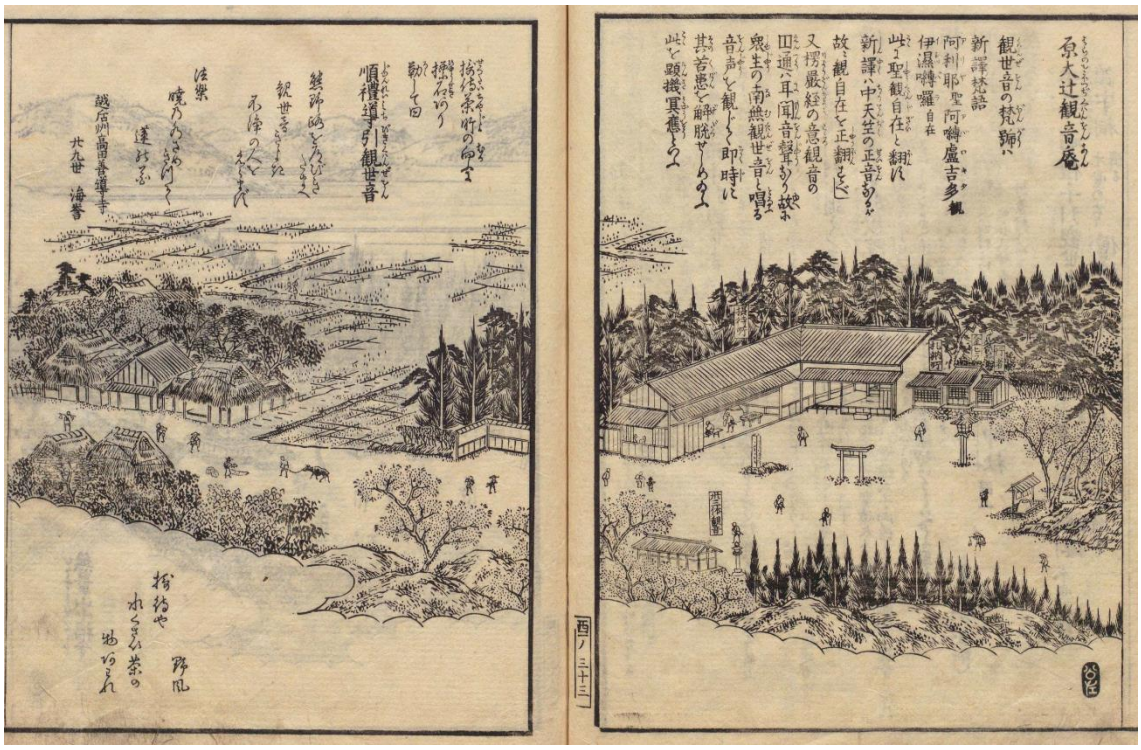


図 33　石仏庵建物配置図（註（４）を一部改変）

表３　石仏庵年表

年号	西暦	出来事	根拠
享保５年	1720年	石灯籠の建立	石灯籠銘文
文化２年	1805年	「順礼道引観世音」標柱建立	標柱銘文
文化５年	1808年	観音像の寄進 観音堂・階段・柵の建立	階段耳石銘文
文化８年	1811年	青面金剛立像の寄進	青面金剛立像銘文
文政３年	1820年	役行者椅像の寄進	椅像台座銘文
文政８年	1825年	隠居寺として宜然が創建？	『玉城町史』
弘化４年	1845年	手水鉢設置	手水鉢銘文
嘉永６年	1853年	『西国三十三所名所図会』に描かれる。	『西国三十三所名所図会』
明治23年	1890年	善哉寺の本堂移築再建	『玉城町史』
昭和23年	1948年	廃寺（本尊は光徳寺へ）	『玉城町史』



原大辻観音庵

観世音の梵号ハ

新譯梵語

阿利耶聖阿嚩盧吉多観

伊濕嚩囉自在

此に聖観自在と翻し

新譯ハ中天竺の正音なるが

故に観自在と正翻すべし

又楞嚴経の意観音の

円通ハ耳聞音聲なり故に

衆生の南無観世音と唱る

音声を観じて即時に

其苦患を解脱せしめ給ふ

此を顕機冥應といふ

接待茶所の向ふに

標石あり

勒して曰

順禮導引観世音

熊野路を道びき

たまへ

観世音

きよき

不浄の人を

えらまず

法楽

暁の水さめ

きつて

蓮の花

越后州高田善導寺

廿九世　海誉

野風

摂待や

水くさい茶の

物あわれ

図 34　原大辻観音庵（『西国三十三所名所図会』）

観音堂と観音像　道路南側にある観音堂は、桁行 6 間、梁行 2 間の切妻造桟瓦葺きの建物で、北面に壁はなく、東・西・南面は土壁漆喰仕上である（図 35）。内部には、西国三十三所霊場の本尊を模した観世音菩薩像 33 体が上段 17 体、下段 16 体の 2 段で安置されている（図 36）。観音像の配置は上段中央を一番札所那智山として、時計回りに配置されている（図 37）。

1 ～33（図 41・42）は、観世音菩薩(以下、観音)像。像容は西国三十三所霊場の本尊を模したものであるが、観音の種類、坐立、座り方等の像容が異なるものがある（表 4 ）。台座を含めた高さは 70～101 ㎝、幅 27～34 ㎝、奥行 27～34 ㎝。台座は直方体で正面に札所

図 35　石仏庵観音堂

図 36　石仏庵三十三観音像

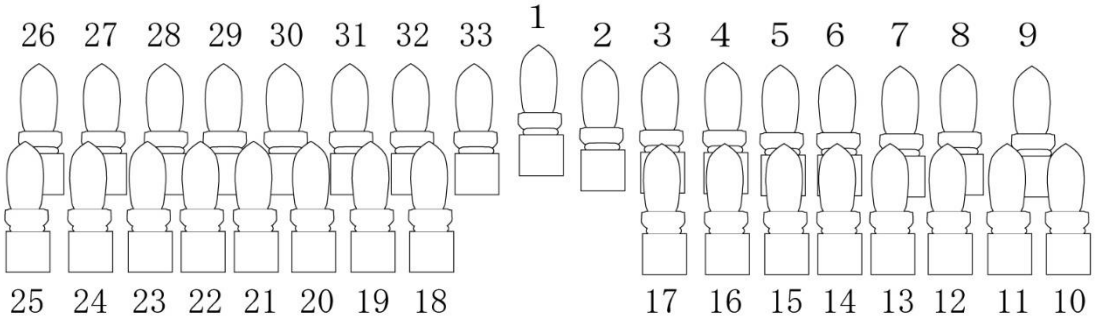


図 37　石仏庵三十三観音配置図

番号、施主名、供養者名などを陰刻している。敷茄子は菊と唐草の文様があり、朱色に着色されているものもある。材質は花崗岩で、堂内に安置されているため、風化は軽微である。現在は地蔵信仰の影響を受けて全ての観音像に紅白の前掛けが着けられている。１は石仏庵にある観音像の中で唯一敷茄子の下に反花を有し、他の観音像より全高が高く、台座の幅、奥行きも広い。

台座に刻まれた地名は三河国が最も多く 13 個、伊勢国が５個、大和国が４個、紀伊国が３個、江戸が２個、尾張国が１個となっている。７には、発願主宜黙の名があり、三河国の地名が多いのは宜黙の縁者による寄進の影響であろう。同様に大和国の地名があるのも、宜黙が吉野において修行をしていたことに関係があると思われる。伊勢国・紀伊国の地名は山田（伊勢市）、原（玉城町）、千代（大台町）、長嶋（紀北町）、木之本（熊野市）等、熊野参詣道沿線のものが見られる（表５）。

図 38　弘化４（1847）年銘　手水鉢

観音堂周囲にある石柵には、寄進者の名前があり（表６）、観音像の寄進者と共通する名前も見られる。観音堂前の石階耳石には文化５（1808）年銘があり、観音堂・石柵・石階が 19 世紀初めの同時期に整備されたと考えられる。

その他の石造物　石仏庵には、観音像以外にも西国巡礼に所縁のある近世の石造物が所在する。石仏庵の東端には手水鉢（図 38）があり、「弘化(1847)四年丁五月吉日」の銘を有する。この手水鉢が『西国三十三所名所図会』に描かれているものの可能性がある。また、秋葉堂西側にも別の手水鉢があり、「文政(1821)四年辛巳秋」の銘を持つ。大部分が地中に埋没しており、正確な大きさは不明である。

庚申堂の中には西側に青面金剛立像、東側に役行者椅像が安置されている。青面金剛立像は向かって右側側面に「文化(1811)八未十二月吉日」の銘を有する。役行者椅像は台座正面「三河國／幡頭郡／佐久嶋村／世話人／先達／髙橋久治」、台座右面「文政(1820)三／庚／辰／年」とあり、三河湾の佐久島の人により造立されたことがわかる。

観音堂前の石階東側に石燈籠（図 39）があり、「享保(1720)五庚子歳九月吉

図 39　享保５（1720）年銘燈籠

図 40　「順礼道引観世音」標柱

日」の銘を有す。観音堂の道を挟んで北側に「順礼道引観世音」標柱（図 40）があり、道路側の正面に「(如意輪観音坐像）＜本尊／前立＞順礼道引観世音」、右面「くまのぢを　みちひきたまへ　くハんせおん　きよきふしやうの　ひとハゑらます　江戸講中 (略)」、左面「南無阿弥陀仏（花押）（略)」裏面「文化二乙丑(1805)年五月吉祥日（略)」とあり、左右裏面には寄進者の名前が記されている（表５）。

礼拝施設の整備と寄進者の関係　観音像の台座や「順礼道引観世音」標柱には、寄進者の居所と考えられる地名と名前が記されている。伊勢国、紀伊国では原の西国講中や伊勢路沿線の集落名が含まれる。寄進者の中には宜黙の名もあり、所縁地である三河の寄進者の名前も多く見られる。また、江戸からの寄進者の名前もあり、観音像 No. 1 の台座に記された通油町の丸茂屋久兵衛（丸茂屋は旅装品を扱う問屋）を中心とするコミュニティが石仏庵の整備に重要な役割を果たしていたことがうかがえる[5]。以上のことから、江戸時代における石仏庵の整備は勧進者縁故の土地である三河、多くの巡礼者の出発地である江戸や熊野三山へ向かう参宮街道・伊勢路沿線から寄進を集め施設が整備されていたと指摘されている[6]。

巡礼路沿いの礼拝施設としての評価　『西国三十三所名所図会』の本文では、「大辻観音庵原村東の入口にあり此所を大辻といふ尼僧住す　勢州より熊野観音堂の札はじめ也」とあり、天保 11（1840）年の『天保増補西国順礼道中細見大全』[7] には「原東の入口本尊順礼導引観世音西国札所始り」とあり、西国三十三所巡礼の「札はじめ」と紹介されている。『西国三十三所名所図会』および境内の標柱には、「順禮導引観世音　熊野路を道びきたまへ観世音　きよき不浄の人をえらまず」との詠歌が刻まれ、石仏庵を西国巡礼と結び付けている。また、礼拝の対象である観音堂だけでなく、接待所など巡礼者をもてなす施設があり、巡礼が円滑に進行する機能が付与されていた。

このように石仏庵は文献資料や石造物から 19 世紀初め頃に西国巡礼の参詣者が立ち寄る場として整備され、西国巡礼の縁者により整備がなされ、巡礼を円滑に進めるための重要な礼拝施設であったと評価できる。

註

（1）　金子延夫「外城田地区」『玉城町史』上巻、玉城町、1995 年。
（2）　早川彦衛門　編、近藤恒次 補訂編『新訂三河国宝飯郡誌』国書刊行会、1980 年。
（3）　金子延夫『玉城町史　南伊勢の歴史と伝承』第３巻、三重県郷土資料刊行会、1984 年。
（4）　伊藤文彦「熊野参詣道伊勢路における礼拝施設の歴史的変化からみた管理運営方法」『ランドスケープ研究』83 巻５号、2020 年。
（5）　前掲註（4）。
（6）　前掲註（4）。
（7）　俣野通尚 著編、池田東籬 刪補。

図 41　三十三観音像（１～18）

19　20　21　22　23　24

25　26　27　28　29　30

31　32　33

青面金剛立像（右側面）

図 42　三十三観音像（19～33）、青面金剛立像

表４　石仏庵観音像の法量等一覧

No.	種別	法量（cm）		臂数	座位	備考	西国札所　本尊
		高さ	幅				
1	如意輪観音坐像	101	34	6	輪王座	敷茄子の下に反花	如意輪観音坐像
2	十一面観音立像	92	27	2	—		十一面観音立像
3	千手観音立像	89	28	20	—		千手観音立像
4	千手観音立像	88	28	18	—	錫杖は着色	千手観音立像
5	千手観音坐像	89	27	20	結跏趺坐		千手観音坐像
6	聖観音立像	89	28	2	—		千手観音坐像
7	如意輪観音坐像	89	28	4	輪王座	二臂結跏趺坐	如意輪観音坐像
8	十一面観音立像	89	28	2	—	長谷寺式	十一面観音立像
9	不空羂索観音坐像	89	28	8	結跏趺坐		不空羂索観音坐像
10	千手観音坐像	89	28	18	結跏趺坐	西国札所は二臂	千手観音坐像立像
11	千手観音坐像	89	28	16	結跏趺坐		准胝観音坐像
12	千手観音立像	89	28	20	—		千手観音立像
13	如意輪観音坐像	89	28	6	輪王座	西国札所は二臂	如意輪観音坐像
14	如意輪観音坐像	84	28	6	輪王座		如意輪観音坐像
15	十一面観音立像	89	28	2	—		十一面観音立像
16	千手観音坐像	90	28	18	結跏趺坐		千手観音立像
17	十一面観音立像	90	29	2	—		十一面観音立像
18	如意輪観音坐像	70	28	6	輪王座	光背上部欠損	如意輪観音坐像
19	千手観音立像	89	28	20	—		千手観音立像
20	千手観音立像	90	28	18	—		千手観音立像
21	聖観音立像	88	28	2	—		聖観音立像
22	千手観音立像	90	28	20	—		千手観音立像
23	聖観音立像	91	30	2	—		千手観音立像
24	千手観音坐像	90	28	20	結跏趺坐		十一面観音立像
25	十一面観音立像	88	28	2	—		千手観音坐像
26	聖観音立像	87	28	2	—		聖観音立像
27	如意輪観音坐像	89	28	6	輪王座		如意輪観音坐像
28	千手観音立像	89	30	20	—		聖観音立像
29	馬頭観音坐像	89	28	8	結跏趺坐		馬頭観音坐像
30	千手観音立像	89	27	20	—		千手観音立像
31	聖観音坐像	88	28	2	結跏趺坐		聖観音立像
32	千手観音立像	88	28	18	—		千手観音立像
33	十一面観音立像	89	29	2	—		十一面観音立像

表５　石仏庵観音像銘文一覧

No.	銘文
1	一番　那智山　爲先祖兩親菩提也　照誉清香智薫大姉　大誉觀廣智成居士　施主江戸通油町　九茂屋九兵衛
2	二番　先祖代々有縁無縁　歓良嬉庵主　浄室順清大姉　施主三州吉田庄篠束村　中邑又次郎
3	三番　機提普全庵主　浄法貞林大姉　光雲了輝庵主　桂林妙香大姉　明山全光信士　楾進智勇信女　明輪全鏡信士　法音益妙　施主三劦吉田庄篠束村　中邑與三郎
4	四番　觀世音　爲定月智海信士　施主西野長左衛門千助
5	五番　観世音　爲真誉皓月信士　光岳妙諦信女　勢州山田梅香寺
6	六番　観世音　爲先祖兩親菩提　施主和州吉野郡白矢村　坂本内うと
7	七番　十方家門　有縁無縁　三界萬霊等　發願主三州之僧宜黙
8	八番　観世音　月窓道證居士　観智妙禅大姉　爲先祖代々　法岳清輪居士　観誉貞法大姉　施主水谷市兵衛　北川久兵衛
9	九番　觀世音　植西氏先祖代々　植平氏實相玄心居士　貞巌妙琦大姉　和州吉野郡白矢村村　文兵衛　礒右エ門
10	十番　観世音　各先祖代々　上森本　岡本　南　奥田　八栗　銀次屋辻　施主和州吉野郡白矢邑　柏木　森脇　九屋　岩本　泉屋
11	十一番　觀世音　到眞院歸願宗元居士　施主北伊勢上野町　伊藤佐吉
12	十二番　觀世音　爲各先祖六親菩提也　施主勢劦田丸領原大辻　西國講中
13	十三番　観世音　爲先祖兩親菩提　施主紀州熊野長嶋本町　永井善右衛門
14	拾四番　爲先祖兩親菩提也　花山了覺居士　繁貞智盛大姉　繁徹量昌信士　大了道圓信士　施主當邑　辻井仙右衛門　中埜重五良　東浦長右衛門
15	十五番　観世音　爲三清浄輪居士　先祖兩親菩提也　玉草智珊大姉　施主三州三渡野邑　枚山源次郎
16	十六番　觀世音　爲各先祖兩菩提也　施主三州　上衣文邑　渭信寺観音講中
17	十七番　観世音　爲供譽使有道淳居士　現譽道光信士　施主三州岡崎連尺町　大田氏さと　まさ
18	十八番　觀世音　先祖両親菩提　超譽妙勝信女　施主江戸鉄砲町　木津屋平右衛門
19	十九番　観世音　爲先祖兩親菩提也　施主紀州木之本町岩田屋よし
20	二十番　觀世音　施主三州新城信濃屋太郎右衛門　久保屋利兵衛　海老屋庫小右衛門　真茶屋専助　爲各先祖菩提也　赤屋勘右衛門　正木屋久右衛門　富永屋譽兵衛　杉屋善助　古手屋善吉　海老屋佐右衛門
21	二十一番　願譽力善信士　安譽誓心信女　観譽喜道信士　施主三州前芝村　川出甚六
22	二十二番　觀世音　爲釋妙義信女　浄音智清大姉菩提也　施主當國田丸領千代邑　大松儀右衛門
23	二十三番　西埜長左衛門　浦田彦三良　加納半兵衛　中野重五良　爲先祖代々菩提也　施主當邑　新谷六左衛門　新谷文次良　加納三太夫
24	二十四番　観世音　眞慶宗莫居士　施主北伊勢上野町　伊藤佐兵衛
25	二十五番　観世音　爲先祖兩親菩提也　施主三劦吉良横須賀　清水幸八
26	二十六番　観世音　量誉貞壽善信女　法立院性誉妙栄大姉　施主三州西方村　鈴木太良左ヱ門　御馬村　鈴木忠兵衛
27	二十七番　観世音　各先祖代々　牛田喜六　鈴木孫右衛門　光ゑ　施主三州新城本町　鈴木正次　大原氏との
28	二十八番　觀世音　爲先祖兩親菩提也　施主三州吉良横須賀　清水氏於□
29	二十九番　觀世音　爲各先祖両親菩提　施主三州大木村　嶋田惣十郎　金屋村牛久保村観音講中
30	三十番　観世音　爲先祖代々両親菩提　施主紀州熊野神之上邑　川口仁太夫
31	三十一番　観世音　凰山玄鳳居士　實應貞参大姉　施主和州吉野郡木津村　井上善兵衛
32	三十二番　観世音　爲先祖代々　虚心了空居士　一夢幼心童子　施主西川氏
33	三十三番　観世音　爲各先祖代々菩提也　施主尾州知多郡常滑　総心寺観音講中

表６　石仏庵石柵・石階耳石・石柱銘

種別	銘文
石柵　東列1	三刄　田原領白谷邑　藤城儀右ェ（門）
石柵　東列2	三刄　古宿邑　花井寺
石柵　東列3	同　小金埜邑　中尾與惣治
石柵　東列4	同　＜牛久保邑　石黒惣四郎／同　大木邑　島田惣十郎＞
石柵　東列5	同　牛久保邑　＜靏田九良三郎／今泉文明＞
石柵　東列6	同　牛久保邑　＜□□□忠兵衛／清水治良右ェ門＞
石柵　北列東１	勢刄　蚊野邑　森井重藏
石柵　北列東２	三州　下地　中村又吉
石柵　北列東３	三州　篠束村　中村又次郎
石柵　北列東４	城州　木津　海老屋佐兵衛
石柵　北列東５	三州　御馬村　鈴木忠兵衛
石柵　北列東６	同　三渡野邑　杉山源治郎
石柵　北列東７	三州　篠束村　中村庄次郎
石柵　北列東８	同　下地邑　山本三太郎
石柵　北列東９	三州　篠束村　中村與三郎
石柵　北列西１	勢州　松坂紺屋町　竹屋長兵衛
石柵　北列西２	和州　鷲家村　三輪屋庄九郎
石柵　北列西３	三州　吉田　石黒九郎兵衛
石柵　北列西４	三州　西方村　鈴木太郎左衛門
石柵　北列西５	和州　上多古村　観音講中
石柵　北列西６	當国　河田邑　村林忠右衛門
石柵　北列西７	當国　大湊　足佐吾助
石柵　北列西８	三刄　吉田領横須賀邑＜田本佐次郎／田中庄助／同八兵衛＞
石柵　北列西９	常陸国　藤藏川岸　大野藤兵衛
石柵　西列１	當國　笠木邑　矢野氏何某
石柵　西列２	同　日野町　布屋平助
石柵　西列３	同　松坂平生町　津嶋屋清兵衛
石柵　西列４	當国　上野宿　伊藤作兵衛
石柵　西列５	同　松坂新町　中洹屋久兵衛
石柵　西列６	大坂　舩塲塩町　大塚屋藤兵（衛）
石階西耳石	江戸　本所堅川／文化五戊辰年　十月造立
石階東耳石	＜有田屋茂八／大九屋元右衛門／常陸屋市兵衛＞
標柱　正面	（如意輪観音坐像）＜本尊／前立＞順礼道引観世音
標柱　右面	＜くまのぢを／みちひき／たまへ／くハんせおん／きよき／ふしやうの／ひとハ／ゑらます＞江戸講中＜□池町　美濃屋権兵衛／同　炭屋平兵衛／同　醒井屋作兵衛／同　炭屋茂兵衛／本町貳丁目九角屋次郎兵衛／堀端町貳丁目　丸茂屋左七＞
標柱　左面	南無阿弥陀仏＜越后州高田善導寺／廿九主／海誉（花押）＞＜婦み迷□□□ん松原／人をも照らせ／千□せく／か□て＞＜富澤町　富田屋源七／同　山縣屋兵助／同　美濃屋五郎兵衛／橘町貳丁目藤井屋伊右衛門／横山町貳丁目　伊勢屋六右衛門／神田久エ門町貳丁目　岸上半七＞
標柱　裏面	＜文化二乙丑年五月吉祥日／法楽　暁の水さめきつて蓮の花＞＜小石川傳通院町　伊勢屋藤助／通油町　吉野屋半左衛門／同　九茂屋九兵衛／鉄砲町　木津屋平右衛門／□奄鼠六／發願主観音庵宜黙叟代

４　野中から千代

○原・野中

原の道　石仏庵から約 150m 西に進むと熊野道は南に折れる。そこから県道を越えた突き当たりに道標が２基ある。一つは、高さ 101 ㎝、幅 62 ㎝、奥行 31 ㎝の自然石で、正面「左さんぐうみち」右面「右くつかミち」とある（図 43）。近世には、北を正面に設置されていたと考えられる。この道標は長らく原公民館の入り口に保管されていたが、平成 31（2019）年に現在地に移設された。もう一つは、高さ 237 ㎝、幅 37 ㎝、奥行 37 ㎝の角柱形花崗岩製の道標で正面「(梵字) 國東寺観音道＜是より／三十丁＞」、右面「＜神代より國を東ぬる／寺なれは福智を／わかつ佛なりけり＞伊勢順禮九番札所＜當山現住／覺雄建之＞」、左面「西國巡禮／手引観音かけぬけ二十五丁／左り参宮道」、裏面「文化十三年丙子十月施主＜相可　西村氏　／吉祥寺見並氏／千代　大松氏／坂井　奥村氏／□□　北村氏＞」とある（図 44）。基礎東面には「松坂垣鼻／石工／惣右エ門」とある。本道標も以前は約 100m 東にあったが、平成 31（2019）年に現在地に移設された。この道標は、西国巡礼の旅人を国東山観音寺に誘うために設置された

図 43 原の道標（自然石）

図 44　原の道標（北西面・南東面）

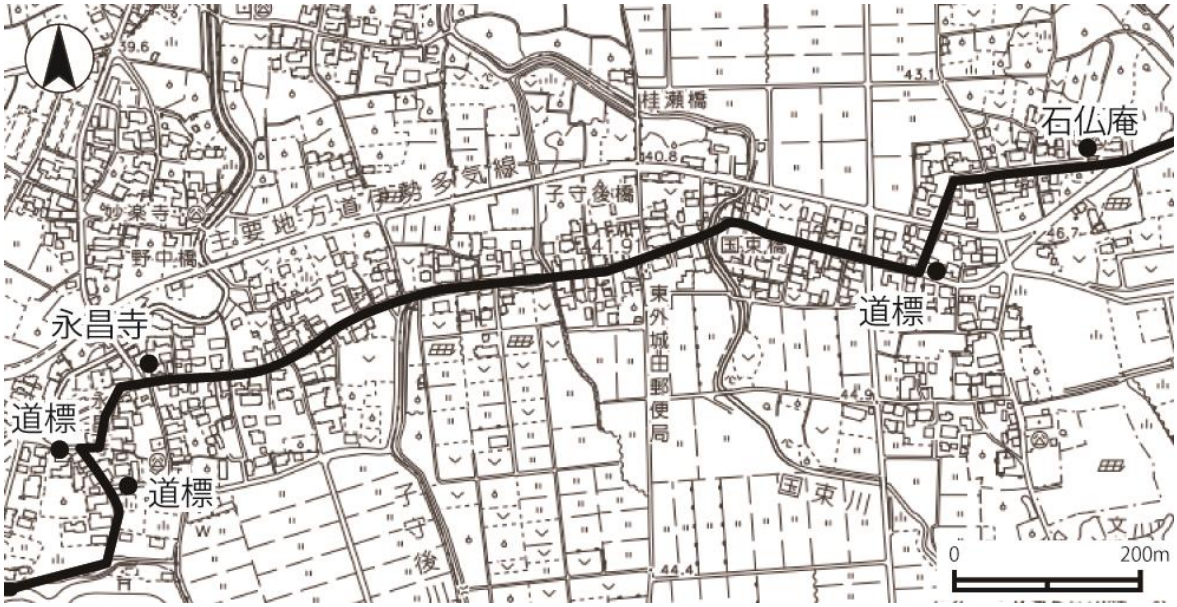


図 45　原から野中の道（1/8,000）

ものである。街道の両脇は多くの茶屋が軒を連ねていたとされる。道標の辻を 160mほど西進した場所が、近世の度会郡原村と多気郡野中村の境界で、現在も玉城町と多気町の境界となっている。

野中の道　多気町野中に入り、町境から約 340m西進すると永昌寺に突き当たる。永昌寺境内には享保９（1724）年銘の廻国供養碑と通称「ねむり地蔵」と呼ばれる石造地蔵菩薩像がある。熊野道は永昌寺の前で南に方向を変え、約 100m進むと野中の道標に至る。この道標は高さ 183 ㎝、幅 30 ㎝、奥行 30 ㎝で正面「右＜よしの／かうや＞みち」右面「すくさんくう道」左面「さいこく道」裏面「天保（1833）四年癸巳五月建立」とある。この辻が和歌山別街道（伊勢南街道）と熊野街道（さいこく道）との分岐となる。街道を約 50m南進すると、小さな道標がある。下部は地中に埋没し、正確な大きさは不明であるが、地上に出ている部分は、高さ 88㎝、幅 18㎝、奥行 15㎝で正面「左　くづか道＜大智／彰覚＞」とある。紀年銘はなく道標が設置された年代は不明であるが、江戸時代から明治時代にかけてのものと思われる。

道標を過ぎ、西外城田神社の前を西進すると、県道松阪度会線に合流する。付近は圃場整備が実施され近世以前の道の線形は定かではない。県道合流後約 900m 南下すると、成川の集落に至る。コンクリート製の小橋を渡り、成川の集落内を約 120m西進すると街道北側に瓦葺きの大師堂がある。大師堂から約 190m進むと栃ケ池（とちがいけ）に至る。栃ケ池は約 10ha の農業用水地でクチナシ等の湿地性植物群落が残ることから「栃ヶ池湿地植物群落」として三重県の天然記念物に指定されている。栃ケ池を過ぎると女鬼（めき）峠の麓に至る。

図 46　野中の道標（北から）

図 47　野中の道標（左面・正面・右面・裏面）

図 48　野中国東道道標（北から）

図 49　栃ヶ池湿地植物群落

女鬼峠道　栃ケ池から県道松阪度会線を渡ると東側に地蔵菩薩立像を安置する小さな祠がある。地元の古老によると、かつては別の地蔵があったが盗難に遭い、近年あらたに設置されたとのことである。この先が、伊勢路最初の峠となる女鬼峠である。

女鬼峠の名称の変遷は以下の通りである。天明６（1786）年の『西国道中記』には「禰木峠」、天保４（1833）年に書かれた地誌『勢陽五鈴遺響』(1) には「子ギ峠」、天保 11（1840）年の『天保新増補西国順礼道細見大全』には「めつき峠」、嘉永６（1853）年の『西国三十三所名所図会』では「メツキ峠」、明治 18（1885）年の「伊勢国多気郡野中村全図」には「字メキ」、「伊勢国多気郡相鹿瀬村全図」には「字東女鬼」の記載が見られる。これらの記載から、「ネギ」が転じて「メツキ」、「メキ」となり、明治時代頃に「女鬼」の漢字があてられたのではないかと推察される。

江戸道　地蔵祠から約 50m南進するとナシの野生種で多気町指定天然記念物の「マメナシ」がある。「マメナシ」の木を過ぎると道路は二手に分かれる。南の道が近世以来の道（以下「江戸道」）であり、西の道は明治時代に荷車が通れるように開削された道（以下、「明治道」）である。

江戸道から明治道へと転換する年代については、正確な時期は不明であるが、明治 18（1885）年の「伊勢国多気郡野中村全図」では明治道のみが描かれており、この時期にはすでに江戸道は使用されていなかったと考えられる。

この分岐（図 50. ①地点）を南に進むと竹林の中に道（図 50. Ａ区間）がある。道路幅は約 1.8mで、人が多く歩いたためか、道路中央部分が両脇より低く削れている。頂部付近は切通しとなっており、そこを抜けると幅の広い道に出る。この竹林内の区間は、令和３（2022）年度に再発見された区間で、道路の幅や形状から近世以前の道と推定される。この道は明治時代に荷車を通すために、①地点を西に分岐する道が新たに作られ、放棄されたものと考えられる。江戸道と明治道が合流後は、砂利舗装された道となる。この道も明治道となるが、線形は江戸道と重複するものと考えられる。道路を南進し、伊勢自動車道の高架をくぐり三差路を西に曲がると、女鬼峠に向かう道が二手に分岐する（②地点）。

②地点の分岐を峠に向かって左側へ進む道（Ｂ・Ｃ・Ｄ区間）が江戸道である。近年このルートが再発見された。道路幅は約 1.8mで谷筋を直線的に登っていく。③地点には、谷を渡る土橋が架けられ、下部には石組の暗渠（図 54）が設置されている。Ｂ区間とＣ区間の間の谷部は土砂が多く堆積しており、近世の道は寸断されている。明治道の峠の切通を開削した際に発生した残土を廃棄したために埋没した可能性がある。この寸断箇所については、保存会により迂回路が設けられている。谷を越えてＣ区間に近世の古道が残存している。峠付近は標高が急激に上がるため、東に迂回したのち峠に向かう道となっている。Ｃ区間南端は峠付近で明治道の切通し（図 55）に寸断され、道の形状は不明である。如意輪観音像を過ぎた箇所に江戸道（Ｄ区間）が残存しており、直線的な下り坂となっている。Ｄ区間はその南端で明治道と合流する。

明治道　②地点の分岐を峠に向かって右側へ進む道（ａ区間）は明治道である。アスファル

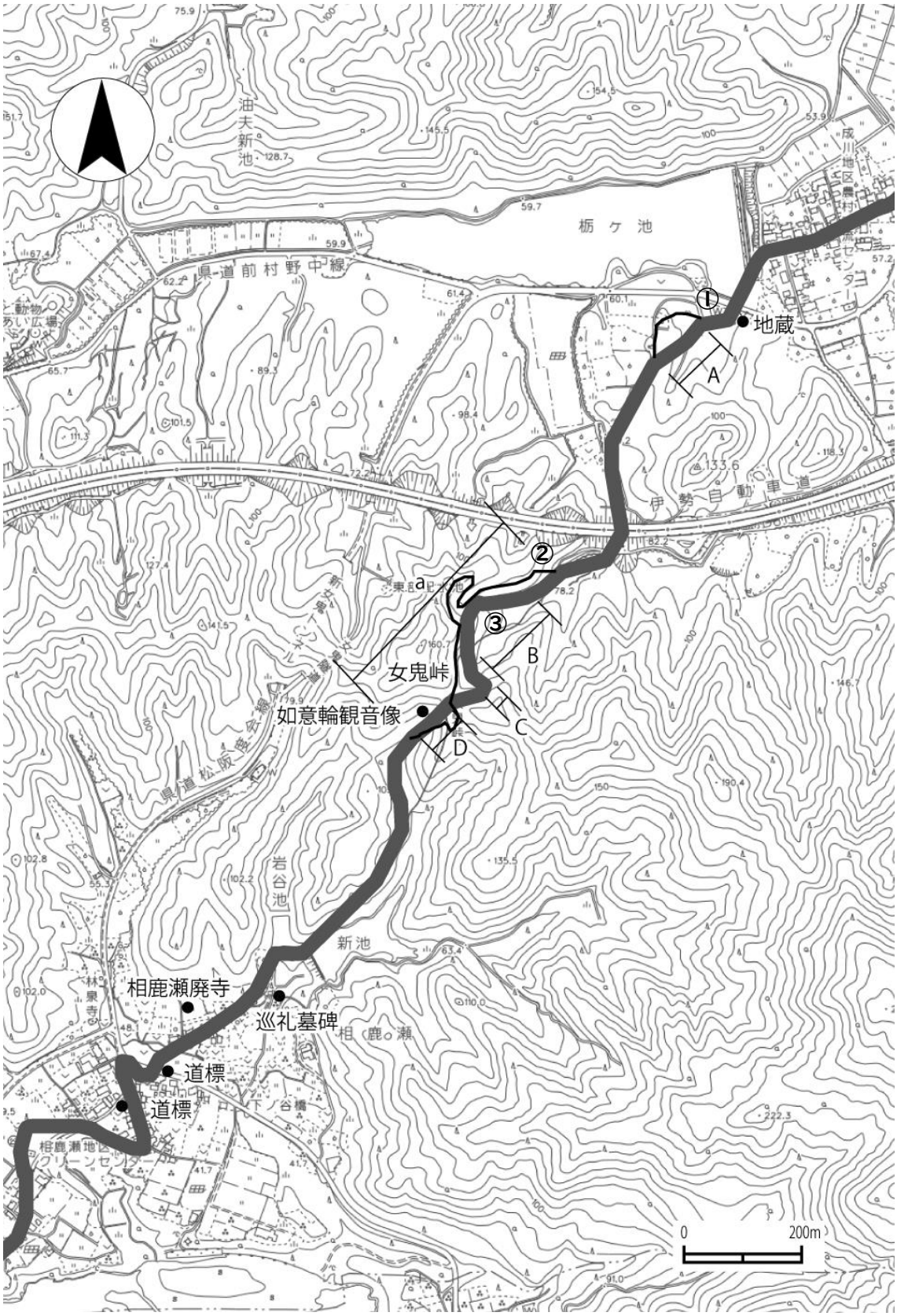


図 50　女鬼峠道（1/10,000）

ト舗装がなくなると、なだらかな斜面の道になる。路面には、荷車の重みで削れた車輪の痕跡がみられる箇所もある。谷を渡る箇所（③地点）には土橋が架けられ、排水施設として土橋下部に石組と常滑焼の土管を用いた暗渠（図 56）が設けられている。土橋を過ぎると地形に合わせて道路は折り返し、緩傾斜を維持しつつ北進み、数十m進むとさらに折り返す。峠手前の東側には茶店跡の平坦面がある。この茶店は明治時代に峠を開削した際に作られたものである。峠は結晶片岩（千枚岩）の岩盤を掘削した切通しになっている。切通しの開削により尾根上にあった江戸道は消失した。

切通から少し南進した道路西脇に祠があり、如意輪観音坐像２躯と六字名号碑（図 59～61）がある。これらは、もともとは江戸道の峠に設置されていたものが、明治に切通しが作られた際に現在地に移設されたとされる。如意輪観音は西国巡礼一番札所の那智山青岸渡寺の本尊であり、この峠道が西国巡礼道として利用されたことを示唆する。切通しを抜けると谷の等高線に沿った緩斜路となる。なお、この峠から相鹿瀬側の区間については、砂利舗装の道となっており、昭和以降に軽トラック等の車両が通行するために改良されたものと考えられる。砂利舗装の道を約 300m下ると新池があり、さらに約 300m下ると視界が開け、相鹿瀬の集落が見える。熊野道の西、山際は古代寺院である逢鹿瀬廃寺の跡地となっている。

【巡礼墓碑】新池の南にある相鹿瀬集落の墓地には、正面「観山道音信士」右面「文政十＜丁／亥＞三月」左面「信州つまこ宿／俗名今井三右エ門」の巡礼墓碑がある。文政 10（1827）年にここで亡くなった信濃国妻籠（長野県南木曽町）から来た巡礼者の墓である。戒名は観音の文字を分け、その中に山道の文字を入れている。

【如意輪観音坐像】一つは、祠の中に安置されている。高さ 76 ㎝、幅 38 ㎝、基礎正面「三界萬霊等」、基礎右面「元文三戊午歳／西国一番／三月十三日」と陰刻される（図 61）。もう一つは、祠の外軒下にある。高さ 53㎝、幅 33㎝、裏面「願主矢野村大西吉郎太夫」とある。

【六字名号碑】高さ 147 ㎝、幅 37 ㎝、正面に「南無阿弥陀佛」の六字を陰刻する。

【逢鹿瀬廃寺】「太神宮諸雑事記」の神護景雲元（767）年十月三日条[(2)]に「逢鹿瀬寺永可為太神宮寺」とあり、伊勢神宮の神宮寺とされる。古代瓦が採集されており、女鬼峠を越える道が古代から重要な交通路であったと考えられる。

図 51　道路（A区間）

図 52　道路（B区間）

図 53 ②地点（左.江戸道、右.明治道）

図 54　③地点の近世石製暗渠（西から）

図 55　明治道切通（南から）

図 56　③地点の近代陶製暗渠（東から）

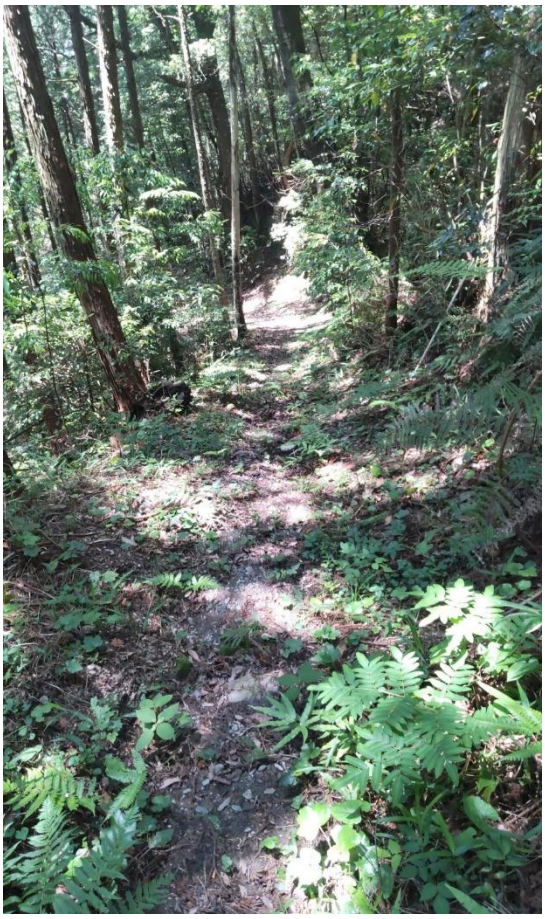


図 57　道路（Ｄ区間）

図 60　如意輪観音坐像

図 58　Ｄ区間南端（左.江戸道、右.明治道）

図 59　如意輪観音坐像と名号碑

図 61　如意輪観音坐像基礎右面

相鹿瀬の道　熊野道と県道松阪度会線との交差点に道標がある（図 62）。高さ 171 ㎝、幅 22 ㎝、正面「右くまのみち順礼＜手引きの観音／是より十八丁＞」右面「（梵字）國東寺観音道＜峯道三十丁／田丸かけぬけ＞」左面「天保十二（1841）年九月吉辰　願主＜西麓十八村／郷組中＞」裏面「＜神代より國を束ぬる寺なれば／福智をわかつ佛なりけり＞＜當山住職／覺雄建之＞」と記されている。正面の「順礼手引きの観音」は大台町柳原に所在する無量山千福寺（柳原観音）のことを指し、参詣道を歩いてきた巡礼者が向かう道を示す。建立者は国東寺の住職覺雄であり、野中の道標同様、巡礼者を国東寺へと誘導するために建立したと考えられる。この道標は県道工事に伴い、東側へ５ｍほど移設され、原位置は保っていない。

図 62　相鹿瀬の道標①　図 63　相鹿瀬の道標②

県道松阪度会線を渡り相鹿瀬の集落に入ると三差路に道標がある（図 63）。高さ 110 ㎝、幅 22 ㎝、正面「右　くまの道」、右面「左　さんぐう道」、左面「文政（1825）八年己酉春」とある。この道標も本来は約 100ｍ南にあったが移設された。道標から約 350ｍ西進すると街道北側に貞享五（1688）年の銘を有する石造地蔵菩薩立像がある。高さ 148 ㎝、幅 60 ㎝で多気町内にある石造地蔵菩薩像の中で最大級のものである。地蔵から約 350ｍ西進すると県道相鹿瀬大台線と合流する。道路北側の階段を上った先に貞享元（1684）年銘の五輪塔を納めた小堂がある。この五輪塔は疫病に苦しむ村人の代わりに生き埋めとなった僧侶の供養塔とされる。五輪塔から約 170ｍ西進すると多気町と大台町の町境に至る。町境は深谷と呼ばれる谷で、県道には橋が架けられている。近世以前の熊野道は上流部を渡河していたが、その場所は定かではなない。明治時代に現在の橋の上流に橋が架けられ、荷車が通れる幅の道が造られた。道路脇には明治 28（1895）年に相鹿瀬の逵氏が建立した地蔵菩薩立像がある。

千代の道　地蔵を過ぎると千代（せんだい）の集落に至る。集落の入り口、道路西側には明治時代の寺子屋跡の建物がある。令和 5（2023）年現在、屋根に穴が開き朽ち落ちる寸前となっている。寺子屋を過ぎ、南へ続く小道が近世の参詣道である。県道から 30ｍ進んだところ、現在は竹藪に覆われている場所に「まんじゅうや」という茶店があった。茶店跡を過ぎると街道は南から南西へと向きを変え、茶店跡から約 350ｍ進むと丁字路に至る。現在、この道は北西に進み県道相鹿瀬大台線に合流するが、近世の道は田畑の中を南西方向に直線的に進んでいた。昭和 55（1980）年の歴史の道調査時は、その道が残っていたが、以後の圃場整備により消失した。千代から谷を一つ越えると柳原の集落に至る。

註

（１）　安岡親毅『勢陽五鈴遺響』４、三重県郷土資料刊行会、1977 年。

（２）　「太神宮諸雑事記」『群書類従』第３巻。

５　柳原から栃原

○　柳原

千代から柳原への道　大台町千代（せんだい）と柳原（やなぎはら）の間には、浅間山から宮川に向けて、中谷と呼ばれる高低差約 15mの深い谷がある。現在は県道相鹿瀬大台線によって容易に柳原に入ることができ、県道から丘陵に沿って左に曲がり約 100m進むと千福寺入り口に至る。さらには県道から千福寺正面に延びる道も整備されている。ただし、従来の道は千代から中谷を下り、柳原に向けて谷を上ってきたようで、坂を上る途中にある「弘法井戸」と呼ばれた湧水点があり、旅人の喉を潤したとされる[(1)]。実際に県道から折れて千福寺に向かう舗装道路の脇には、中谷から上がってきたと考えられる未舗装道が残されており（図 64）、これがかつての熊野道であった可能性がある。なお、千代側では中谷に降りられる道は確認できなかった。

図 64　柳原側からみた未舗装道路

図 65　千福寺の入口

【森ノ上遺跡】　千福寺も含め柳原集落全域では、森ノ上遺跡が所在する。中世に遡る 13 から 14 世紀の山茶碗や 15 世紀の土師器の散布が認められ、県道の改修工事に伴う発掘調査では、中世まで遡る掘立柱建物が確認されている[(2)]。

無量山千福寺（柳原観音）

千福寺（図 65）は、宮川左岸段丘端部の標高約 48mの地点に位置し、本堂の東側からは宮川を眼下に臨める好立地である。通称「柳原（やないばら）観

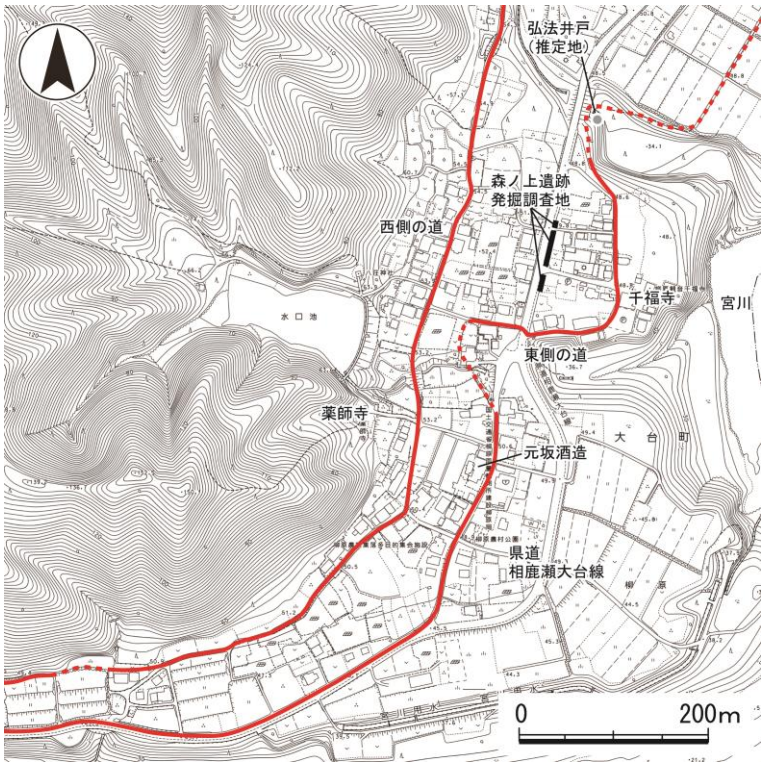


図 66　柳原の道（1/8,000）

音」といい、現在は安産祈願の真言宗寺院として地域の信仰を広く集めており、本尊は「手引き観音」と呼ばれる十一面観世音菩薩である。火渡りや護摩焚き等の行事を含む大祭が例年開催され、その他、月に一度 18 日に境内で朝市も開かれており、今も柳原の中心として賑わいをみせている。

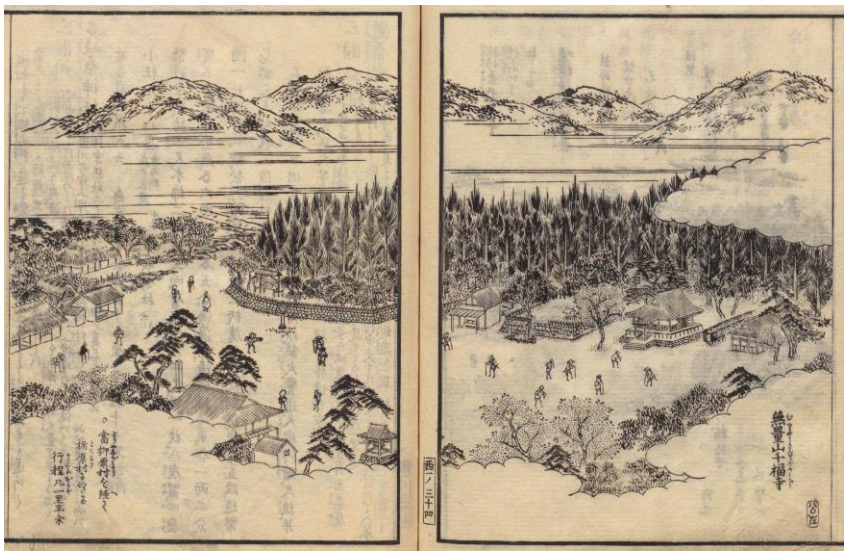


図 67　無量山千福寺（『西国三十三所名所図会』）

千福寺の創建時期は明確ではないが、寛正５（1464）年の荒木田氏経加筆『皇太神宮年中行事』[3] には、「於柳原之御堂之前昼飯用」との記述があるほか、花山法皇が熊野詣に際して参籠したとの寺伝もあり、中世以前に遡る可能性がある。一方で、旧本堂の棟札に正徳２（1712）年２月、屋根瓦に享保 10（1725）年の刻字があることが指摘され [4]、また現在も寺域内に存在する石燈籠には「度會郡山神村/中村勝右衛門光忠寄附」「享保十三（1728）戊申年二月造立之」の銘文が刻まれている（図 68）。少なくとも 18 世紀前半には、現在の千福寺に連なる寺院の整備が進められていたと考えられる。なお現在の本堂は、大正 12（1923）年に祐智和尚によって再建されたようである [5]。『西国三十三所名所図会』には、「本尊 巡礼手引観世音、札納所 本堂の右にあり弘法大師を安す、鐘楼 本堂に対す、鎮守祠 本堂の右に隣る、僧坊 行き暮たる巡礼の旅人ハ此寺を頼ミて一夜参籠するもあるよし聞ゆ」との記述があるほか、挿図には、街道に隣接して高札場、街道と寺院境界の北側に灯篭、南側に石柱、鎮守祠前に手水鉢が描かれている（図 67）。現在でも本堂・札納所・鐘楼・標石は同様の配置となり、主要建物の配置は大きく変更されていない（図 70）。本堂は入母屋造本瓦葺で、身舎は桁行３間、梁行４間からなり、南からの妻入りとなる点が特徴的である（図 71）。札納所は、宝形造桟瓦葺、桁行３間、梁間３間で、

図 68　享保 13 年銘の石燈籠

図 69　千福寺にある鳥居の記号
「伊勢国多気郡柳原村地籍全図」（部分）

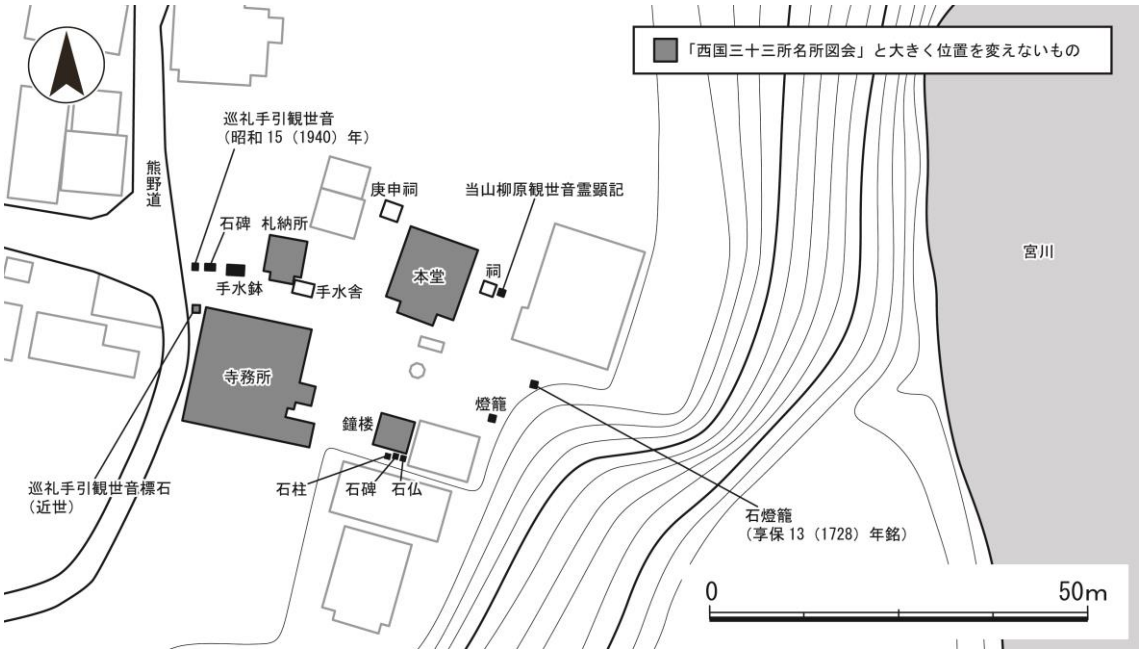


図 70　千福寺の建物配置（1/1,000）

内部には弘法大師が奉られている（図 72）。鐘楼屋根は切妻造本瓦葺である（図 73）。

かつて柳原の氏神を祀る神社が千福寺域内に所在しており、明治 41（1908）年に川添神社に合祀されて以降、跡地は寺域になったとされる[6]。明治 19（1886）年に作られた「伊勢国多気郡柳原村地籍全図」[7] でも、千福寺に隣接して鳥居の記号が記載されている（図 69）。

図 71　千福寺本堂

図 72　千福寺札納所・手水舎

千福寺に関連する近世以降の文献資料をたどると、まず宝暦 11（1761）年刊の『三国地誌』[8] では、記載漏れの可能性もあるが、柳原村にある梵刹（寺院）は「薬師寺」のみで、千福寺の記載はない。明和２（1765）年刊の木村有周『伊勢参宮・西国巡拝道中記』[9] に、「ここに聖徳太子御作の十一面観音堂あり」、安永２（1773）年の辻武左衛門『西国順礼日記』[10] には「此所ニ無量山 万（ママ） 福寺ト云寺有、此の寺に観音堂則三十三所手引之観世音之よし」という記述がある。18 世紀後半には、本尊である十一面観世音菩薩（手引き観音）と西国巡礼の関係性が強化され、徐々に千福寺が西国巡礼と関連した礼拝施設へと転化したと考えられる。さらに 19 世紀になると、現在も位置を変えずにある寺院入り口の標石（図 75）に代表されるように、「巡礼手引観世音」を参詣者の進行方向に向けるなど、「あらとうと手引給へる観世音たかきいやしき人を選ばず」を詠んだとさ

れる花山法皇の参籠と関連付けた伝承や記述が増加する。本堂東隣の祠と併設された「当山柳原観世音霊顕記」（図 74）には、「文化二（1805）年洛東大黒町松原下ル所ニ源次ト伝ヘル者アリ　妻まさハ長病ノ為ニ躄（いざり）トナリ夫源次まさヲ小車ニ乗セ西国巡拝ノ途路當山へ参籠七日ニシテ躄リ全治ス　まさ女乗用ノ小車ハ此ノ保存庫ニ藏ス　大正十五（1926）年八月献立（以下略）」とあり、また文政 12（1829）年『新増補細見指南車』[11] や天保 11（1840）年『西国順礼道中細見大全』[12] の道中案内では、「柳原村 村中ニ 無量山 千福寺本尊順礼手引観世音ト号 順礼の人行暮たるときハ当寺を頼ミて一夜参籠すべし」等の記述がある。19 世紀前半になると、玉城町の石仏庵等と合わせて、伊勢参宮から西国巡礼に呼び込む機運を高める装置として、『西国三十三所名所図会』嘉永６（1853）年に挿絵されるほど、体系的な整備がなされたと考えられる[13]。

図 73　千福寺鐘楼

図 74　当山柳原観世音霊顕記

図 75　巡礼手引観世音の標石

○　新田

柳原から新田・栃原への道　千福寺を出て南下すると、熊野道は再び県道相鹿瀬大台線と交わるが、そのまま県道とは合流せず、柳原の集落の中を抜ける。道は文化２（1805）年の創業とされる元坂酒造の周辺では、山側を進む西側の道と川側を進む東側の道の２つがみられる。西側の道を南進すると、右手山側に庄屋大北源兵衛なる人物が、幕末の頃に村人とともに廃寺にしたとされる天台宗の医王山薬師寺[14] がある。東側の道は元坂酒造を過ぎ 100mほど進むと、右側に柳原の集会所があり、すぐに再び県道と合流する。県道は、南にせり出した山塊を抜けるため、緩やかに西進しながら向きを変え、西側の道とも合流して一本の熊野道に戻る。宮川沿いを新田・栃原方向へ西進すると、濁川と宮川の合流地点に至る。現在の熊野道は、県道の柳原橋で濁川を越えて、新田・栃原へと西進するが、元禄年間（1688～1704）に新田村が開かれるまでは、濁川沿いに北西へ延びる道が用いられたとされており[15]、こちらについては栃原の道として後述する。この濁川との分岐点（図 77）には、参詣者が道中で疲れを癒したとされる「お滝さん」と呼ばれる滝状の湧水点とともに、下新田の道標「右大師道　左くまの道／天保十（1843）四年四月十九日請願妙智童女　加納立之」が所在していた。

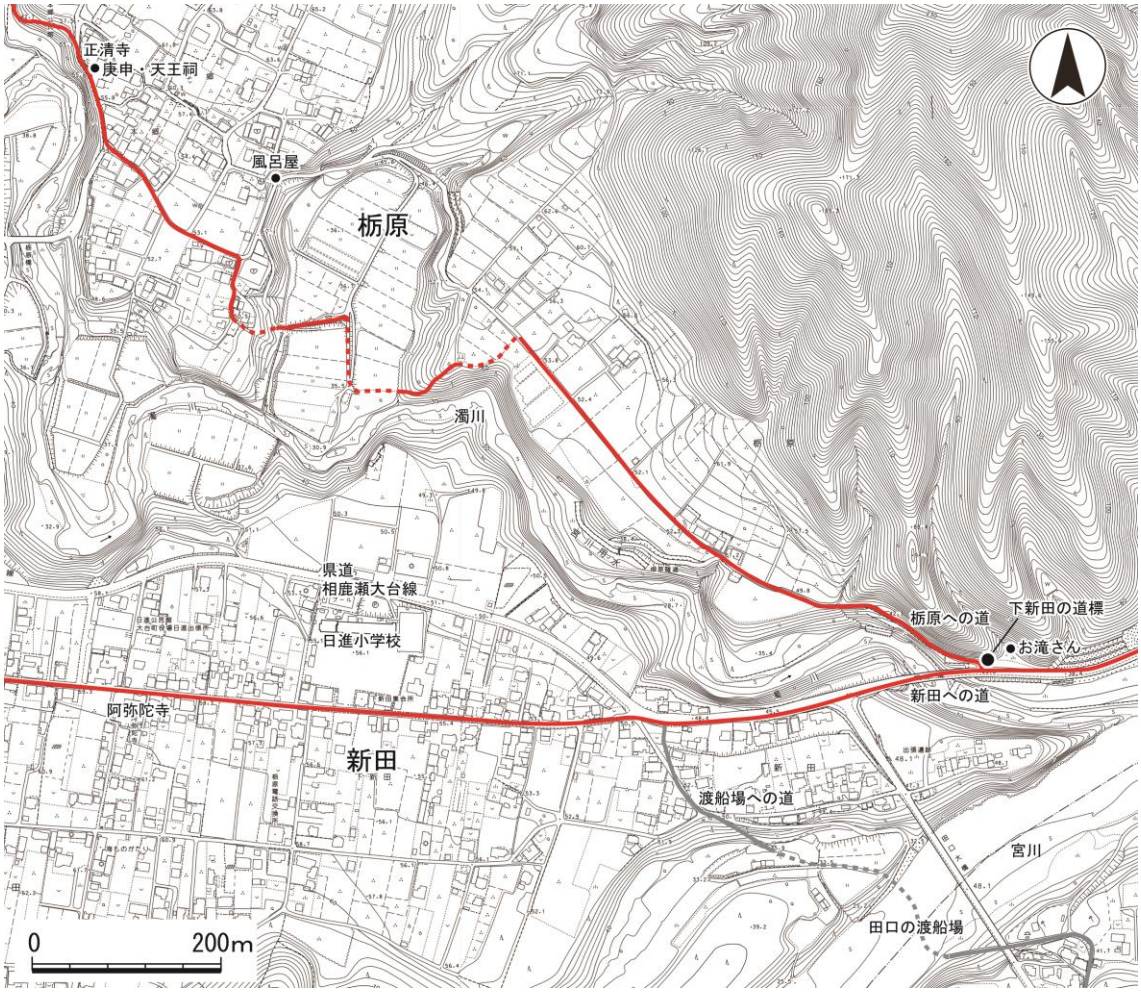


図 76　新田・栃原の道 1（1/8,000）

図 77　濁川の分岐点

（左：新田への道、右：栃原への道）

県道をさらに 400mほど進み、坂を上ると熊野道は県道から分岐し、下新田・中新田の集落内に入る道と、度会町田口等に渡る渡船場へ続く道に分岐する。渡船場へは、分岐から 500mほど南下すると宮川に至る（図 78）。渡船は、昭和 55（1980）年の田口大橋の完成とともに完全に廃止となった。集落の道に戻り、分岐から大台町立日進小学校を右側に 550m ほど西進すると左側に阿弥陀寺が位置する。

【景勝山阿弥陀寺】　阿弥陀寺は享保年間（1716～1736）の創建とする由緒をもつ天台宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来である。かつては、現在の本堂とは別にある観音堂（図 79）を中心に、修験者が修行をする真言宗系の寺院であったと推測される[16]。なお、観音堂の本尊は十一面観世音菩薩であり、千福寺の手引き観音に続いて、当寺でも道中の安全を祈願したことが推測される。

下新田・中新田を抜けると、理髪店前（図 80）に「右＜まつさか／にう＞道」「左くまの

図 78　田口の渡船場周辺

図 79　阿弥陀寺観音堂

図 80　新田の道標があった理髪店前

図 81　新田の道標（左側面、右側面）

道」と記された新田の道標（図 81）がかつてあった。

現在は下新田の道標とともに、大台町教育委員会が保管している。付近では古くに八幡神社があったとされ、明治 17（1884）年の「伊勢国多気郡新田村地籍全図」[17] でも新田村と栃原村の境界沿いに、鳥居の記号がみられる（図 82）。坂を上り、現在の国道 42 号との交差点を過ぎると、熊野道と松阪道が合流する三差路があり、昭和のはじめごろまでは「くまの道／さんぐう道」と記載された大型の道標（栃原茶屋）があったとされる [18] が、現在は残されていない。明治 19（1886）年に熊野道は、伊勢起点から松阪起点へと変更され、伊勢からの道が参宮道と改められたようだ [19]。なお、現在は大台町佐原にある地蔵菩薩坐像が陽刻された道標地蔵（図 83）は、「（正面）（左指差し）くまの道（右面）すぐ色太道（左面）すぐ松坂道」とあり、過去に栃原から移設された可能性が指摘されている [20] が、銘文の内容と記載されている方

図 82　八幡神社を示す鳥居の記号
「伊勢国多気郡新田村地籍全図」（部分）

図 83　大台町佐原へ移設された道標地蔵

向から、この三差路に設置されていた可能性が高いと考えられる。

JR 紀勢本線の踏切を渡ると、天保９（1838）年建築の旧宅があり、現在も続く岡島屋がある（図 84）。街道の交わる三差路付近は、往時は大きな賑わいをみせたようで、萬屋、神坂屋、柳屋の宿場のほか、人力車の帳場、商家等、20 軒ほどが街道沿いに並んでいた。先述したとおり、元禄年間に新田村が開かれるまで熊野道は栃原を通るが、おそらくはこの経路を南下してきたと考えられる。今一度、下新田の道標の分岐点に戻ろう。

図 84　岡島屋（左）

図 85　濁川

図 86　谷へと下りる未舗装道

図 87　正清寺

○　栃原

栃原の道　濁川（図 85）の分岐点で右の舗装された道を川に沿って北西方向に 700mほど進むと、北側に大きくせり出した谷にぶつかる。現在の道は、谷（現在は水田）に沿って大きく湾曲して迂回しているが、従来の熊野道は舌状に張り出した段丘斜面を谷に下り、横断していたと考えられる。谷に至る斜面部には、未舗装の道が谷に向けて残存している箇所（図 86）もみられる。斜面と谷の境には現在の水田に使用する水路が通るが、前述した道を通り谷に下りた場所には、小型の仮橋が置かれており、ここに道があったことがうかがえる。水田を抜けると谷から段丘に上る舗装道と合流するが、現在の道は段丘上の建物を迂回する形で造成されており、従来は今よりも直線的に段丘を上ったものと考えられる。段丘上に出ると、熊野道を 150mほど北に外れた場所に風呂屋と呼ばれる湧水点があり、昔は焼いた石を利用して共同風呂としたと言い伝えられている。熊野道に戻り、本郷の集落や茶畑を抜けながら 200mほど北西方向に進むと、再び蛇行してきた濁川とぶつかる。道は北に折れ、さらに 150m ほど北進すると右手に庚申・天王祠と正清寺がある。観音山補陀落院正清寺（図 87）は、天明年間（1781～1786）に厳誉上人に

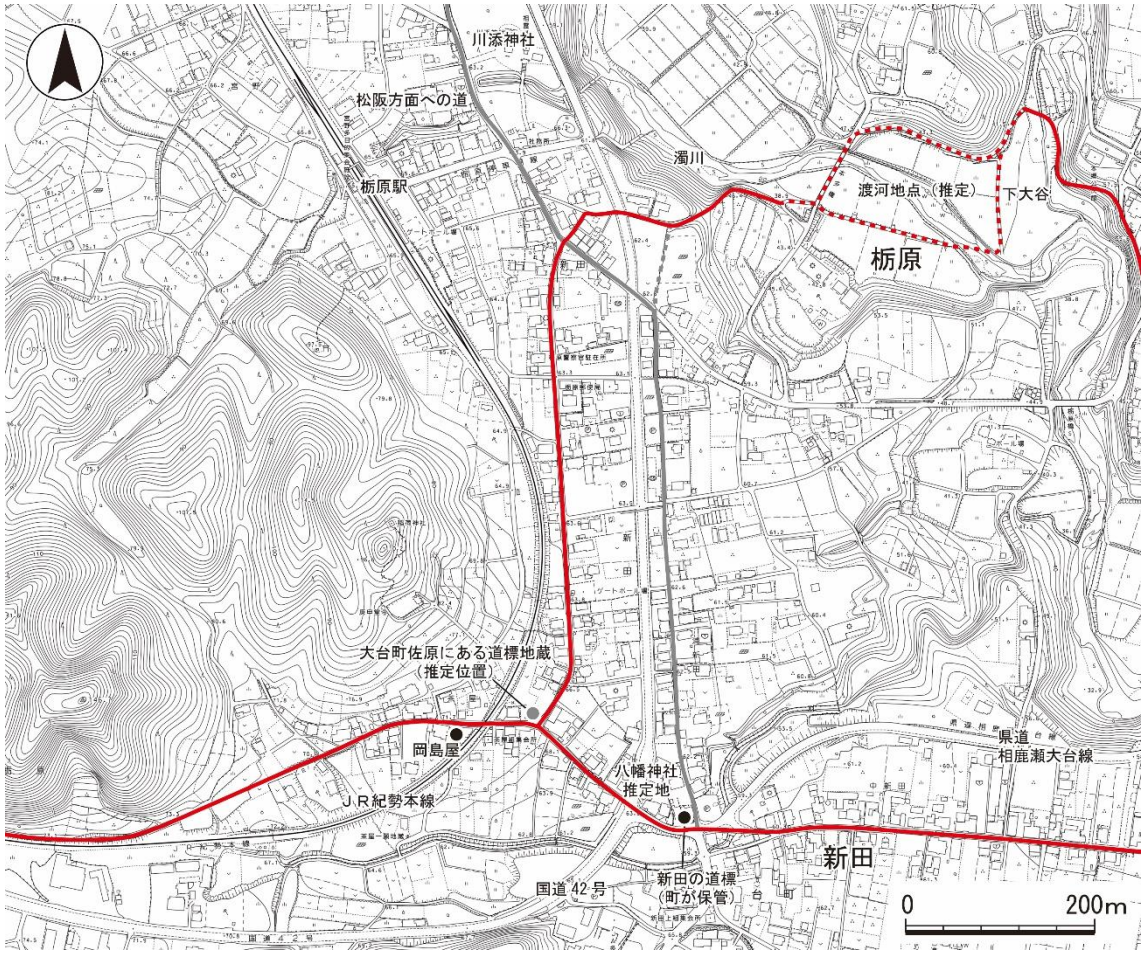


図 88　新田・栃原の道２（1/8,000）

よって再興された浄土宗鎮西派の寺院である[21]。

正清寺を過ぎると現在の道は、下大谷（現在は荒地）を迂回して北上するが、本郷公民館の手前で谷へと下りる細い道（途中から未舗装・図 89）があり、これが熊野道と考えられる。迂回路の内側を谷地形に沿って進むと、小川を越えて（図 90）、谷の終点付近で再び現在の道に合流する。合流点から 150m ほど西進すると、濁川の流れが緩やかとなる見通しの良い場所に出る。現在は本多橋により濁川を渡るが、この付近が濁川の渡河地点であろう（図 91）。熊野道は濁川の渡河後、右に折れて川沿いを段丘上に向かう細い道（図 92）へと続く。150mほど上ると左に折れる道があり、こちらは新田の道標と八幡神社推定地につながる南北方向の道であると考えられる。左に折れずにさらに 50mほど上ると、国道 42 号に合流するが、国道の向かいにも同程度の幅の道が続き（図 93）、さらに 30mほど進むと三差路となる。右は、新田の道標と栃原茶屋にある道標からそれぞれ北上して一本化した道と合流し、松阪方面への道となる。左は、住宅の合間

図 89　下大谷へと下りる道

図 90　下大谷の小川を渡る道

図 91　濁川の渡河地点（推定）

図 92　濁川沿いを上る道

図 93　国道 42 号との合流地点

図 94　住宅の合間に残る熊野道

図 95　栃原茶屋方面に続く道

に幅約１ｍの道（途中から未舗装）が残っており（図 94）、約 30m進むと先述した松阪方面に北進する二つの経路が合流する地点に至る。熊野道はそのまま栃原茶屋の道標方向へ南進する（図 95）。新田村が開かれる元禄期よりも前の熊野道は、このような経路であったと推測する。

栃原から不動谷への道　栃原茶屋を過ぎて、熊野道は山間の谷に向けて西進する。現在は、国道 42 号・不動谷橋により容易に往来することができるが、神瀬と栃原の境界は宮川方向に突き出た山塊により遮断され、不動谷と呼ばれる深い谷が形成された交通の難所であった。道は、南側に走る JR 紀勢本線と並行して西進すると、右手側に不動谷へと下りる階段がある。本来は、南側に延びる谷筋に直結していたと考えられるが、現在は JR 紀勢本線の線路により遮断され、踏切もない。そのため現在では、熊野道の進路方向とは反対側の谷底

に下り、舗装された道と線路の下を通る水の流れる暗渠（図100）を抜け、石段を上って線路の反対側に出ることで再び熊野道に戻ることができる。地元では、この階段を下りてからはじまる未舗装区間を「バカ曲がり」と呼称しているが、本報告では「バカ曲がり」はこの先にある丘陵尾根を迂回するために地形に沿って大回りをする区間を指す呼称に限定し、この階段からはじまる区間を「不動谷の道」と呼称する。なお、この付近には「右色太／左くまの道」[22] と記された道標地蔵（図96）があったとされる。現在、色太道は明確ではないが、明治25（1892）年に「大日本帝国陸地測量部」が測図した地図[23] では、熊野道から北西方向に分岐する色太道と推測できる道が記されている（図102）。この分岐点周辺に道標地蔵が置かれていたと考えられる。

図96　道標地蔵

不動谷の道　暗渠を抜けて石段を上がると、急峻な谷あいに設けられた道（図97）が川沿いに続く。途中、斜面の崩落により道が失われ、簡易な橋が掛かる部分を抜けて300mほど南進すると、斜面が開け、右側に平坦地が形成されている箇所に出る。平坦地には、昼間だけの茶屋があったと言い伝えられており、現在も小型の木板による表示がある（図100）。平坦地を過ぎると、右側には尾根を越えるために整備された階段（図98）があり、現在はこの階段を使い尾根を越え、先にある「馬鹿曲橋」（図99）[24] で不動谷を渡る。一方で、平坦地右側の階段を上がらずに直進し、せり出した丘陵の地形に沿って尾根を500mほど迂回するルートがある。ここが、いわゆる「バカ曲がり」である。

図97　不動谷の道

図98　尾根を越える道

図99　馬鹿曲橋

しかし、平坦面にあったとされる茶屋も含め、「バカ曲がり」には、明確な根拠となる近世の文献資料や絵図は確認できていない。過去の報告[25] や自治体史[26] でも、不動谷が難所ゆえに、谷筋からの大回りを余儀なくされ「バカ曲がり」と呼ばれたとされている。資料を近代まで広げてみると、明治17（1884）年の「伊勢国多気郡神瀬村全図」[27] では、道路の表記が大回りをしておらず、現在と類似する尾根越えのルートが示されている。さらに、平坦面

図 100　不動谷の道（1/5,000）

図 101　「字一里塚」の記載と大回りしない道
「伊勢国多気郡神瀬村全図」（部分）

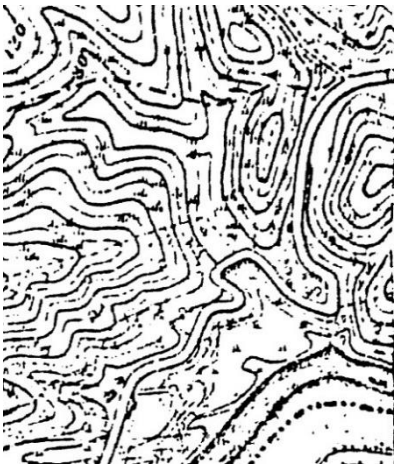


図 102　「バカ曲がり」が示された図面
「大日本帝国陸地測量部」五谷村（部分）

の 場所 には「字一里塚」との記載があり、平坦面を範囲で示す線もみられる（図 101）。一方で、明治 25（1892）年の大日本帝国陸地測量部の地図（図 102）[28] をみると、丘陵を迂回するように大きく曲がるいわゆる「バカ曲がり」が記されており、この両図が作成された明治 17～25（1884～1892）年の約８年の間に「バカ曲がり」が、荷車道等の用途として整備されたと考えられる。これらの状況から、この整備と前後して不動谷を越える橋も合わせて整備されたと考えられる。近世、少なくとも明治 17（1884）年以前の不動谷の道は、「バカ曲がり」の経路を通らず、尾根を越えた先で、北側の谷沿いを迂回して川を渡る経路をとっていた。現在の熊野道は、国道 42 号の不動谷橋の下を通り、獣害対策フェンスの扉を開閉するとアスファルト道に出る。

註

（1） 『大台町史』の記述にある「弘法井戸」があるとされる中谷には、柳原側でも現在は草木が生い茂り、降りて確認することはできなかった。ただし、谷底では小さな沢が宮川に向けて流出しており、当時も「弘法井戸」のような湧水等があったと考えることはできる。大台町『大台町史』通史、1996 年。
（2） 三重県埋蔵文化財センター『森ノ上遺跡発掘調査報告』1997 年。
（3） 神宮司庁編「皇太神宮年中行事」『神宮年中行事大成』前篇、増補大神宮叢書、吉川弘文館、2007 年。
（4） 前掲註（1）。
（5） 前掲註（1）。
（6） 前掲註（1）。
（7） 「三重県庁文書」県指定有形文化財、三重県蔵。
（8） 上野市古文献刊行会『定本三国地誌』、1987 年。
（9） 木村有周『伊勢参宮・西国巡拝道中記』（矢島町史編纂委員会『矢島町史続』下巻、1983 年）。
（10） 辻武左衛門『西国順礼日記』（本宮町史編さん委員会『本宮町史』近世資料編、1997 年）。
（11） 沙門某『新増補細見指南車』国立国会図書館蔵、1829 年。
（12） 俣野通尚ほか『西国順礼道中細見大全』早稲田大学図書館蔵、1840 年。
（13） 田中智彦「西国巡礼の始点と終点」『紀要』16 神戸大学文学部、1989 年。同氏『聖地を巡る人と道』に再掲、　田中智彦論文集刊行会、2004 年。
（14） 大台町教育委員会『寺院および史跡』郷土調査報告第１集、1975 年。
（15） 前掲註（1）。
（16） 前掲註（1）。
（17） 前掲註（7）。
（18） 前掲註（1）。
（19） 前掲註（1）。
（20） 三重県教育委員会『三重県石造物調査報告Ⅱ～南伊勢地域～』2013 年。
（21） 前掲註（1）。
（22） 現在は大台町教育委員会が保管している。
（23） 大日本帝国陸地測量部「五谷村」三重県伊勢国多気郡、1894 年。
（24） いつから「バカ曲がり」と呼ばれたかは明確ではない。なお、暗渠へと下りる手前の看板では「バカ曲がり」とあるが、橋は「馬鹿曲橋」である。橋の名称以外は、町史にならって「バカ曲がり」と呼称する。前掲註（1）。
（25） 三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ―熊野街道―』1981 年。
（26） 前掲註（1）。
（27） 前掲註（7）。
（28） 前掲註（23）。

６　神瀬から上楠

○　神瀬

不動谷から神瀬への道　舗装された坂道を約 400m上ると国道 42 号と合流し、さらに約 200m西進して神瀬の三差路を北西に入る。右側には神瀬集会所、左側に神照寺の墓地と庚申・天王祠がある（図 103）。この先で舗装された道は、山間に延びる上段の道と旧熊野街道の下段の道の２段に分かれ、分岐点には「左くまの道」と記された神瀬の道標がある（図 107a）。この道標は、昔は民家の石垣の中に組み込まれていた[1]。熊野街道を南西に進むと、明治 40（1907）年にレンガ積みで建築された「眼鏡橋（神瀬橋）」があり（図 104）、後述する「猿木坂」の前に出る。

河内谷の道　熊野道は、神瀬の道標の向かい側から縁石に沿って約 30m河内谷（かわちだに）に向けて下りていく未舗装の道の先に続いている（図 105）。地元では、未舗装の河内谷を越えて、先にある個人宅までの区間を「猿木坂」と呼んでいるが、本報告では河内谷の道とする。

竹林の中を約 200m進むと河内谷川に至り、川肌に露出した岩盤や足場を伝って川を渡る。川を渡った先で、川上をみれば「眼鏡橋（神瀬橋）」を視界に入れることができる（図 104）。さらに約 100m坂道（図 106）を南進すると、アスファルト舗装された熊野街道と合流するが、すぐ南側にある個人宅裏手に延びる急な坂道が本来の熊野道である。河内谷川から舗装された道を斜めに横断し、個人宅裏まで約 100mの坂道が、いわゆる「猿木坂」の語源となった坂道（図 107b）である[2]。なお、舗装された道から先の「猿木坂」は、個人宅周辺の高台から、低地の河内谷川に向けて排水のための側溝が中央に設置され、さらに獣害対策フェンスによって通行できなくなっている。

図 103　庚申・天王祠

図 104　眼鏡橋（神瀬橋）と河内谷川

図 105　河内谷へと下りる道

図 106　河内谷から上る道

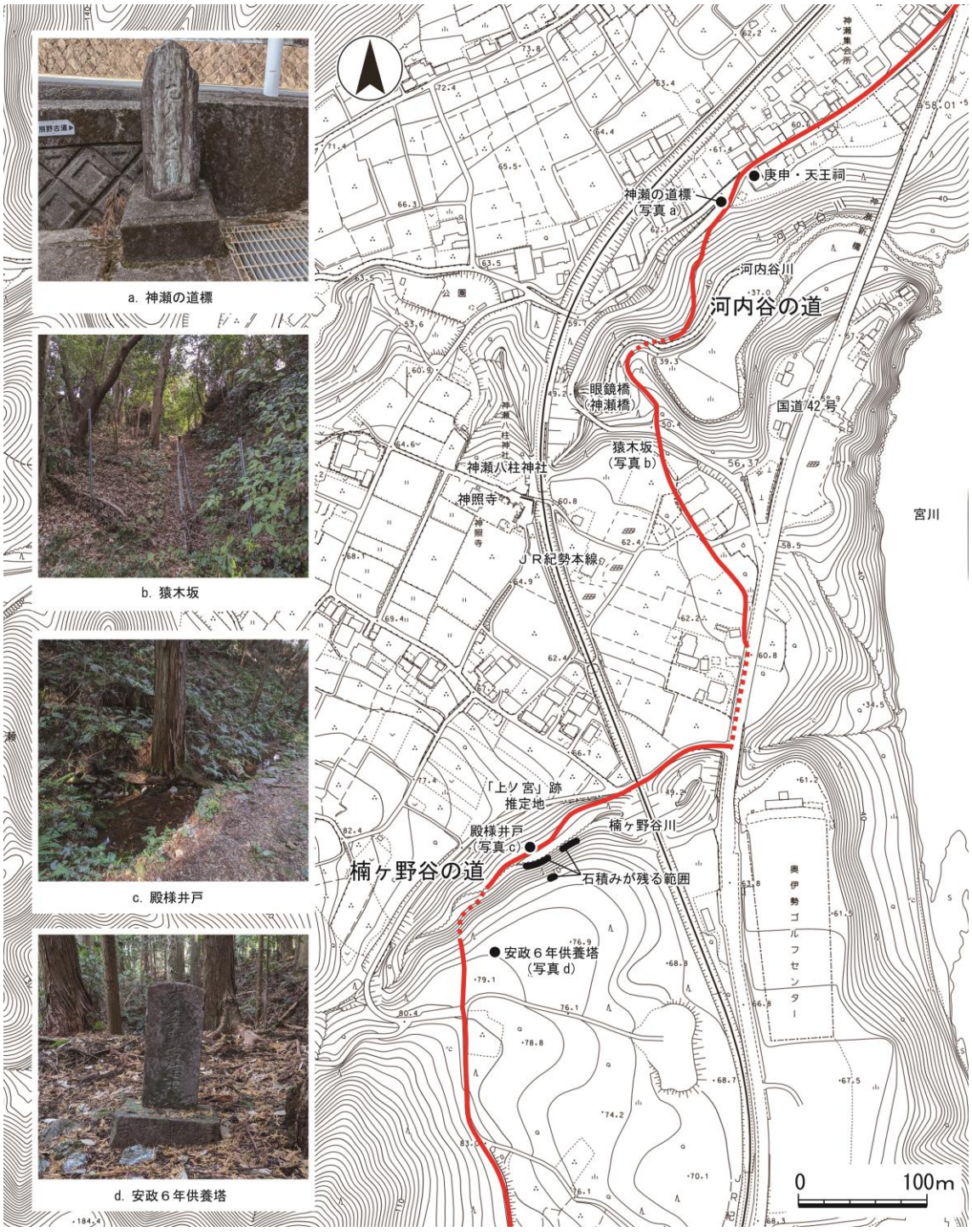


図 107　神瀬の道（1/5,000）

河内谷から楠ヶ野谷への道　現在は通れない「猿木坂」（図 107b）を右手に舗装された道を南進すると、国道 42 号との合流地点に差し掛かる。国道の手前を西に折れて、個人宅前に進むと「猿木坂」を上ってきた熊野道に戻る。国道脇に残る細い道を南進すると、再び国道に合流する。この周囲では、熊野道の正確な場所が不明瞭であるが、国道を約 100m南進すると、右手に茶畑に沿って進む道があり、JR 紀勢本線の神瀬第４踏切を渡ると、すぐ左手

に楠ヶ野谷へと下りる未舗装の道への入口がある。

楠ヶ野谷の道　フェンスを開閉し、下り坂を約 100 m西進する（図 109）と、右側に「殿様井戸」がある（図 107c）。「殿様井戸」の由来は諸説あり、江戸時代の「殿様」が街道を往復する際に、井戸の水を美味であると賞賛したこと [3] や、必ず井戸で駐屯し休憩をとったこと [4] などが記載されている。しかし明治 17（1884）年の「伊勢国多気郡神瀬村全図」[5] をみると、「殿様井戸」の位置に隣接する字上ノ宮には鳥居の記号が記載されており（図 108）、従来は神社に付随する井戸等であった可能性も考えられる。

現在、井戸とされる範囲は、３～４段の石組みが長さ約 2.6m×幅約 1.9mの不整楕円形に囲まれている。石組みの範囲内の水位は 20～30 ㎝ほどであるが、石組みから地形的に低い東側には約５m石積み水路（図 110）が続き、最終的には熊野道を横断して、楠ヶ野谷川に流入していると考えられる。「殿様井戸」を過ぎて約 50m進むと、楠ヶ野谷川にあたる。現在は水量が少ないため、階段で川岸を降りて対岸に渡ることができるが、従来は井戸の付近に小橋があったとされる [6]。北側の川岸には、護岸に川原石の高さ約 1.5mの石積みが約２m続いており、平坦面を形成している対岸との間は、部分的にやや川幅が狭くなっている。おそらくはこの地点の周辺に小橋が掛けられていた時期もあったと考えられるが、対岸の護岸の流出が著しく、確実な位置の特定は困難である。楠ヶ野谷川を渡り、杉林の上り坂を南進すると左側のやや高台に「（正面）本空歸寂信士（裏面）安政六未年九月二十四日」、台座に「海／野／新／吉」と刻まれた石塔がある（図 107d）。地元では巡礼供養塔と認識されている。さらに約 100m上り坂（図 111）を南進すると、舗装された道に出る。

図 108　殿様井戸に隣接する鳥居の記号
「伊勢国多気郡神瀬村全図」（部分）

図 109　楠ヶ野谷に下りる道

図 110　殿様井戸から延びる流路

図 111　楠ヶ野谷から上る道

○　下楠・上楠

下楠の道　宮川は、下楠で大きく北に向けて蛇行するが、その流路に沿って山塊が南東にせり出して

いる。熊野道は下楠に向けて山塊に形成された谷部を抜け、南から緩やかに西に進路を変える。下楠の集落に入る前に、山裾に沿って西進する道と国道に向けて南進する道に分岐する。熊野道は南に約 50m進み、JR 紀勢線の浅間踏切を渡る。さらに約 150m西進すると国道と交差するが、国道には合流せず下楠の集落へと入る。

図 112　下楠の道標

集落に入り約 150m西進すると、下楠の集会所があり、「(頂部) 東／西／南／北　(西面) すぐ山田松坂 (南面) 天保十(1839)己亥年西村正久立之 (東面) 左古里藤□／神前浦 (北面) くまの」[7] と記された下楠の道標がある (図 112)。ここにある「神前浦(かみさきうら)」は、宮川を渡り大紀町打見に入り、さらに南下して藤坂峠を越えた先にある神前浦 (南伊勢町) を指すため、道標の本来の位置は、旧川添郵便局の手前にある熊野道から宮川の渡船場 (図 113) に向けて延びる道との分岐点にあったと考えられる (図 114)。

図 113　七保大橋からみた渡船場周辺

熊野道は、集会所を過ぎると南にゆるやかに曲がり、旧旅館として現存する「阿波屋」(図 115) に至る。昔は「阿波屋」の道向かいには、「いろは屋」や「小松屋」等の複数の宿場が建ち並んでおり、宮川が降雨等により増水した際の渡船場利用者の待機場所でもあったと考えられ

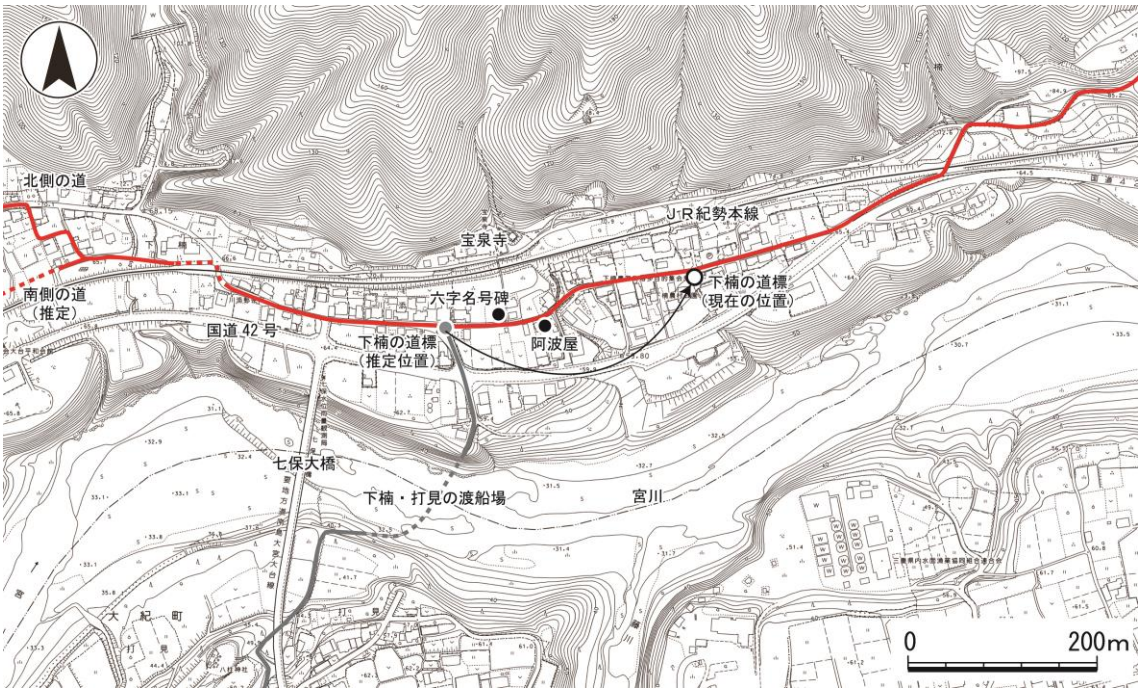


図 114　下楠の道 (1/8,000)

図 115　阿波屋

図 116　六字名号碑と常夜燈

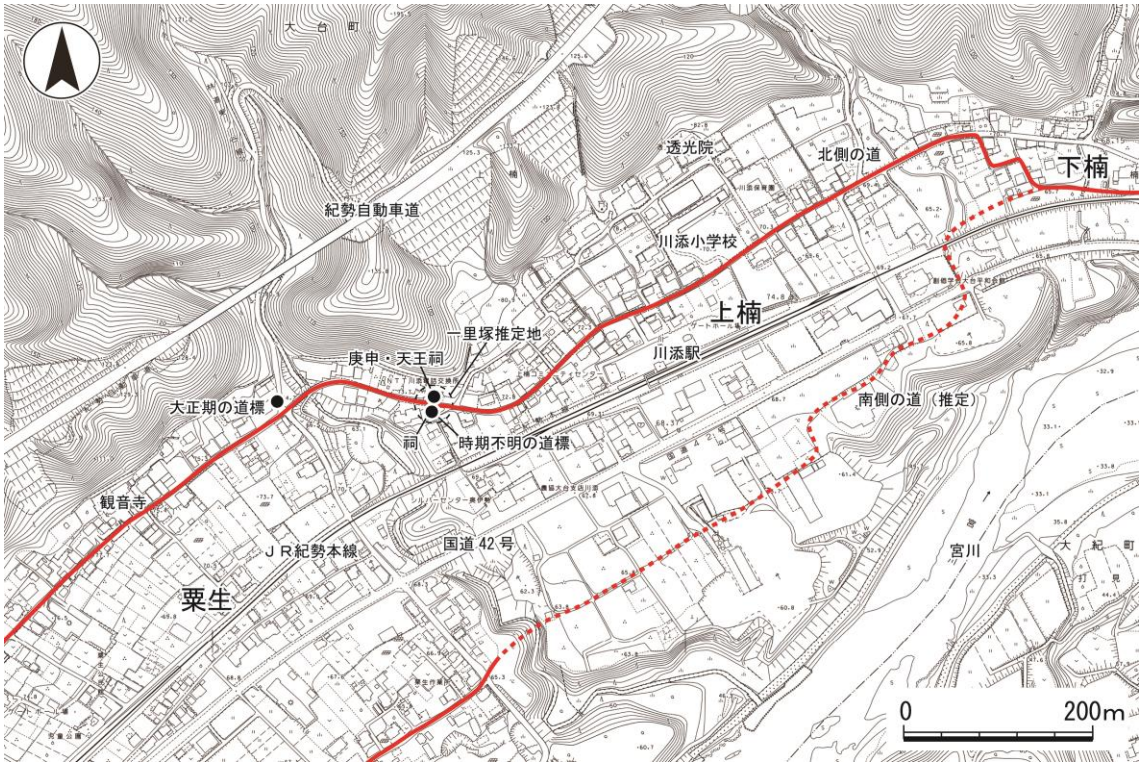


図 117　上楠の道（1/8,000）

ている[8]。「阿波屋」を過ぎてすぐの右手には山裾にある宝泉寺に続く参道があり、参道の入り口には天明３（1783）年銘の常夜燈と「（正面）南無阿弥陀佛（裏面）弘化三丙午（1846）歳／九月建立／植誉上人代／立石山／宝泉寺」と記された六字名号碑がある（図 116）。旧川添郵便局を右手に約 300m 西進すると、北に折れて JR 紀勢本線の下楠踏切を渡るが、従来の熊野道は直線的に西進したと推測できる。

図 118　字界にある庚申・天王祠

踏切から約 150m 進むと、江戸期の熊野道である北側の道と江戸期よりも前の熊野道である南側の道に分岐したと考えられている[9]。南側の道は、この下楠から上楠に至るまで、開発等によりほとんど残存しておらず、正確な経路

は不明である。一方、北側の道は、集落内を抜ける舗装された道として良好に残存している。分岐点からは、粟生と上楠の字界となる谷と小川を越えるため道は山裾に向けて北上し、現在の道よりも谷に沿って緩やかに湾曲していたと推測する。

上楠の道　谷を越えて約 200m西進すると、右側に川添小学校があるが、その裏山に無量山透光院光徳寺がある。道は、北側から張り出した丘陵を避けるように緩やかに南側に湾曲し、約 400m西進すると北側に石積みがあり、その上に庚申・天王祠がある（図 118）。この地点では、南側にも木々で囲まれた石の区画があり、その中には「右くまのみち」と刻まれた時期不明の道標（図 119）と祠がある。道をさらに約 150m 西進すると粟生との字界である東ノ谷がある。天保４（1833）年の『勢陽五鈴遺響』では、「本邑（上楠）ト粟生ノ間ニ一里塚アリ」と記載がある[10]。上楠側での記載を考慮すると、東ノ谷より上楠側に一里塚があった可能性が高く、特に祠が集中するこの地点が一里塚の候補地として妥当であると考えられる[11]。

図 119　字界にある時期不明の道標

註

（1）　三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ―熊野街道―』1981 年。
（2）　大台町『大台町史』通史、1996 年。
（3）　前掲註（2）。
（4）　現地の説明看板に記載。出典は不明。
（5）　「三重県庁文書」県指定有形文化財、三重県蔵。
（6）　前掲註（2）。
（7）　現地の道標は下半部がかなり埋没しており、すべての文字を読むことはできなかったため、下記資料を参考とした。
前掲註（2）。三重県教育委員会『三重県石造物調査報告Ⅱ～南伊勢地域～』2013 年。
（8）　前掲註（2）。
（9）　前掲註（2）。
（10）　安岡親毅著、倉田正邦校訂『勢陽五鈴遺響』第５巻、三重県郷土資料刊行会、1978 年。
（11）　この上楠の一里塚推定地から、先述した不動谷の道にあったとされる一里塚までの熊野道の距離は、目安ではあるものの約４㎞であった。

７　粟生から下三瀬

○粟生・高奈

粟生から奈良井の道　東ノ谷を西に渡ると粟生（あお）に入る。台地の中央を国道 42 号が走り、その南北双方に併走して熊野道がある（図 122）。粟生北部から高奈北部（奈良井地区[1]）を通る北側の道が江戸期の熊野道、粟生南部から高奈南部（高瀬地区）を通る南側の道はそれ以前の熊野道とされる[2]。南側の道は「高瀬道」と呼ばれている[3]ので、便宜上、北側道を「奈良井道」とする。

奈良井道は、観音寺・八柱神社といった粟生集落内の主要宗教施設が集中する。観音寺北側の丘陵尾根上には粟生城跡があった。奈良井道は、大半が車の通行可能なアスファルト道となっている。粟生の南西端に八柱神社があり、熊野道を挟んでその南には「火伏せの神」が祀られている。三谷川の西が奈良井地区で、現在は三谷橋で通じている。

高奈の奈良井地区では、熊野道はＪＲ紀勢本線と併走する。江戸末期には熊野道の北側に地蔵堂があった（図 122）。坂瀬川を渡り、後述の高瀬道と合流する。

【粟生城跡】近畿自動車道の建設工事に伴い事前発掘調査され、現在は滅失。調査の結果、城の規模は東西約 48m、南北約 40ｍで、帯曲輪も含め６つの曲輪で構成。尾根奥側を２条の堀切で区画し、全ての曲輪は削り出しで造作されていた。曲輪内からは 14 世紀後葉から 15 世紀中葉の土器類が出土しており、城の機能時期を示すと考えられる[4]。

図 120　粟生の道（高瀬道）

奈良井道は八柱神社の手前約 200ｍで東に折れ、約 60m進んでから南に折れる。八柱神社前を過ぎると三谷川の深い峡谷に至るため、道は山側へ迂回していたと見られるが、現状ではわからない。高瀬道は大台町役場川添出張所の北を通って南西方向に進む。途中、圃場整備で道は消滅しているが、三谷川が形成した段丘斜面部から渡河地点へと至る道は良好に残る（図 120）。

粟生から高瀬の道　現在の大台町高奈は、江戸期の高瀬村と奈良井村が合併したものである。先述の奈良井道は旧奈良井村を、高瀬道は旧高瀬村を通る。二つの道は坂瀬川を渡る樋口橋付近で合流し、一本の道となり西へ向かう。樋口橋西の坂瀬川南岸沿いには、舗装前の土道が 100ｍほど残っている。

図 121　樋口橋付近の道標地蔵

旧高瀬村を通る高瀬道は、三谷川渡河の後、称名院（高瀬

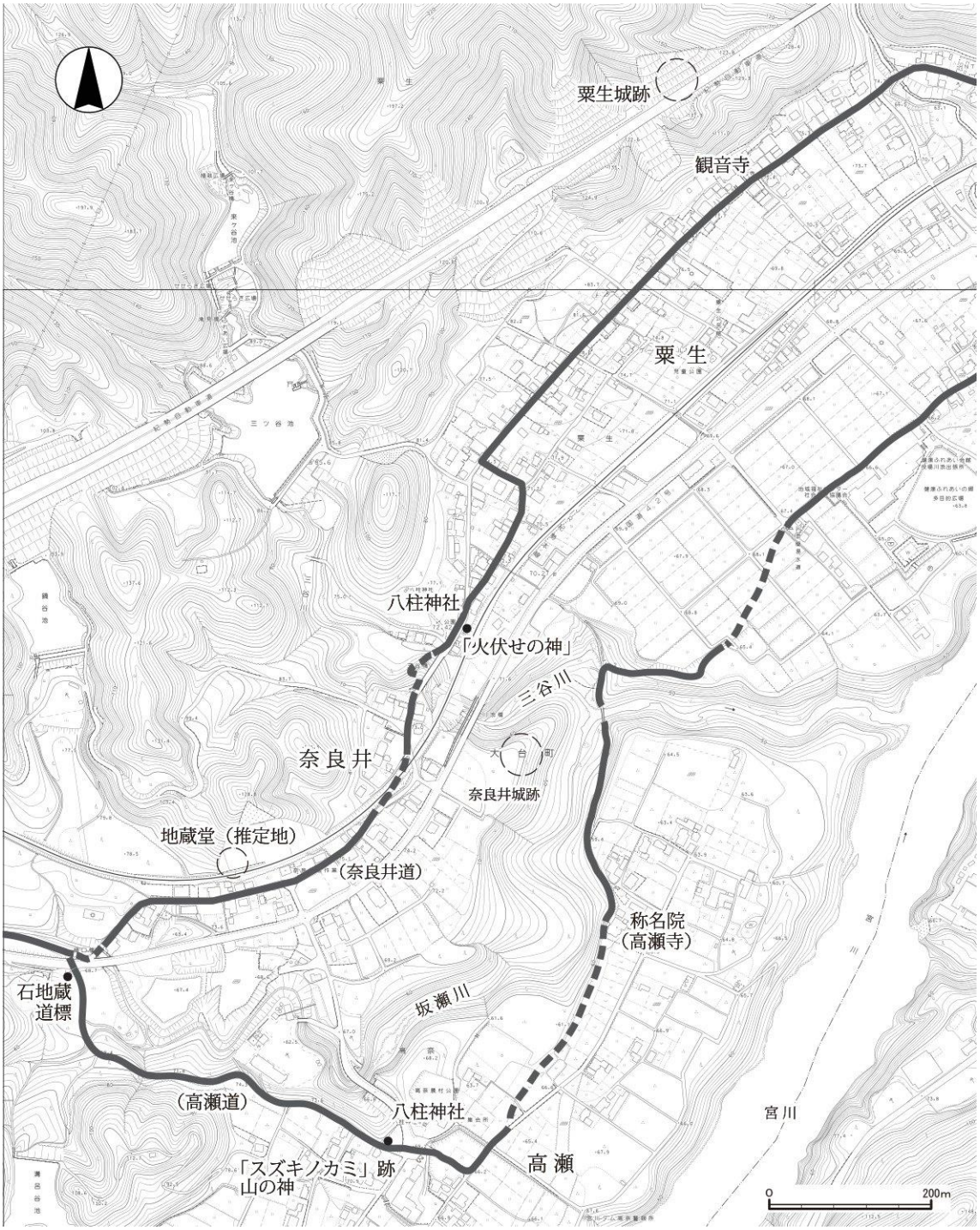


図 122　粟生から高奈の道(1/8,000)

寺）の北側（裏側）を通っていく。三谷川から称名院にかけては土道で、良好に残っている。高瀬道は称名院北側から南へ進むことが「伊勢国多気郡高奈村全図」（明治 19(1886)年）[5]から読み取れるが、現在は荒れており、明確ではない。八柱神社を過ぎると道は西へと向き、かつてこの地の住人が祀っていた「スズキノカミ」跡と山の神祠の前を通り、前出の樋口橋の付近で奈良井道と合流する。合流地点には、造立年代不明（江戸後期か）の南無阿弥陀仏

名号碑と、「右高瀬道／左山田松阪道」と刻まれた石造地蔵菩薩立像の道標がある（図 121）。記載の状況から、道標は、西から東へと向かう旅人用に建てられたもので、「山田松阪道」が奈良井道にあたる。像の形状から、明治期のものと考えられる。

○下三瀬

坂瀬の道から定峠へ　奈良井道と高瀬道の合流後、熊野道は高奈西部から下三瀬の坂瀬地区へと至る。ここは国道 42 号との重複部分が多いが、畦道等として部分的に残存している箇所がある。平地が途切れたあたりで、国道 42 号・ＪＲ紀勢本線・紀勢自動車道が寄り集まる。このあたりから坂瀬地区に入るが、ここを流れる坂瀬川は高奈方面（東）へ向かうので、下三瀬の本集落とは水系が異なる。国道 42 号が紀勢自動車道の下をくぐったあたりの右手に、石龕内の石造地蔵菩薩坐像（天保９(1838)年銘）と、「弁慶岩」と呼ばれる自然石塊がある。像台座銘と石龕開口方向が合わないため、石龕と石仏は原位置ではないと見られる。熊野道は石龕と「弁慶岩」との間を通ってＪＲ紀勢本線と重なり、その北側へと続くとみられるが、大きく改変されているため旧状は窺えない（図 125）。

熊野道は、ＪＲ紀勢本線の北側丘陵沿いを西に向かうと考えられるが、これもまた不明確である。その途中の北面に、岩盤を小さく削って龕を形成し、舟形光背を伴う石造地蔵菩薩立像（天保 11(1840)年銘）が置かれている。

さて、この付近を描いた絵図として、弘化４(1847)年作成の「坂瀬谷山論絵図」[(6)] がある（図 123）。この絵図には「一里塚」の表記がある。現在一里塚は残っていないが、絵図からは南の「樋口谷」と「兵衛谷」からの流路合流地点で、北には「弥次郎谷」がある。この情報と、「伊勢国多気郡下三瀬村全図」（明治 19(1886)年）[(7)] 記載の字切（図 124）、及び現況の地形図とを整合させると、一里塚は現在天保 11(1840)年銘の石造地蔵菩薩立像が置かれている付近だと考えることができる（図 125）。なお、「伊勢国多気郡下三瀬村全図」では、

図 123　坂瀬谷山論絵図（部分、慶雲寺蔵）

その位置に小さく囲われた山林草生地の表記がある（図 124）。おそらくこの位置が、かつて一里塚が所在していた場所と考えられる。

坂瀬地区から西へ登ってきた熊野道は、「字定峠」付近で最高所となり、そこから下三瀬の本集落方面へと降っていく（図 125）。「字定峠」は現在、石材店が存在する付近である[8]。

図 124　伊勢国多気郡下三瀬村全図（部分、三重県蔵）

【坂瀬の石造物】　坂瀬地区にある２基の石造物は、熊野道沿いに見られるもののなかでも特徴的である。

・天保９(1838)年銘石造地蔵菩薩坐像台座銘（図 126・127）

（正面）右、これより山田内宮まて九里／三界萬霊／左、従是西国一番那智山廿八里

（右面）願主謹造之

（左面）村中安全

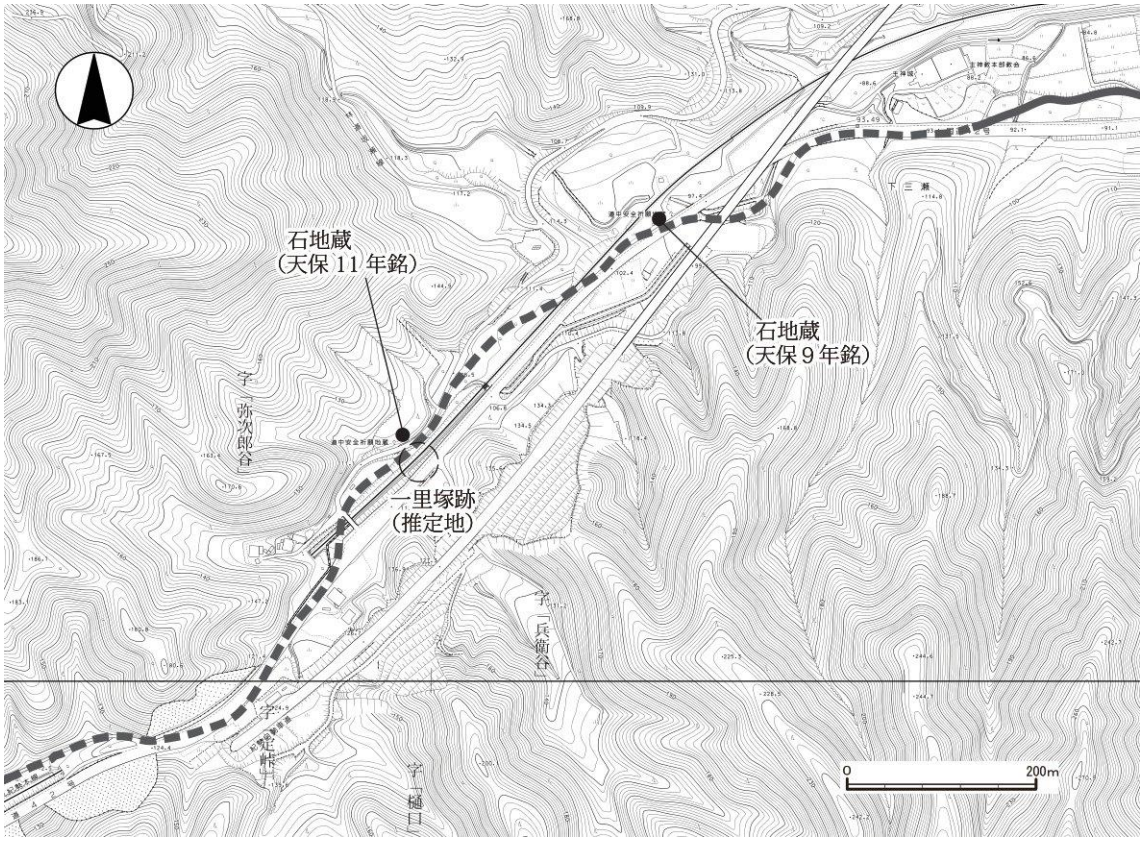


図 125　定峠付近の道(1/8,000)

図 126　天保９年銘地蔵菩薩坐像

図 127　天保９年銘地蔵菩薩坐像台座

図 128　天保 11 年銘地蔵菩薩立像

（裏面）天保第九季龍〔以下不明〕

・天保 11(1840)年銘石造地蔵菩薩立像銘（図 128）

（像右）道中安全

（像左）衆難悉除

（右側面）天保十一〈庚子〉天九月造□

この２基は、比較的近い場所・近い時期（両像の時間差は２年）に、いずれも道行く旅人に対し造立された珍しい事例である。天保期頃の坂瀬地区が、西国巡礼・伊勢参宮双方の旅人にとって重要な所であったことを物語っている。

定峠から下三瀬西部の道　定峠から西へは国道 42 号と重複して進む。途中から左へ寄り、ＪＲ紀勢本線のトンネル付近から山裾を進む。道は拡幅・舗装されている。ＪＲ線路の下をくぐり、下三瀬の集落へと至る（図 130）。道の北側に石垣が組まれた台地がある（図 129）。かつてここに観音堂があり、西国三十三所札所本尊の観音に則した全高 20 ㎝程度の木造観音像が祀られていた。堂は昭和 30 年代後半に取り壊され、像の一部は盗難の憂き目に遭ったが、大半は慶雲寺境内の観音堂に移されている（図 130）。

観音堂からは、南に向かう道のほか、八柱神社前を通り南に向かう、幅１ｍ程度の未舗装道がある。地元では後者がかつての熊野道とされる[9]が、明確ではない。国道 42 号の下に造られたトンネルを抜けて国道の南側へ至り、水路を渡って西へ向かう。かつて「角金」という旅館があった敷地の北東隅に文化７(1810)年銘の道標が建っている（図 131・132）。熊野道は道標の手前を左へ折れ、宮川の段丘崖へと降っていく。

図 129　観音堂跡（下三瀬）

図 130　慶雲寺観音堂の三十三所観音

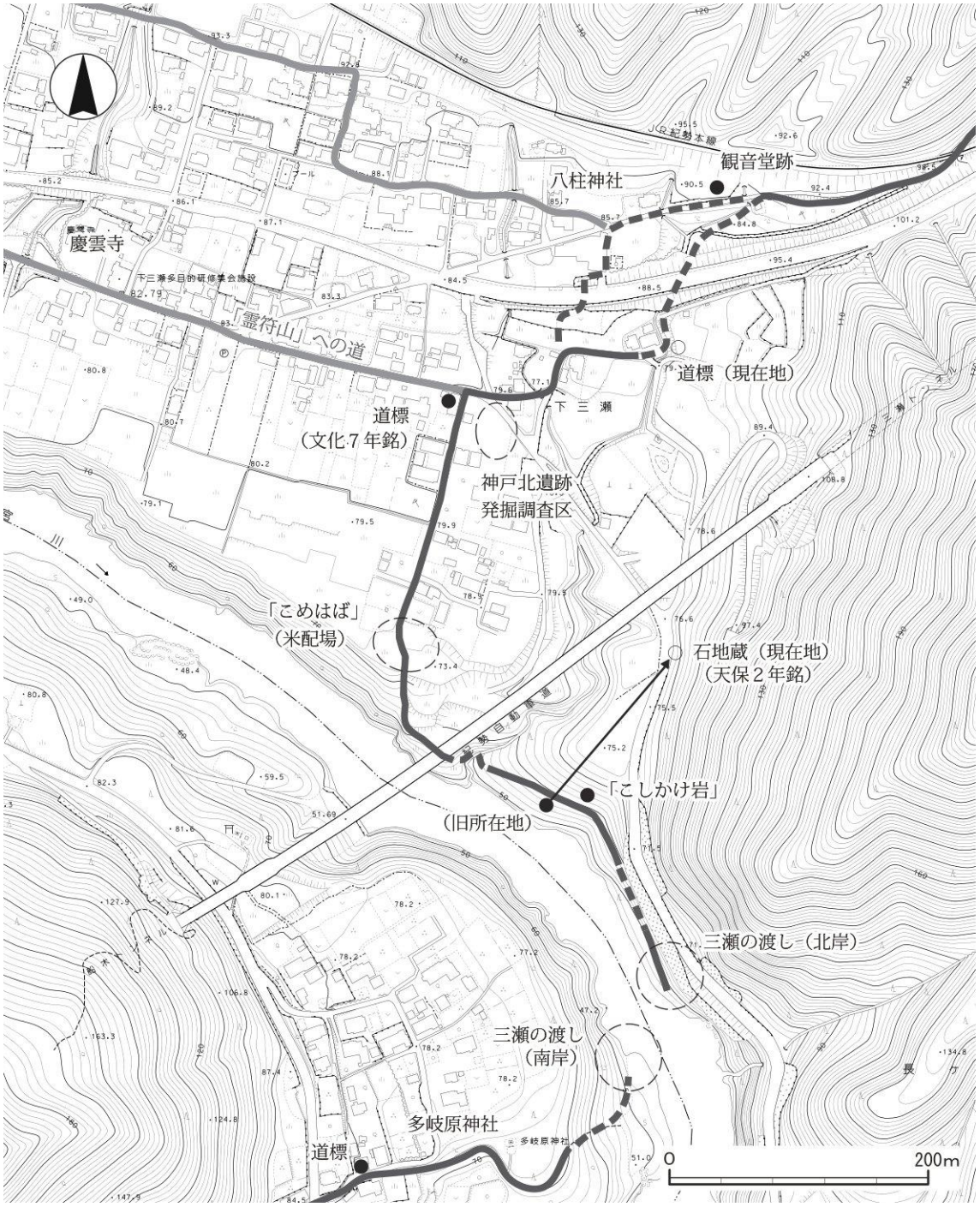


図 131　下三瀬の道(1/8,000)

なお、観音道跡から国道 42 号をはさんで 100mほど南の人家脇にも道標が保管されていた。現在は近隣の熊野道に移設されている（図 131）が、当初の位置かどうかは不明。自然石製で、「みぎくまのみち／ひだり高瀬／やまみち」と刻まれている。「ひだり高瀬やまみち」は、定峠を越える熊野道と考えられるので、現在の位置でも違和感は無い。だだ、道標は道を迷いがちな交差点の脇に建てられることが多いことを考えると、現在の八柱神社付近に建てられていた可能性も考えられる。

県道高奈上三瀬線の道路改良事業に伴い、旧角金の東側で発掘調査が行われた（神戸北遺跡）。15 世紀後半頃と考えられる掘立柱建物が 1 棟確認されている[10]。

【旧角金旅館隅の道標】　この道標（図 132）は花崗岩製で、碑面の現在高 141 ㎝、東西面幅 23 ㎝、南北面幅 18 ㎝。碑面には次の銘がある。

（東面）すぐ栗谷連（れ）いふ神道＜是より／三里廿四丁／左ゥくまの＞
（北面）（右指さし）よしの者（は）せかうや京大坂道
（西面）文化七〈庚午〉年二月建焉〈施主山田／舩江町井川四郎兵衛／河﨑町辻勘八〉
（南面）右いせミち是より宮川迄七里

三瀬の渡しを利用し、三瀬坂峠道・滝原を経て進む熊野道は、この道標を見て左へ折れ、宮川岸へと進む。しかし、定峠を越えてきた旅人が目にするのは道標の東面で、そこには「まっすぐ向かうと霊符（れいふ）神道で、3 里 24 丁進んだ先を左に向かえば熊野へ行ける」と刻まれている。このような記載がなされるのは、道標を建てた者（施主）が、旅人を栗谷にある「霊符神」へと誘導したかったからにほかならない。

図 132　旧角金旅館隅の道標

「栗谷の霊符神」とは、霊符山大陽寺のことである。この寺は北辰霊符妙見菩薩を本尊に、室町期には北畠氏の庇護を受けていたという。現在の本堂（図 133）は文化 3（1806）年から 17 年間かけて建立したという（以上、寺の解説板による）。本堂と道標の建立・設置時期はほぼ符合している。

図 133　霊符山大陽寺

旧角金旅館隅の道標から 3 里 24 丁（約 14.5 ㎞）進んだ先は大台町天ヶ瀬（あまがせ）・明豆（みょうず）の大字境付近で、宮川上流へ向かう道と栗谷霊符山へと向かう「栗谷道」（いずれも国道 422 号）の分岐にあたる。国道 422 号は、大台町桧原と北牟婁郡紀北町十須の間にある池坂峠が未開通だが、現在も歩行は可能である。つまり旧角金旅館隅の道標は、霊符神を参拝しても、「もう一つの熊野道」（池坂峠越え道）で熊野に向かうことが可能であることを旅人に示しているのである。

なお、大陽寺境内には石造如意輪観音坐像の供養塔があり（図 134）、台座には次の銘がある。

（正面）右くまの道／西国供養／誠譽上人
（右面）願主　根引長吉／喜右衛門／開霊笑月信士／十蔵／弥吉

図 134　大陽寺の供養塔

（左面）又右衛門／久蔵／お加留／おその／文化十三（1816）年三月吉日

この供養塔の記銘は、西国巡礼者の供養とともに、この塔が「もうひとつの熊野道」の道標であったことを示している。もとは栗谷道と池坂峠越え道の分岐点あたりに建てられており、大陽寺境内へ移設されたと考えられる。栗谷霊符神を参拝の後、西国巡礼へと向かう旅人が実際にいたことを示す重要な資料である。

旧角金旅館隅道標、大陽寺本堂造立、大陽寺供養塔の建立等時期は近接する。西国巡礼者を大陽寺へと誘客した後に熊野へと向かわせる装置として、それぞれが有機的に機能したと考えられる。

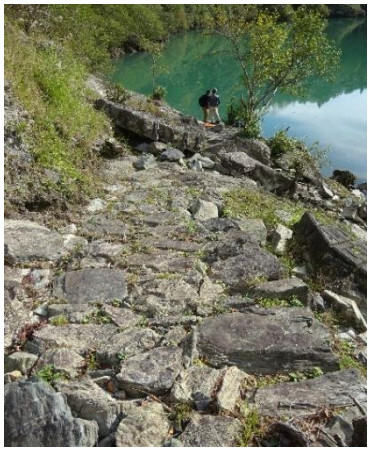


図 135　三瀬の渡し付近の石畳

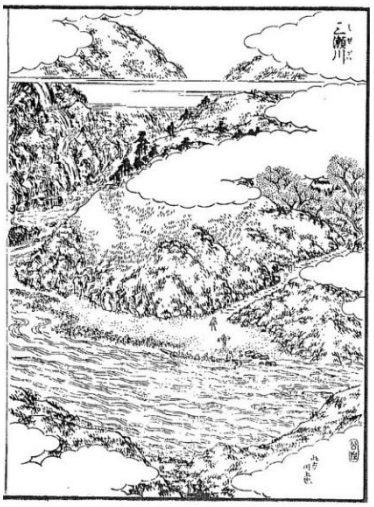


図 136　三瀬川（『西国三十三所名所図絵』）

三瀬の渡し　旧角金旅館隅の道標から左に折れ、宮川の北岸へと向かう（図 131）。途中に「こめはば」と呼ばれる場所がある。「米配場」の転訛とされ、江戸期にここで運ばれてきた米を配分したという。川岸近くでは、幅２ｍほどの未舗装道となるが、川に近づくほど不明瞭となる。そこから川沿いに下流へと進み、「こしかけ岩」と呼ばれる岩塊の下を通り、さらに進む。県道高奈上三瀬線の盛土が川岸と接するあたりに熊野道が存在していたようだ。現在この部分は、地元の有志によって敷設された石畳となっている。

船着き場に至る道のうち、手前の４ｍほどの範囲には往時の石畳が残っている（図 135）。石畳部分の道幅は約 2.4ｍである。石畳が途切れる先は結晶片岩の露頭で、岩盤を削り込んだ平坦面が数段造成されている。船着き場として整備した形跡と考えられる。旅人はここで乗船し対岸に向かう。『西国三十三所名所図会』（嘉永６(1853)年）には下三瀬側から対岸を見た挿絵がある（図 136）。

県道高奈上三瀬線の道路脇に、「明神さん」と呼ばれる天保２(1831)年銘の石造地蔵菩薩立像がある。これは、もとは「こしかけ岩」付近の斜面に祀られていたという（図 131）。

註

（１）本節・次節で使う「地区」は大字以下・小字以上の区域で、地元で呼称されている通称に基づく。
（２）大台町編『大台町史』通史、2006 年。
（３）三重県教育委員会『熊野街道』歴史の道調査報告、1981 年。
（４）三重県埋蔵文化財センター『粟生城跡』2002 年。
（５）「三重県庁文書」（三重県蔵、県指定有形文化財）。
（６）慶雲寺蔵。掲載にあたっては慶雲寺の許可を得た。なお、絵図は註(2)文献にも掲載されている。
（７）前掲註(5)資料。
（８）前掲註(3)文献等ではこの峠を「坂瀬峠」とするが、ここでは地元の呼称と小字にある名称とする。
（９）地元での聞き取りによる。
(10) 三重県埋蔵文化財センター『神戸北遺跡発掘調査報告』2016 年。

８　三瀬川から阿曽

○三瀬川

三瀬川の道　三瀬川は、文禄検地帳には「多気郡三瀬谷ノ内三瀬川」と記され[1]、宮川を挟んで川向かいの三瀬地区とともに多気郡であったが、江戸前期の延宝年間に度会郡とされている[2]。

大台町下三瀬から大紀町三瀬川の間は宮川が進路を遮る。この間は「三瀬の渡し」と呼ばれる渡船場があった（図 138）。下三瀬側には岩盤を整形した施設があったが、三瀬川側は明確ではない。三瀬川側の多岐原神社前には砂礫が入江状を呈した場所がある（図 137）。図 138 等では川岸に着岸している様子が描かれるが、船の喫水を考えると、入江や岩盤脇が利用されたと見られる。

図 137　三瀬の渡し（三瀬川側）

図 138　三瀬の渡し（『文政十二年摂末社巡回記』神宮文庫蔵）
中央に宮川、左端に多岐原神社が描かれる

着岸地点の砂を踏みながら、道は多岐原神社境内の南縁を通り、三瀬川集落へと続く。神社前付近の道幅は約３ｍ、神社前付近の約 12ｍの範囲はアスファルト舗装されておらず、往時の面影を残している。

多岐原神社は延喜式内社で、現在は神宮が管理している。「真奈胡社」とも呼ばれる。現在の社殿は神明造。『倭姫命世紀』[3] に記された倭姫命の巡行伝承に登場する「真奈胡の御瀬」に比定されている。境内には享保 17(1732)年銘の燈籠２基のほか、享保９(1724)年銘の結界石がある。

多岐原神社から三瀬川集落方面へ進むと、右手に「(左指さし) 左くまの道／みち」と刻まれた道標が見える。左指さしのレリーフが刻まれており、江戸末期頃のものと考えられる。道標のもとの位置は、現状と異なる可能性が指摘されている。さらに進むと、かつて両口屋・山城屋・紀ノ国屋といった旅籠が並んでいたという[4]。

熊野道は谷を迂回するようにめぐる。途中に妙楽寺へと至る石段の参道が現れる。それを過ぎ、県道打見大台線に合流した後、右手の山へと道は向かう。ここから三瀬坂峠道となる。

なお、三瀬川の西隣に船木という集落がある。ここは江戸期の熊野道沿いからは外れていたが、明治期に船木橋が架けられたことにより、熊野方面の交通は、三瀬の渡しと三瀬坂峠道経由の道から船木橋を渡る道へと変化した。

【妙楽寺】現在は曹洞宗寺院。寺伝では文治３(1187)年の草創とする。現在の本堂は桟瓦葺で入母屋造。躯体は嘉永元(1848)年の建立[5]。境内には、舟形光背に聖観音菩薩立像を刻んだ文化元(1804)年銘の廻国供養塔、同じく舟形光背に地蔵菩薩立像を刻んだ文化 11(1814)年銘の三界万霊塔のほか、17 世紀中葉以降の板碑形石塔・櫛形墓標・無縫塔などがある。

【船木橋】明治前期の架橋当初は木造だったが、何度か流され、明治 38(1905)年に煉瓦積橋脚を造成し、その上に木造橋が組まれた。現在の船木橋は鉄橋で、昭和８(1933)年に起工、同９年３月に竣工しており、明治期の煉瓦積橋脚部はそのまま利用されている[6]。現在は国登録有形文化財（建造物）となっている。

三瀬坂峠道　妙楽寺前から県道にしばらく合流し、右に折れて山道方面に進む。しばらく行くと「坂の下庚申」と呼ばれる庚申祠がある。石造青面金剛立像で、その台座には宝永２(1705)年の銘がある。この付近の道幅は約５ｍで、三瀬川簡易水道浄水場の付近までアスファルト舗装されている。その先は土道となるが、浄水場の先約 160ｍの間も車道用に拡幅されており、その先が徒歩による山道となる。

三瀬坂峠道（図 139）は、結晶片岩を基盤とする丘陵部を通っており、峠の標高は約 273ｍである。登り口の三瀬川集落が標高約 85ｍなので、およそ 190ｍの山越えとなり、標高約 95ｍの滝原里集落に至る。石畳は敷かれていないが、基盤の結晶片岩が路面に散らばっているため、一部で敷石がなされているように見える。

以下、車道用の拡幅がなされていない山道の状況を三瀬川側から順次見ていく。先述の山道に入った時点で、道幅は約 2.6ｍとなる。40ｍほど進むと、水流のある谷を渡るため左に折れ、尾根頂部の左を通る。道は基本的には山寄せ型だが、一部で深さ約 1.8ｍの縦開削型を呈している[7]。基本的には尾根筋に登り切ることなく屈折を繰り返すが、小規模な尾根を横切る際には横開削型も見られる。

なお、三瀬坂峠道には現在の熊野道に先行すると見られる旧道が随所で確認できる。峠の北側、三瀬川側では、大きくａ～ｃの３ヵ所で見られる（図 139）。区間ａは、現道よりも進んだ地点で水流のある谷を渡っていた道である。谷を渡った後は尾根を横切るため、横開削型の道が残っている。区間ｂも、現道以上に屈曲を繰り返しながら登る道である。区間ｃは、現道よりもやや低い位置で、並行するようにたどる道である。

峠に至る。峠では、右（西）側に丘陵斜面を利用した石室（石龕）があり（図 139－４）、左手には２ヵ所の削平地が並んでいる。石龕には宝暦６(1756)年銘の石造地蔵菩薩坐像が東面して安置されている。石龕の規模は、最深部の内法で幅 85 ㎝、高さ 95 ㎝、奥行き 260 ㎝ほどで、外側の貼石を含めた幅は 5.3ｍである。石材は周辺で採取可能な結晶片岩を用い、天井石には横幅１ｍを超える大型石材を２枚以上使っている。石龕の前には、結晶片岩の岩

図 139　三瀬坂峠道(1/8,000)

塊を一部抉って造作した手水鉢、明治９(1876)年銘の供養塔等がある。また、石龕南側には 20 ㎡ほどの平坦地が造作されており、もとは石龕に伴う何らかの施設があった可能性がある。

峠の左(東)側は削平地が道沿い(南北)に２ヵ所並んでいる。削り出しによる造作で、中央を土塁のようなもので区切られている。この土塁状高まりは東側の山へ続く道となっており、山道を残して削平した結果、この形状になったと考えられる。北の削平地は 60 ㎡ほど、南の削平地は 75 ㎡ほどである。江戸末期まではこの削平地に茶屋があったという記録がある。神宮文庫蔵『文政十二年摂末社巡回記』の挿図(図 140)には、石龕の正面に「此所小屋のあとなり」と書かれており、文政 12(1829)年頃には茶屋が無かったと考えられる。また、この挿図では石龕に木柵が設置されている。なお、嘉永６(1853)年に刊行された『西国三十三所名所図会』には、先の挿図で小屋跡とされる位置に休憩所のような掛小屋が描かれている(図 141)。

図 140　三瀬坂峠(『文政十二年摂末社巡回記』神宮文庫蔵)

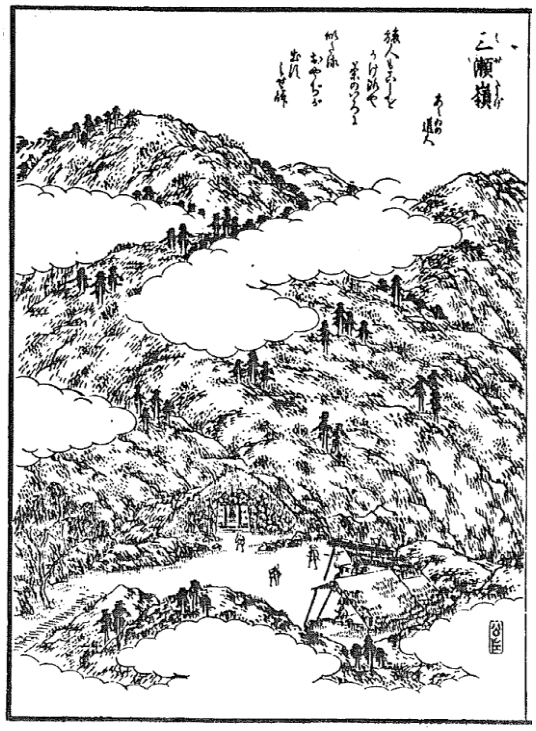


図 141　三瀬坂峠(『西国三十三所名所図会』)

【三瀬坂峠の地蔵】砂岩製。坐像・蓮華座・台座それぞれを別石で組み合わせる(図 139－３)。方形台座の正面に銘があり、京都村崎野(紫野)の大法寺清祐院と、三瀬川村(現在の大紀町三瀬川)の施主名等が刻まれ、宝暦６(1756)年の銘がある。なお、京都紫野の寺院が関与した峠の石仏は、熊野道甫母峠(尾鷲市曽根町)にもある。

(銘)京村崎野大法寺／清祐院内／願心本／禅□浄作／施主三瀬川村／吉田作右エ門／宝暦六丙子年／正月吉日／一切惣施主

峠から南へ、滝原方面へと降る。このあたりの道幅は約 1.7m である。峠を越えると、直線的で急な下り坂がしばらく続くが、これは近年の土砂崩落で再設置された道である。その後は水流のある谷の西側を、屈曲しながら降りていく。基本的には山寄せ型の道で、小規模

な尾根を横切る際には横開削型となる傾向は峠の北側と同様である。三瀬坂池の手前で、道の左（東）側に石積みが３地点ほど見られ、猪垣とされている。三瀬坂池は文化２(1805)年に築かれた[8]ので、池の真横の熊野道は池築造以後のものである可能性が高い。堰堤の東には、池の築造時と同じ文化２(1805)年の銘が刻まれた「八柱大神」の石柱と祠跡があり、「水神様」と呼ばれている。

峠の滝原側でも、現道以前の旧道が随所で確認でき、大きくｄ・ｅの２ヵ所に分けられる（図 139)。区間ｄは近年の復旧道付近にあたる。ここでは、復旧前の旧道が、現道（復旧道）の直下で確認できる。区間ｄの南端では、旧道よりもさらに古い道の痕跡が見て取れる。区間ｅは、現道よりも手前で屈曲して降る道である。

○滝原

野後里の道　熊野道は三瀬坂池の西岸を通り、三瀬坂池から流れる小川を渡る。今でも小川には飛び石が配されており、往時の景観を残す。ここから大紀町滝原の平地部へと入る。現在の滝原は、江戸期には北部を「野後里（のじり）村」、南部を「岩内村」といい、二村を合わせ「野後両郷」呼んでいた[9]。三瀬坂峠道を降りた先は旧野後里村である。

三瀬坂峠道南端の小川を渡ると、熊野道は国道 42 号を横切って西へと向かう。アスファルト舗装された道である。国道との交差点から 260mほど進むと、道は三つに枝分かれしている（図 142)。このうち、中央の道は周辺の地割りを無視した線形を呈しているので比較的新しい。中央のこの道を除くと、熊野道はここでＴ字路となる。このうち、明治期までの主要道は、Ｔ字路を東へ曲がる（「野後里東道」と呼称する)。野後里東道は国道 42 号を横切り、宝積寺や中世の城館遺跡である野後城跡が位置する丘陵の手前で南に折れている。野後城跡の手前付近には、かつて一里塚があったとされ、それを示す碑が民有地に建てられている（坂本一里塚跡伝承地、図 143)。この一里塚は、正徳２(1712)年に幕府の巡検使が奥熊野（三重県の東紀州地域付近）を検分する際に、当

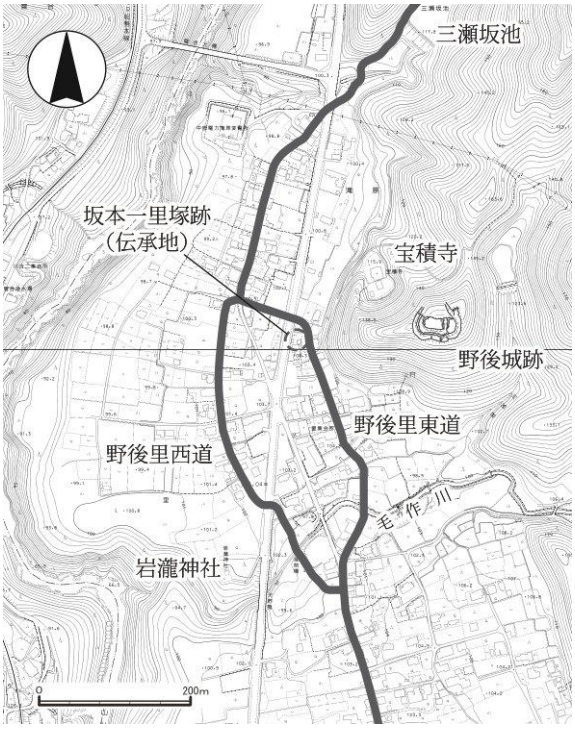


図 142　滝原野後里地区の道(1/8,000)

図 143　坂本一里塚跡伝承地

時の和歌山藩主であった徳川吉宗が整備したとされる[10]。野後里東道はそのまま南下し、毛作川を渡る。

先述のＴ字路を西に曲がると、数メートルで南へ屈曲する（「野後里西道」と仮称する）。野後里西道は毛作川を渡ると畦道となり、その先で野後里東道と合流している。毛作川を渡る手前の西側川岸には大滝神社（岩瀧神社）がある。本殿は神明造である。

なお、江戸期に熊野道の本線とされたのは野後里東道だが、野後里西道はそれ以前の熊野道であった可能性がある。すなわち、野後里地区では、集落内で参詣道が複線化していたと考えられる。集落内主要道の複線化は、その典型例として伊勢山田（三重県伊勢市）や近江水口（滋賀県甲賀市）があり、三重県内では津市安濃津柳山遺跡や玉城町楠ノ木遺跡でも見られる[11]。いずれも交通の要衝ないしは「都市」的な場である。今後、野後里地区もそのような場であった可能性を念頭に置いた検討が求められる。

【野後城跡】参詣道からの比高約 65m（標高約 165m）の丘陵先端部に築かれた中世の城館遺跡。背後の丘陵とは堀切で遮断し、帯曲輪と主曲輪で構成される東西約 70m、南北約 35mの小規模なもの。帯曲輪には竪土塁が伴う[12]。立地から、熊野参詣道との関係を重視して築城された可能性がある。

【宝積寺】現在は曹洞宗寺院。寺伝では文和２（1353）年の草創とする。現在の本堂は桟瓦葺・入母屋造で明治 30（1897）年の建立[13]。立地から、境内は野後城跡の曲輪の一部である可能性も考えられる。

瀧原宮・瀧原並宮　熊野道はそのまま南下し、瀧原宮・瀧原並宮（ならびのみや）（以下、二宮を合わせ「瀧原宮」とする）の神域を形成する樹林へと進む。その手前は「木戸口」と伝えられており、江戸期には木戸があったとされる[14]。木戸口付近から左手に、現在の樹林を突っ切るかたちで「かけぬけ道」とされる[15]道があり、瀧原宮へと通じていた（図 146）。熊野道を南に向かう参詣者はこの道を通って瀧原宮へと向かったようである。「かけぬけ道」を通らずに熊野道本線を進むと、左手に瀧原宮一の鳥居が見える。右手にはかつて神宮寺があった。

神宮寺は瀧原宮の別当寺で、法楽舎とも呼ばれていた。現在その跡地には祖霊殿（秋津教会）の建物が建つ。『西国

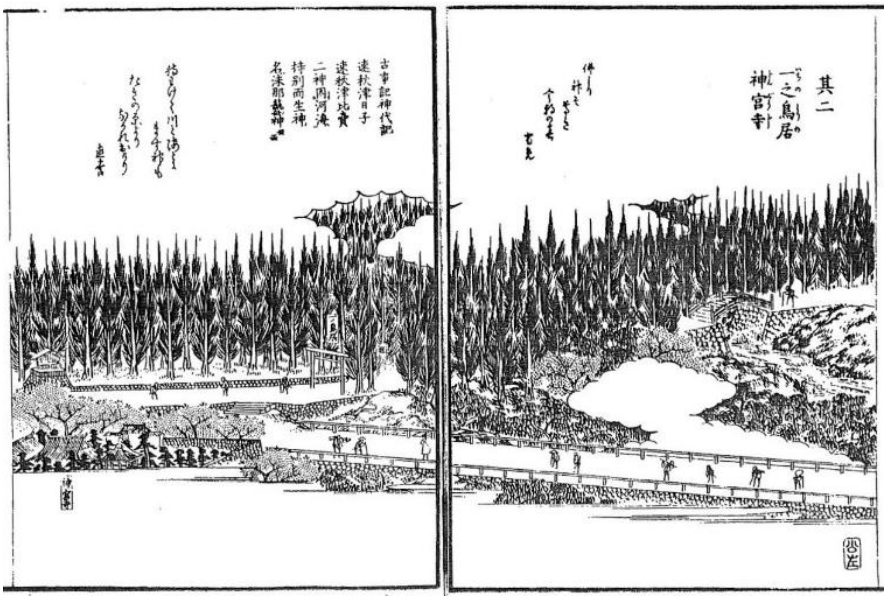


図 144　神宮寺と瀧原宮一の鳥居（『西国三十三所名所図会」）

三十三所名所図会』（嘉永６（1853）年）では、瀧原宮一の鳥居前の風景が描かれており（図 144）、神宮寺は石垣塀に囲まれた境内に、入母屋造の本堂らしき建物と宝形造の堂舎が見える。『西国三十三所名所図会』の本文には「本尊ハ不動明王を安し、別に卅三体の観音堂あり」と記されており、宝形造の堂舎が観音堂と考えられる。境内に三十三躰観音を祀った観音堂があることから、神宮寺は西国三十三所観音巡礼と縁のある場であったと考えられる。なお、神宮寺で祀られていた元和 10（1624）年銘の木造十一面観音坐像と三十三観音の一部は、現在は宝積寺の客仏として安置されている[16]。

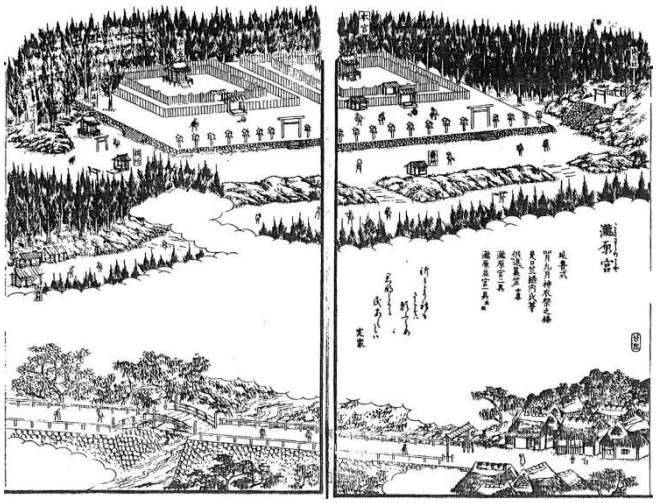


図 145　瀧原宮（『西国三十三所名所図会』）

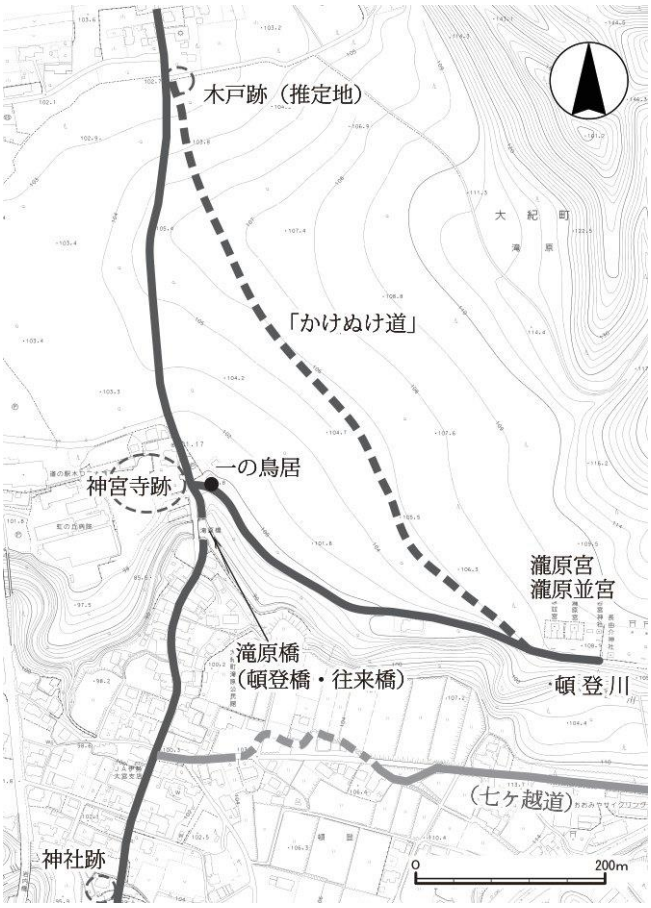


図 146　瀧原宮周辺と滝原頓登の道（1/8,000）

瀧原宮は伊勢内宮の別宮である。滝原を通る熊野参詣者がほぼ立ち寄ったと見られる（図 145）。瀧原宮・瀧原並宮ともに茅葺の神明造で荒垣・瑞垣で囲われている。現在の境内には若宮神社・長由岐神社の社殿も祀られ、こちらは板葺きである。南を流れる頓登川が伊勢内宮の五十鈴川に見立てられ、川岸に手水場も設けられている。

滝原頓登の道　現在の頓登（とんど）川に架かる滝原橋（頓登橋、往来橋とも）の東に旧橋があった。ここを南に渡ると滝原頓登地区に入る。『西国三十三所名所図絵』には頓登川に架かる木橋と川岸の石積み、頓登側集落の風景が描かれている（図 145）。ここは江戸期には岩内村と呼ばれていた[17]。熊野道は道幅約４ｍで、アスファルト舗装されている。さらに南へ進んだ先の巾田河内川に架かる祝詞橋を境に道は屈曲するものの、線形は比較的直線に近い。東の山麓には瀧原院がある。

なお、頓登川沿いの丘陵部を東に進むと、七保峠を経て宮川南岸を東へ進む道となる（七

ヶ越道、図 146)。この道は伊勢神宮と瀧原宮とを結んでおり、神宮の使節のほか、西国巡礼に向かう庶民もまた利用していたという[18]。

【瀧原院】現在は曹洞宗寺院。寺伝では現在地よりも南方の大内山川岸に長禄２（1458）年に建立された青龍寺が前身で、万治２（1659）年に現在地へ移り、名称変更したという。神宮寺が廃された後、本尊の木造不動明王坐像は本寺に移された。

長者野の峠道　大内山川寄りに「金山（かなやま）」と呼ばれる独立丘陵があり、熊野道はこの丘陵東裾の谷沿いを通る。このあたりを長者野（はぶの）という。大宮保育園の付近は「七本松」とよばれ、この付近に一里塚があったという（図 147)。この一里塚は、坂本一里塚（前出）と同時期の、正徳２(1712)年に設置されたと伝わる。

さて、七本松一里塚跡（伝承地）付近から南に向かう熊野道は、これまでは国道 42 号により完全に失われているとされてきたが、今回、その一部の残存を確認した（図 147)。

七本松一里塚跡（伝承地）付近は現在植林地だが、林内にかつての熊野道が残っている。道はそこから丘陵斜面を西に登り、途中で二手（西道・東道）に分かれる。東道は国道と接する手前で東に折れ、そこに石積み１が見られる。国道を挟んで東側はやや不明瞭で、尾根上の鞍部（峠）を経て西へ向かう。峠以西は、尾根筋の直下に山寄せ型の工法で造作した道となる。ここでは、谷側の南斜面に石積み３が造作されている（図 148)。

西道は、東道との交点から丘陵斜面をさらに登り、強く東に折れて丘陵尾根近くまで進む。途中には石積み２が見られる。国道を挟んで東側は、石積み３よりも西側で東道と同じルートをたどると考えられる。

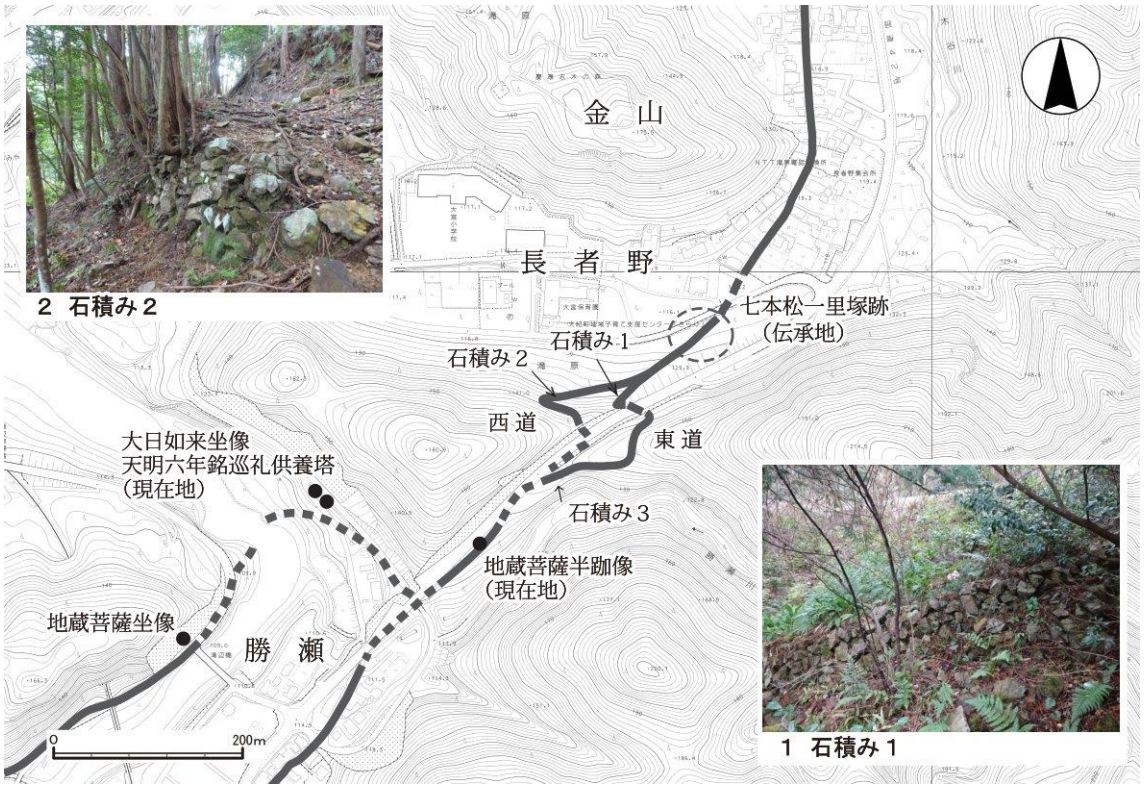


図 147　滝原長者野から阿曽勝瀬の道(1/8,000)

東道・西道の合流後、しばらく南に降ると国道42 号で延長 40mほどが削り取られているが、さらに進むと国道の東隣りに残された道が現れ、90mほど続く。勝瀬の集落の入り口付近は国道の盛土内に埋もれている。

この途中に、寛政４(1792)年銘の石造地蔵菩薩半跏像がある。この石造物は、現在は国道 42 号側を向いて西面するが、もとはこの位置付近で東面していたと考えられる。

図 148　長者野の峠道南側（石積み３）

○阿曽

勝瀬の道と巡礼供養塔　長者野の峠道を越えると阿曽勝瀬地区に入る。峠道を降りた先には、かつて旅籠（坂本屋）があり、その付近には天明６(1786)年銘の巡礼供養塔があった。現在この供養塔は、国道 42 号の改修工事に伴い、西方に移設されている（図 149)。

天明６年銘巡礼供養塔は砂岩製で、正面左上部を欠損する。銘に見える「越後国魚沼郡上田庄塩沢組舞子村」は、現在の新潟県南魚沼市舞子に相当する。寛政８(1796)年、『北越雪譜』の作者として著名な鈴木牧之は、熊野参詣の途中に自身と同郷出身者を供養したこの塔を見て感激したことを『西遊記神郡諸西国順礼』に記している[19]。

図 149　天明６年銘巡礼供養塔

【天明６年銘巡礼供養塔】銘は以下のとおりである。

（正面）実巌道誉居士／越後国魚沼郡上田庄塩沢組／舞子村俗名大野太左衛門

（右面／左面）天明六丙午天／七月十九日

阿曽の道　阿曽勝瀬地区からしばらくは大内山川北東岸の丘陵沿いを進む（図 151)。ＪＲ紀勢本線の踏切を渡って、東へゆるやかにカーブした先に、かつて潮の宮明神があり、現在旧地に平成 16(2004)年建立の碑が建つ。ここは大紀町指定天然記念物の「石灰華（せっかいか）」で、２万年以上前の火山活動により鉱泉が吹き出ていた場所という[20]。江戸後期の作成と考えられる「熊中奇観」[21]にも阿曽の温泉に関する記載があるが、旅人には利用されていなかったようだ。大内山川支流の奥河内川に架かる小川橋を渡ると、熊野道はその堤防をたどるように右へと回り込み、大内山川に架かる落瀬橋を渡

図 150　阿曽観音堂

って阿曽の中心集落へと入る。ここからしばらくは、大内山川の西岸部を進んでいく。

落瀬橋南詰からしばらく進むと阿曽観音堂に至る。単立小型の三間堂で寄棟造、南面して建つ（図 150）。江戸後期頃の建立と考えられる。本尊は木造十一面観音立像（年代不詳）である[22]。境内には、宝永 5（1708）年銘と享和 3（1803）年銘の 2 基の廻国供養塔、宝暦

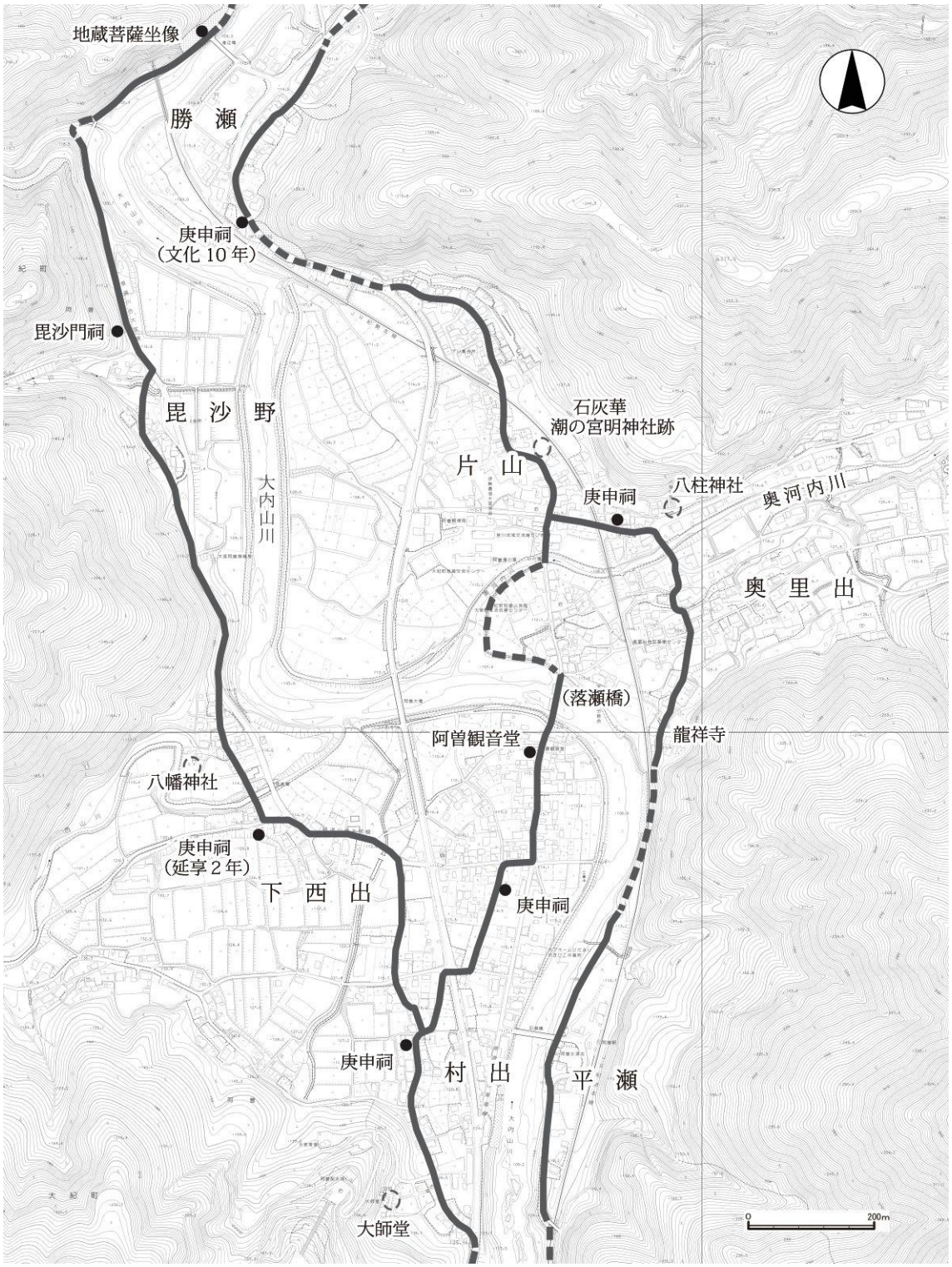


図 151　阿曽の道（1/10,000）

12(1762)年銘の六字名号碑などがあり（図 152)、ここが各種巡礼の要地だったことを物語っている。

道は「L」字形の屈曲を繰り返しながら、阿曽村出地区の南端へと至る。途中２箇所に庚申祠があり、いずれも石造青面金剛立像である。この屈曲は地元で「七曲がり」と呼ばれている[23]。地割りが先にあり、熊野道が後に設定されたことを示している。

図 152　阿曽観音堂境内の供養塔群

阿曽村出地区南端の山裾に大師堂がある。もとは現在地よりも道寄りにあり、江戸期には造立されていたようだが、現在の堂舎は新しい。大師堂前の道をさらに進むと国道 42 号にあたる。ここからは現国道と同じ位置、大内山川の西岸を通って阿曽藤ヶ野地区に至る。藤ヶ野地区でも集落内に熊野道が残るが、拡幅されている（図 153）。文化９(1812)年銘の地蔵菩薩坐像があるが、熊野道との関係は不明である。

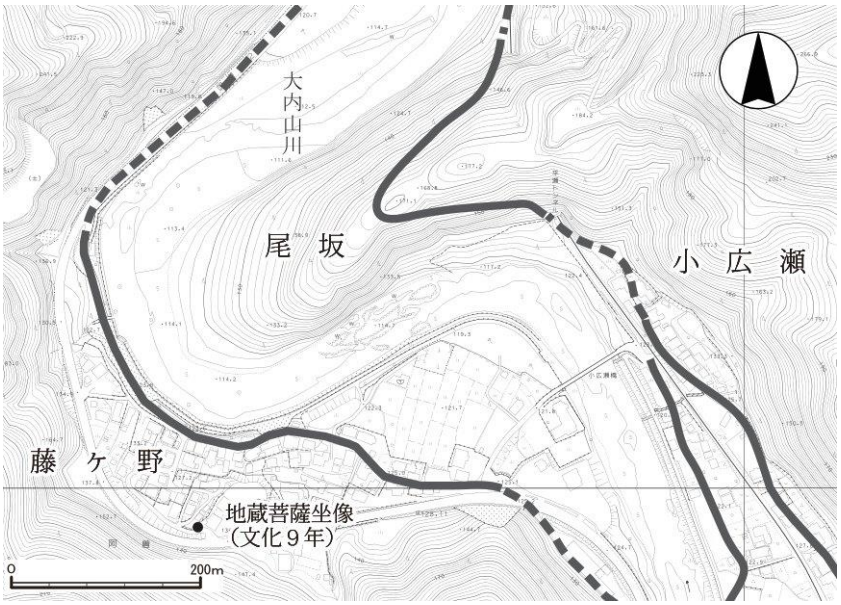


図 153　阿曽藤ヶ野・小広瀬の道(1/8,000)

平瀬・小広瀬経由の道　阿曽に至った旅人が大内山川の増水に遭遇した際、落瀬橋を渡らずに阿曽の奥里出・平瀬・小広瀬地区を経由し、大内山川東岸を南下する道程が採られたようである[24]（図 151・153)。この道は、途中、龍祥寺の門前を通り、山裾から阿曽平瀬地区の大内山川岸を通っていく。そこからはまた山裾の道となり、ＪＲ紀勢本線の平瀬トンネルが通る尾根を越えて阿曽小広瀬地区へと至る。ＪＲ紀勢本線と併走するため、道は各所で分断されている。

平瀬トンネルの上（字尾坂）は、低い峠越えの道となっている。現在は使う人もなく荒れているが、土道として残っている。

【龍祥寺】現在は曹洞宗寺院。境内は江戸期の宝泉寺があった場所。明治期の神道奨励のなかで一時廃寺となったが、明治 27(1894)年に宝泉寺が龍祥寺に合寺されて龍祥寺の寺号となって復活し、明治 43(1910)年にここを寺地としたという。境内には２体の石造青面金剛立像のほか、元禄５(1692)年・文政６（1823）年銘の念仏講中に

よる三界万霊塔などがある。

阿曽滝辺から阿曽村出への道　阿曽勝瀬の大内山川を挟んで対岸（西側）は、阿曽滝辺地区である。大内山川の増水時等は、旅人がここで大内山川を渡った可能性もあるので触れておく。勝瀬から滝辺の渡河場所は不明。滝辺から南は、現在の県道川合・大宮線にほぼ一致する道である（図 151）。全てアスファルト道となっている。

現在の滝辺橋を西へ渡った地点には、石造地蔵菩薩坐像が祀られている（図 154）。現在は県道川合・大宮線の擁壁に作られたコンクリート製の龕内に納まっているが、県道改修以前には岩盤に掘り込んだ龕内に納められていた。像様から 18 世紀代の造立と考えられる。

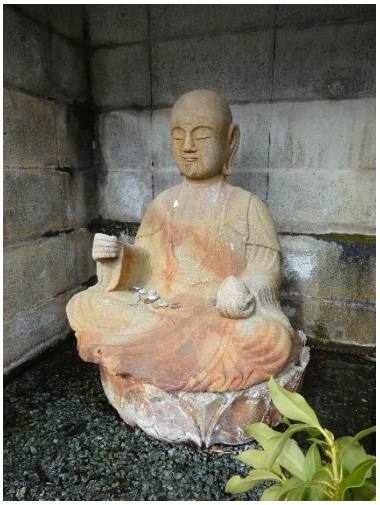


図 154　滝辺の石造地蔵菩薩坐像

滝辺橋の石造地蔵菩薩坐像から南下すると、阿曽の毘沙野・下西出などの地内を通る。熊野道は舗装されているが、丘陵寄りには道幅約２ｍのところも見られる。さらに南下すると阿曽村出地区へと至り、大師堂付近で阿曽観音堂から続く道と合流する。

註

＊寺社の解説は、主に大宮町『大宮町史　歴史編』(1987 年)を参照した。

（１）徳川林政史研究所所蔵。
（２）大宮町『大宮町史　歴史編』1987 年。
（３）『続群書類従』神祇部巻３。
（４）三重県教育委員会『熊野街道』歴史の道調査報告、1981 年。
（５）前掲註(2)文献。
（６）三重県教育委員会『三重県の近代化遺産』1996 年。
（７）以下、道の工法については、三重県『熊野古道と石段・石畳』2007 年、を参照。
（８）『野後村旧記』(明治 23 年、奥山武司氏蔵)。
（９）前掲註(2)文献。
(10) 大宮町教育委員会『大宮町歴史の道』1983 年。
(11) 三重県埋蔵文化財センター『安濃津』1997 年、伊藤裕偉「道と短冊型地割」(藤原良章編『中世のみちと橋』高志書院、2005 年)。
(12) 成瀬匡章「三瀬館の支城か？野後城跡調査」(『伊勢の中世城館』27、伊勢中世城館研究会、2000 年)。
(13) 前掲註(2)文献。
(14) 前掲註(10)文献。
(15) 神宮文庫蔵『文政十二年摂末社巡回記』。
(16) 前掲註(2)文献。
(17) 前掲註(2)文献。
(18) 前掲註(4)文献。
(19) 小倉肇「鈴木牧之と『西遊記神都詣西国巡礼』」(みえ熊野学研究会編『みえ熊野の歴史と文化シリーズ　熊野道中記』伊勢文化舎、2001 年)、三重県教育委員会『三重県石造物調査報告Ⅰ』(2009 年)。
(20) 大紀町教育委員会設置の現地説明板による。
(21) 竹中康彦「「熊中奇観」(和歌山県立博物館蔵)」(『和歌山県立博物館研究紀要』13 号、2007 年)。
(22) 前掲註(2)・(10)文献。
(23) 前掲註(10)文献。
(24) 前掲註(4)文献。

９　柏野から梅ケ谷

○柏野・崎・大内山

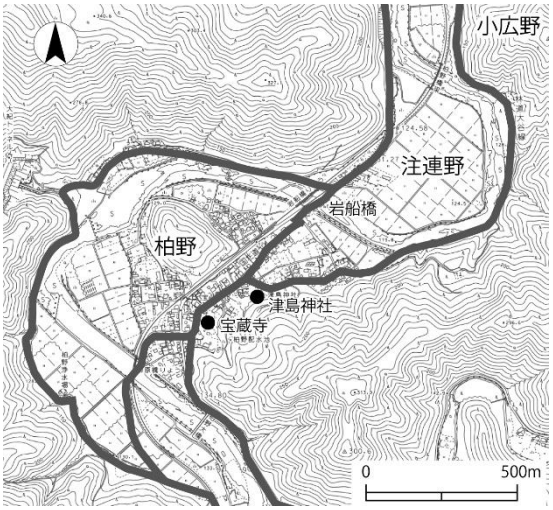


図 155　柏野の道（1/25,000）

柏野の道　阿曽藤ヶ野から柏野注連野（かしわのしめの）へと至る近世の熊野道は判然としない。かつては、山際に古道があったとされるが、鉄道の敷設と国道の拡幅により地形は大きく改変された。付近にはほ場整備された水田が広がるが、ほ場整備以前には、“おかい場”（御茅場）と呼ばれる草地があり、瀧原宮に所縁のある茅場であったとされる[1]。岩船橋を渡ると柏野の集落に至る。

図 156　大内山川右岸の道（柏野）

先述のとおり大内山川は大水の時は渡河できない箇所があり、迂回路を取らざるを得ない。小広瀬から柏野まで大内山川右岸の川岸を進む道が断続的に残っている（図 155）。岩場を掘削して作られた幅約 1.8m の道で、開削された年代は不明である。この道は、柏野集落に入ると山際を進み、津島神社の前を通り、熊野道に合流する。

図 157　大皇神社の道標

熊野道は岩船橋の西側で国道 42 号から分岐し、並行する。分岐後、西に約 300m進むと迂回路と合流し、さらに約 200m 西進すると道の東側高台に宝蔵寺が所在している。宝蔵寺を過ぎると、交差点があり西側に続く道が熊野道である。かつては、この交差点に享保４（1719）年の銘を持つ「左　大水の時　熊野山道有」と書かれた道標があった[2]。昭和 55（1980）年度の調査時点では付近の民家に移築されていたが、現在はその所在は不明である。大水の際は、柏野から沼ヶ野を経て下崎、崎へと至る道が用いられた。この道は国道 42 号と重複しており、当時の道の線形等は不明である。

崎の道　宝蔵寺前の交差点を西に進み、国道を越えると街道は大きく南に曲がりながら大内山川に突き当たる。この地点を渡河し、川沿いに南進すると庚申塚がある。庚申塚から約 500m南進すると熊野道は川沿いから山際に移る。大皇神社の境内には、下半が埋没した「左いせ□」の道標がある。約 700m南進し皇大神社の前を過ぎると、山際まで大内山川が接近する。この付近はかつて岩盤が突出した地形で、近代以降に開削が進み、鉄道や道路が敷設された。皇大神社の前には約 100m 近世以前の道の痕跡をとどめる道が残っている。道の脇

には、元文５（1740）年の銘を持つ庚申塔、少し離れて弘化４（1847）年の銘を持つ子安地蔵が祀られている。また、付近には長野の伴助屋という名前の宿屋があったとされる。そこから約 100m西進すると、崎村橋がある。かつての熊野道は JR 伊勢柏崎駅の南側、川辺の土手道であったとされるが、河川改修により土手道は消失している。笠木川の東側で県道伊勢柏崎停車場線と合流し、笠木川を渡り西進すると上野の集落に至る。県道を進むと大内山川を渡る新宮前橋へと向かう分岐がある。この付近で河原に下りる道があったとされ、紀勢自動車道の高架のあたりで大内山川を渡河したとされる。

駒の道　大水の際は新前宮橋を渡らず、大内山川左岸を西進する道が用いられた。紀勢自動車道の高架をくぐり、JR の線路を越えると、大内山川に沿って道は大きく南に曲がる。線路から約１㎞進み再び線路を越えると坂津の集落に至る。

新宮前橋付近の渡河地点は、昭和 55（1980）年度の歴史の道調査の際、右岸に幅１ｍに満たない石畳が残るとされているが、現在は確認できない。大内山川の渡河地点から国道 42 号まで間の熊野道の線形は不明である。鉄道と国道 42 号が接するあたりで、熊野道は国道に合流すると想定される。その後、約 500m山際を南下し、再び大内山川を渡河し、坂津の集落に至る。ここも、大水で渡河できない際は、東側に大きく迂回し、本駒へと至る。山際に古道が約 100m残っている。

坂津集落の北端、JR 紀勢本線の北側に西へと続く山道の入口がある。「坂津越え」（図 158）と呼ばれるこの道は、峠に至るまで、５度大きく曲がる険しい地形であることから、地元では「のど首」と呼ばれている。この峠を越えると旧大内山村字向駒（むかいごま）となる。山道を下ると線路につきあたる。かつての熊野道は線路の南、水田の合間を西進する。この道は大西道と呼ばれる。大西道を進み、駒ヶ瀬橋の東側で渡河し、本駒の集落で国道 42 号に合流する。

図 158　坂津越えの道

駒は、大内山川の右岸、左岸どちらの道が主要道であったのか定かではない。地元では、集落の中心は向駒であり、坂津越えが先に開かれたとの伝承がある。現在、本駒にある国昌寺も寛文年間（1661～1673 年）頃までは向駒にあり、その後、本駒に移ったとされる。

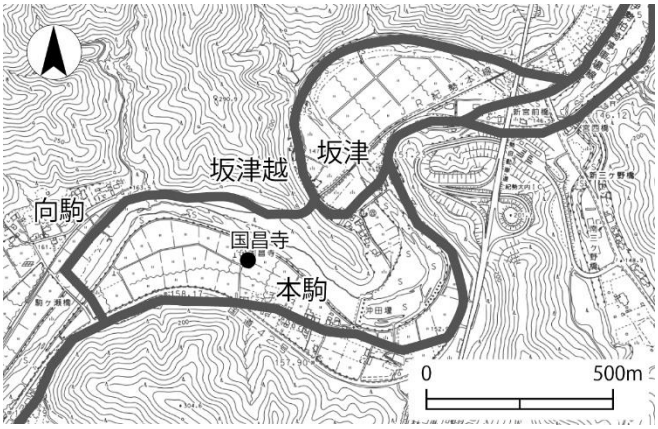


図 159　駒の道（1/20,000）

駒村の位置は文政 13（1830）年の「細見伊勢国絵図」では、大内山川の右岸に描かれ、天保 9（1838）年の「伊勢国天保国絵図」では左岸に描かれる等一定していない。天保国絵図は正保（1644～1647）・元禄（1688～1704）期の絵図を下絵にした可能性もあり、天保期の実情を反映していたとは言い難い。

本駒には、庄屋で旅籠でもあった大西家の玄関に「駒角屋大西吉左ヱ門」の表札が掲げられている。また、大内山川沿いには伝馬所があったとされるが、その場所は定かでなはい。

二つの道は合流後、約 100m 南下すると分岐し、東側の山際の道が熊野道である。分岐後約 150m南下すると松原の集落に至る。集落入り口道路東側に松原の大師堂がある。高さ 1.7m 程の小さな堂で、明治 28（1895）年に再建された記録があり、現在の堂は昭和 35（1960）年に建替られたものである。堂内外には、近世に遡る石造物がある。台座に安政３（1856）年銘を持つ弘法大師坐像、嘉永３（1850）年銘の供養碑、嘉永５（1852）年銘の無尽燈がある。参詣道に関するものでは、十一面観音菩薩立像がある。高さ 63 ㎝、幅 30 ㎝、奥行 18 ㎝で左手に水瓶を持ち、右手は与願印を結ぶ。記年銘はないが熊野参詣道の道中安全を祈願し祀られたものと考えられる。

芦谷の道　大師堂から約 450m南下すると大内山川に突き当たる。三差路の北東隅に、県指定史跡大内山の一里塚が所在する。かつては、樹齢 300～400 年とされる松の巨木が立ち、地元では「一本松」として親しまれていたが、昭和 57（1982）年に枯死し、二代目の松が植樹された。その松も令和３（2021）年に枯死し、現在は三代目の松の幼木が植えられている。かつて一里塚があった場所は、石積とコンクリートで一段高く方形につき固められ、上部に一里塚の

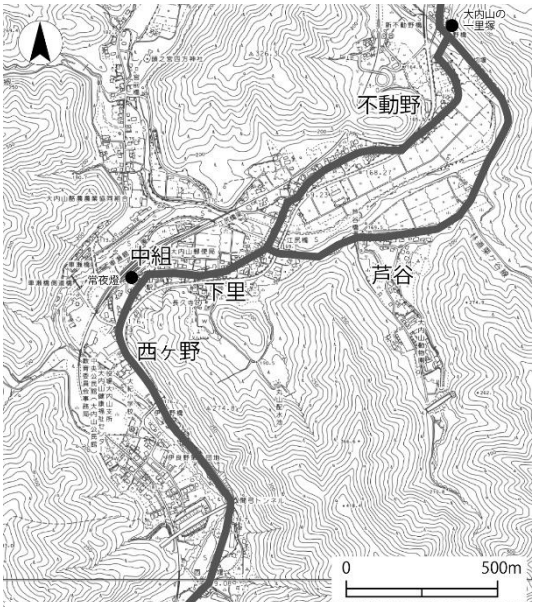


図 160　芦谷・間弓の道（1/25,000）

図 161　大内山の一里塚

図 162　一里塚の地蔵

碑と地蔵菩薩道標がある（図 161・162）。地蔵菩薩道標は高さ 49 ㎝、幅 26 ㎝、奥行 16 ㎝で像右「一番なち山へ二十七里」、像左「願主　大西吉左衛門」とある。明治４（1871）年頃に西国巡礼者の道中安全を祈願して造立されたとされる。大水の際は一里塚から大内山川の右岸にある道を行く。林道と川の間に未舗装の古道が残っている（図 163）。一里塚から約 1.1 ㎞南下すると芦谷の集落の入り口に至る。谷筋には昭和 45（1970）年に動物園が開園している。そこから約 300m西進すると国道 42 号江尻橋南の交差点に至る。熊野道は国道を越え下里（くだり）の集落に入る。

図 163　芦谷の道

図 164　中組の常夜燈

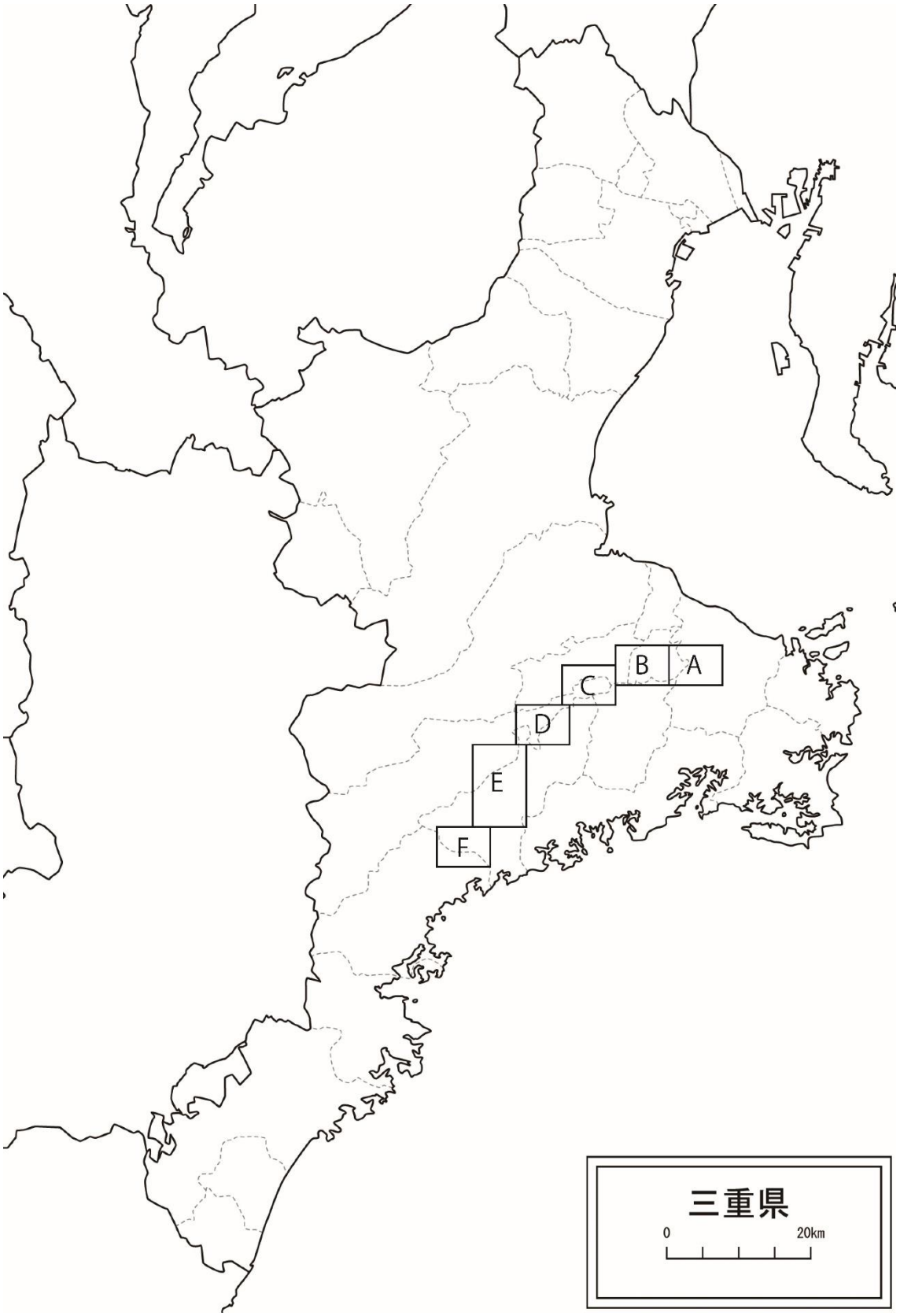
間弓の道　大内山の一里塚の付近で渡河し、不動野の集落を約 1 ㎞進むと江尻橋に至る。ここで大内山川を渡河すると下里の集落に至る。下里・中組（なかぐみ）・西ヶ野（にしがの）を合わせた間弓地区は旧大内山村の中心地であり、大内山駅、郵便局、役場、小学校などが集まっている。江尻橋南の交差点から約 250m西進した地点に、かつて宝永２（1705）年銘をもつ庚申（青面金剛立像）があったが、道路改修の際に近くの長久寺に移設された。さらに約 200m進むと、大紀町指定文化財の中組の常夜燈（図 164）に至る。

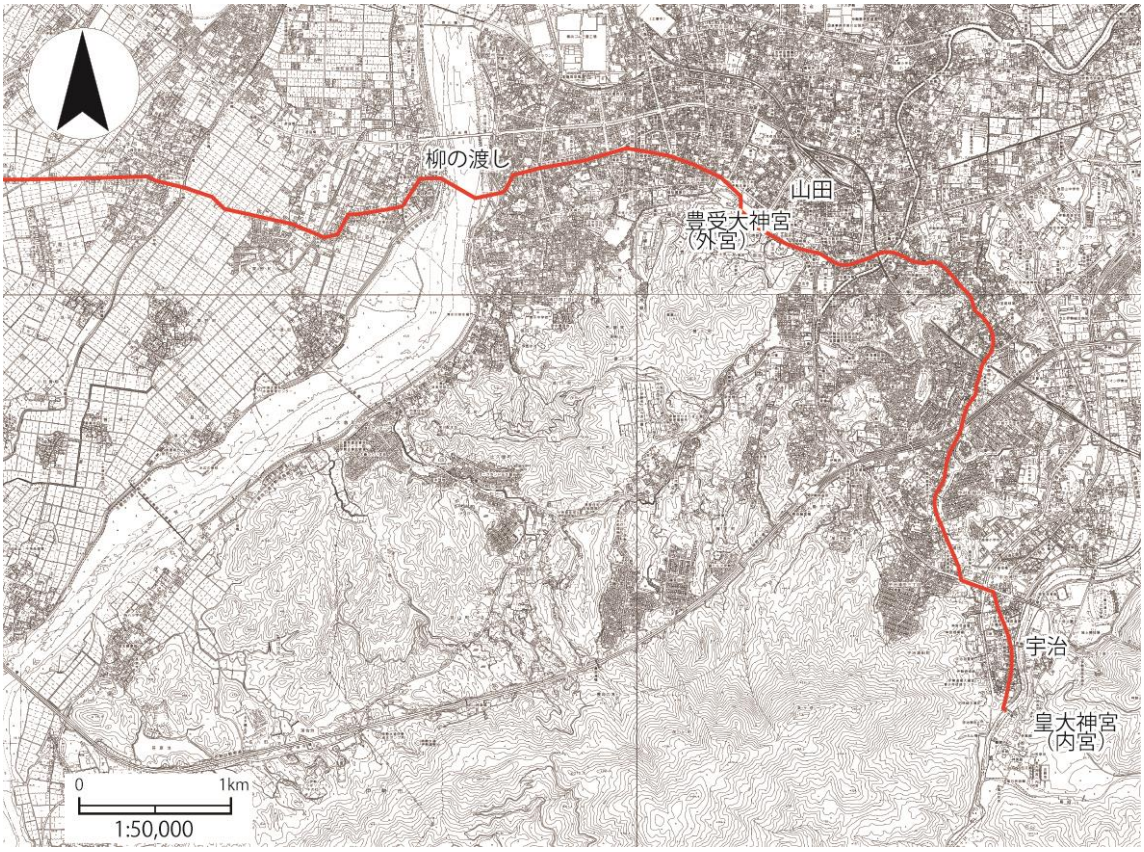
図 165　中組の道標（表面・裏面）

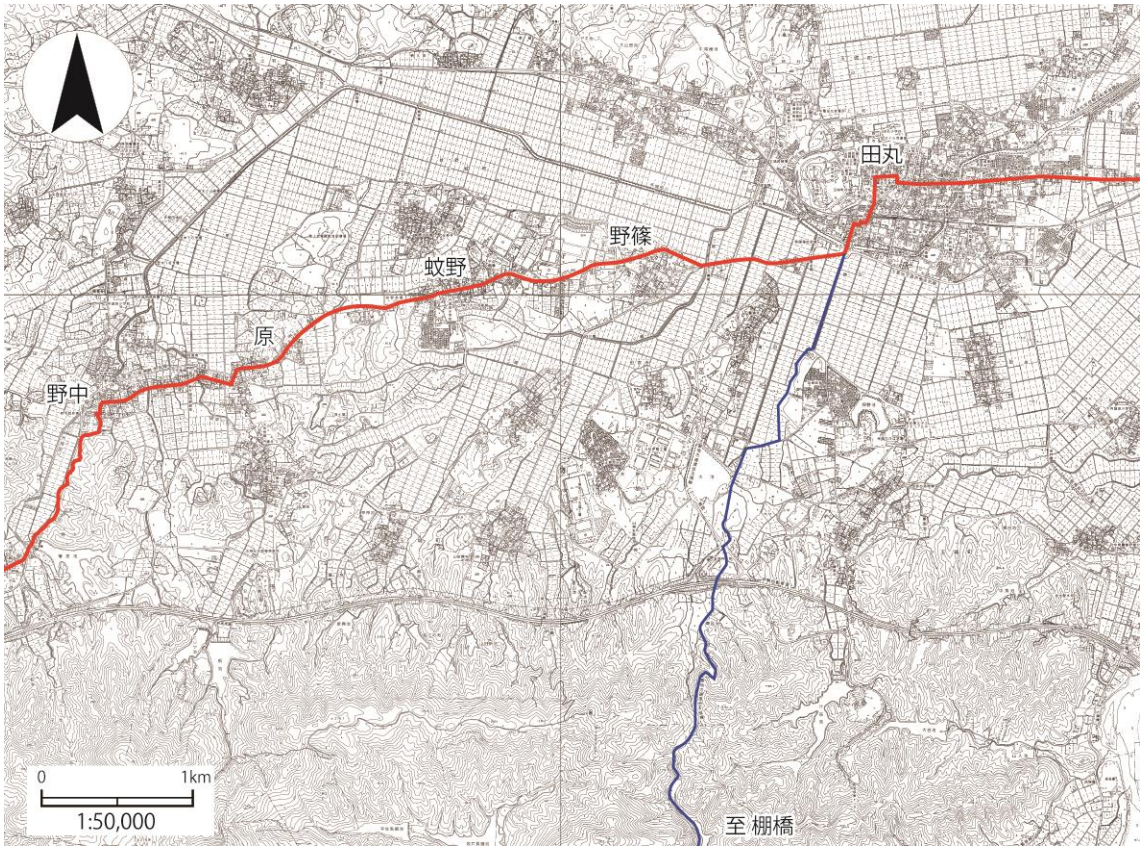
中組の常夜燈は高さ 345 ㎝、木造銅板葺切妻造で、明治 8（1875）年に中組在住の中井国五郎が山田の河崎に保管されていたのを譲り受け設置した。この常夜燈の下には、以前は正面「左くまの」、裏面「施主／源兵衛／安政（1856）三年」と陰刻された道標があったが、現在は大紀町教育委員会の庁舎前に移設されている（図 165）。中組の常夜燈から約 200m南進すると再び国道と交わる。この後、近世の熊野道の痕跡は途絶え、大部分が国道 42 号と重複しているものと推定する。国道と合流後約 1.4 ㎞南下し、大内山川にかかる二股橋を過ぎたあたりに三差路があり、熊野道は東側に進む。分岐してすぐ、東側の山裾に庚申祠があり、青面金剛立像（47×28×28㎝）には右面「小津村中」と陰刻されている。この熊野道も約 200m南進すると再び国道 42 号に合流する。そこから約 500m 南下した地点、梅ヶ谷（うめがだに）駅の北側に交差点があり、南西へ直進する道が荷坂峠、北西へ進む道がツヅラト峠に至る道である。

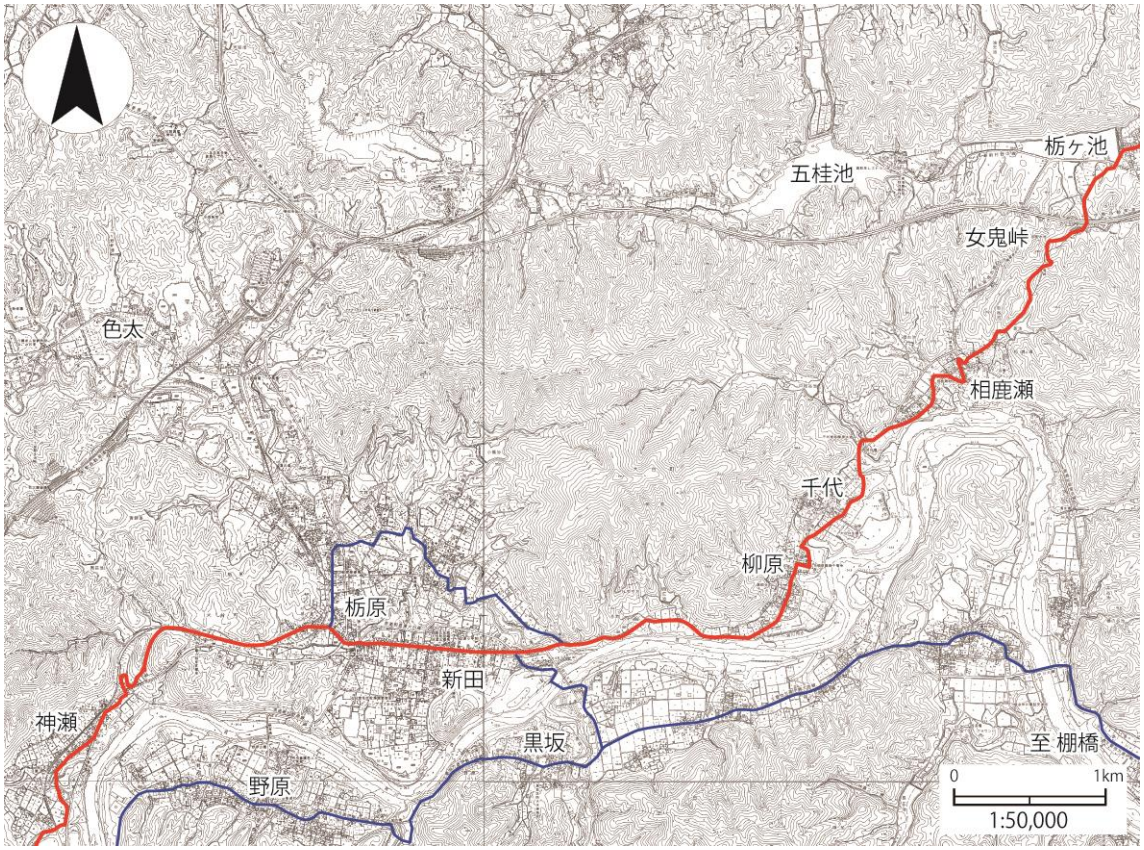
註

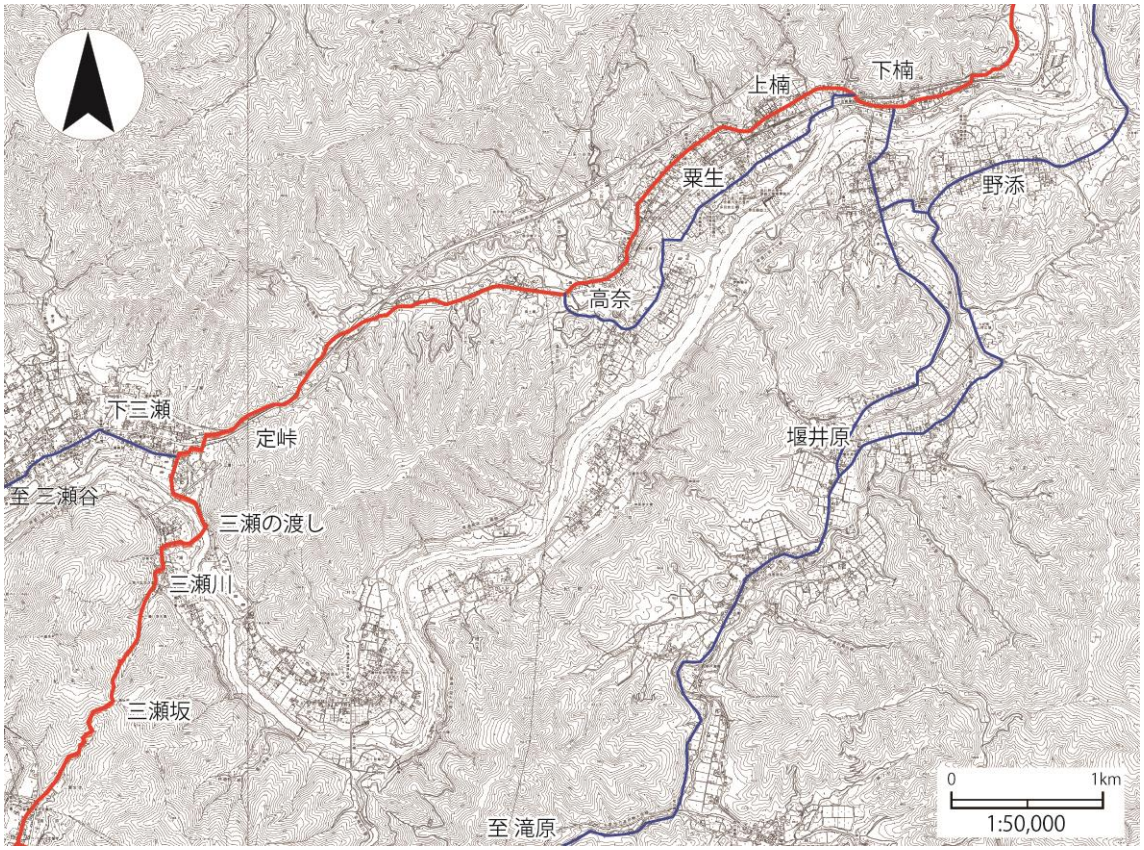
（１）　大内山村史編纂委員会『大内山村史』大内山村、2004 年。
（２）　三重県教育委員会『歴史の道調査報告Ⅰ―熊野街道―』、1981 年。

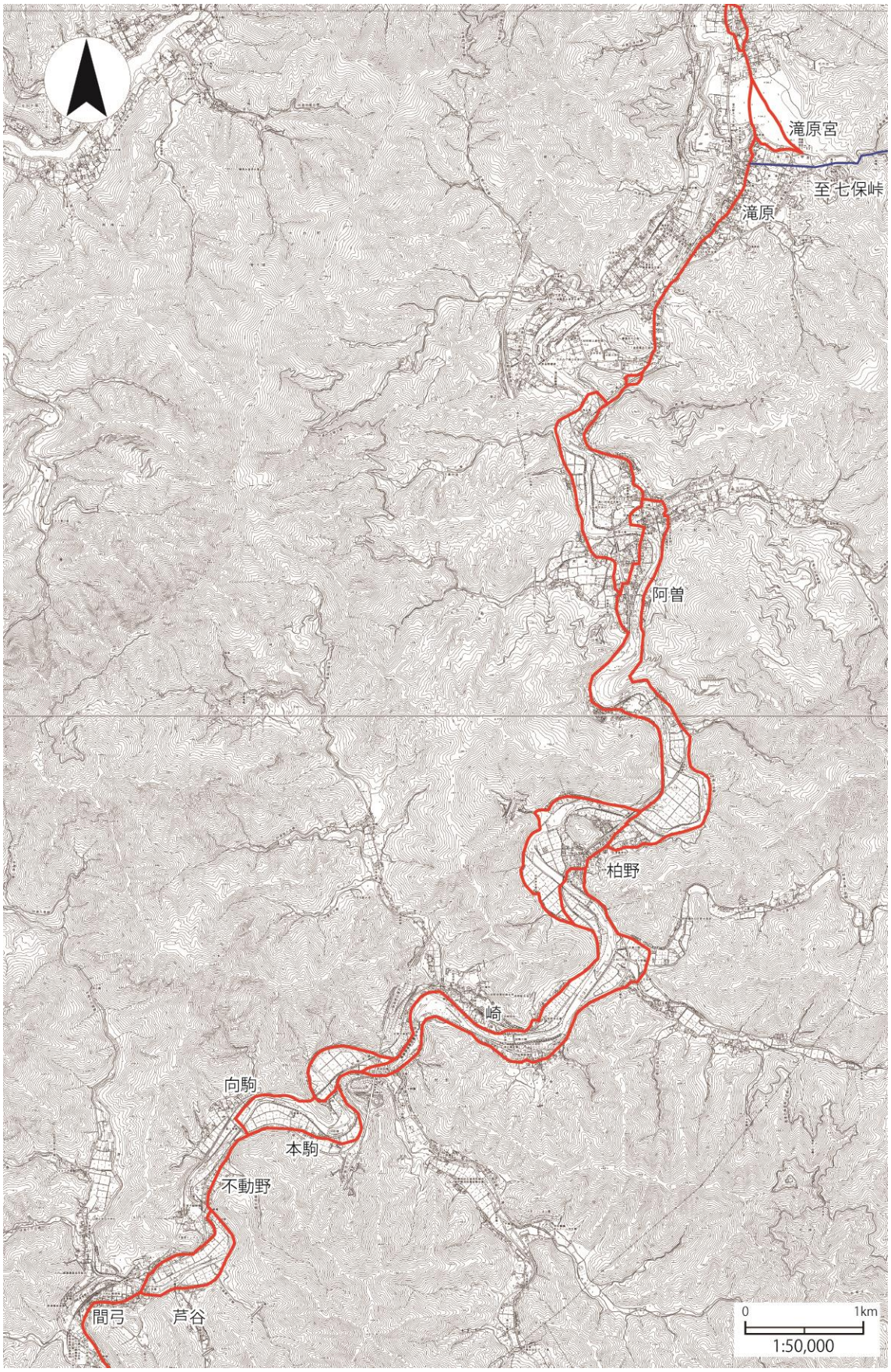

A
B
C
D
E
F
三重県
0
20km

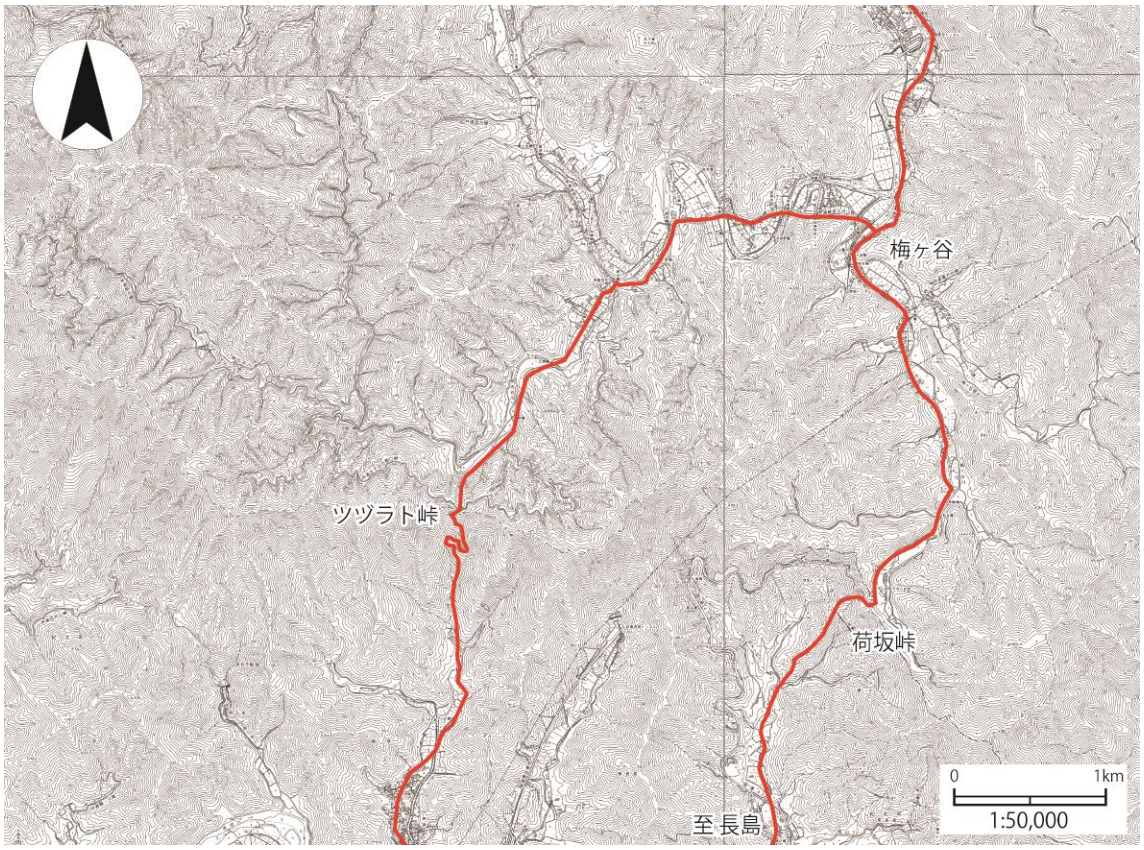

柳の渡し
山田
豊受大神宮
（外宮）
宇治
皇大神宮
（内宮）
0
1km
1:50,000


田丸
野篠
蚊野
原
野中
0
1km
1:50,000
至 棚橋


栃ヶ池
五桂池
女鬼峠
色太
相鹿瀬
千代
柳原
栃原
新田
神瀬
黒坂
至 棚橋
野原
0
1km
1:50,000


上楠
下楠
粟生
野添
高奈
下三瀬
定峠
堰井原
至 三瀬谷
三瀬の渡し
三瀬川
三瀬坂
至 滝原
0
1km
1:50,000


滝原宮
至七保峠
滝原
阿曽
柏野
崎
向駒
本駒
不動野
間弓
芦谷
0
1km
1:50,000


梅ヶ谷
ツヅラト峠
荷坂峠
至 長島
0
1km
1:50,000

熊野参詣道伊勢路調査報告書

（伊勢市～大紀町）

令和６（2024）年３月

三重県教育委員会